タイガー・タイガー・ロンピング・ハイ
TIGER, TIGER, ROMPING HIGH
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

タイガー・タイガー・ロンピング・ハイ

栗山 陸

ワリュウドウ

TIGER, TIGER, ROMPING HIGH

BY RIKU KURIYAMA

2026. 04. 19 / KANSAI KEMOKET 11

目次
CONTENTS

ダブルスリット・イントゥ・サマー
DOUBLE SLITS INTO SUMMER
5

幕間
INTERMISSION
61

ストレンジャー・イン・スタリオンズ・ランド
STRANGER IN STALLION'S LAND
75

寄稿作品・付録
GUEST WORKS & APPENDIX
166

あとがき・奥付
COMMENTS & COLOPHON
173

DOUBLE SLITS
ダブルスリット・イントゥ・サマー
INTO SUMMER

一

　夏の始まりを告げるもの。それはたくさんあるけれど、いくつか挙げろと言われれば、ここにいるひとりの虎の仔がどんな風に一日を過ごすか、その姿が一つの答えになるだろう。

「んくっ……んく」

　例えば、キンッと冷えたジンジャーエール。家族がみんな飲むから、かれもいつしか飲むようになっていた。ちょっぴり苦くて辛いやつの方が、すこしオトナっぽい感じがする。

「ぷは」

　窓の外を眺(なが)めてみれば、世界はこれ以上ないくらいに鮮やかな色で光り輝いている。きっと灼熱(しゃくねつ)のような暑さだし、汗だって嫌というほどかくだろう。それでもかれの瞳には、そこで待ち受ける楽しいことしか見えていない。

「ああ〰〰……」

　それから、この古臭い扇風機。きっとかれが生まれる前からこの家にあるものだ。柔らかな黄金と黒色の毛皮をそよそよと靡(なび)かせるその風が、かれの声を宇宙人みたいに変えていく。

「……うん、よし。じゃあ、いってきまーす」

　いつものタンクトップと短パンに着替えると、足元には履(は)き潰(つぶ)し気味のサンダルを引っかけ、玄関の戸を開けて、駆け出していく。夏休みの宿題はどれも丸っきりの手つかずだが、なんといってもまだ七月だ。焦る必要は全然ない。

　道ばたで見知った顔を見かけて、駆け足の勢いは少しだけ弱まった。近所に住む同級生で、薄茶と白の斑(まだら)模様、少し背は低いが狸としては平均的な体格。途端にかれの目はキラリと輝き、獲物を狩る虎さながらに、姿勢を屈めて物陰に潜む。相手に気付かれないよう、逸(はや)る息を抑えてじっとチャンスを待ち——

「隙あり！」
「む、アキホ！　その手は食うか!!」
飛びかかってズボンを脱がそうとした虎の手は、虚しく空を切る。勢い余って姿勢を崩したかれに、狸の少年は腕組みをして勝ち誇った笑みを浮かべる。
「だぁれがそのワザ教えたと思ってんだ！」
「ちぇー」
狸の顔は一見真面目そうに見えるが、実のところはよく一緒にいたずらをしたりして、先生に雷を落とされやすいツートップになっている。
そんなわけでこの取っ組み合いがふたりの挨拶代わりなのだった。
「で、どっか行くん？」
問い掛ける狸に、アキホと呼ばれた虎の仔はんーと首を傾げる。
「やー、特に何も考えてないけど、虫取りにでも行こうかなって」
「網もカゴも持っちょらんじゃん」
「あ、……ホントだ。あちゃー、おれ気付かずに出てきちゃった」
「バーカ」
「エノシタには言われたくないしー」
軽い口喧嘩も交え、他愛もない話をしながら、縞模様とまだら模様の毛皮が田舎の道を並んで歩く。種族は違うが背丈もそこまで変わらないので、小突きあったりじゃれついたりするにはちょうど良いのだった。
「……んでさー、マーくんにも聞いたけど、知らないっていうし……」
「出たよ、名探偵アキホ。もう良いじゃん、ただの偶然だろ？」
「マジのミステリーなんだって。昨日アップされてた動画のと同じ！」
駄弁りながら来たのは通り道にある昔ながらの駄菓子屋。この辺りは程よく、いやかなり田舎の方なので、古びた店構えも、切り盛りするおばあちゃんも、まだまだ現役だ。

ふたりはアイスを買って食べつつ、よくある学校の七不思議的なウワサ話に熱中していた。しかし飽きっぽい男児たちの常で、話題はころころと移り変わる。
「そこの林ですげーでっかい虫がいたって聞いたから、見に行きたくてさ」
「あーミナミが喜びそう」
「誘って一緒に行こっか」
「昼飯食ったあとならな！」

そんな感じで午後の約束を交わし、ふたりはそれぞれの家に戻っていく。「あぢーっ！」と叫ぶように玄関をくぐった虎の仔は、土間にサンダルも脱ぎ散らかしたまま、冷房が効いた居間の扇風機前に直行し、再び宇宙人の声をこの地に呼び戻すのだった。
「スウ！　いつも言ってるだろ、靴はちゃんと揃えとけ！」
「ええ〰〰面倒臭い……それよりご飯まだ？」
「なんだお前、生意気言いやがって……」
「わーー兄ちゃんバカ‼　暑い‼　苦しい!!!」
自室から出てきた兄に羽交い締めにされて、かれは必死で叫ぶ。とはいえその声はやがて笑い声に変わり、いつものことでやれやれといった感じの母親に叱られるまで兄弟のじゃれ合いが続くのだった。

軽く昼食を食べた後は、今度こそ虫取り網とカゴを携えて、友達と待ち合わせの場所に急ぐ。さっき別れたばかりの狸が、ハンディファンを片手に持ち、暑そうな顔で待っていてくれた。
「あ、アキホ。遅せーぞ」
その隣には打って変わって上品そうな雰囲気の鹿の仔がいたが、
「でっけ〰〰虫がいるんでしょ、早く早く」
口を開けばこの通り、見た目と声に騙されやすいが、ふたりとはさほど程度の変わらない悪ガキだ。

がさがさと下生えを掻き分けたり、大きめの木によじ登ったりして虫の居場所を突き止め、タイホする。それが今回の仕事だった。

　木々に囲まれ、響く蝉の声。じめじめした空気に漂う草いきれ。降り注ぐ日差しは容赦なく肌を灼くが、それにも負けないやんちゃ盛りの男児たち。

　そんな風に駆け回っていると段々太陽の位置も低くなっていき、よい子は家に帰りましょうという放送が聞こえてくる。

「もう帰らなきゃな」

「うん、明日のプール、一緒に泳ごうぜー」

「じゃ、また明日ね」

　そんな風に口々に言いながら、虫取り特捜隊はそれぞれの家路につくのだった。

　帰宅後、ソファーでごろごろ寝そべりながらゲームをやっているうちに、父親が帰宅して、夕食の時間になる。

　いただきます、と手を合わせるが早いが、ご飯もおかずも爆速で食べていく。兄も中三、ぼんやりしているとどんどん食べられてしまう。というより父親も肉体をよく使う仕事なので、総じてこの家族はよく食べる。そんなわけで母親もそれに見合う量をちゃんと用意しているから、本当はそこまでがっつく必要もないのだが。

　そして案の定、食べ方が汚いと父親の怒鳴り声が飛んでくる。そんなこんなでバタバタしているうちに寝る時間、明日のプールを楽しみにして眠りにつく。結局宿題には一度も手を触れなかったけれど、まあ、明日以降のかれがなんとかしてくれるだろう。

　ざっとこんなところが、かれの一日。去年とも一昨年ともほとんど変わらない、これ以上ないほど典型的で理想的な夏休みの始まり。この夏、かれの運命を丸っきり変えてしまうような出会いがあることなど、いまだ知る由もなく、その予兆すらもなかった。

＊　＊　＊

昨日と同様、絵に描いたように鮮やかな夏の青空の下。時間は正午をすこし過ぎて、太陽の輝きがまさに最高潮を迎える頃。小学校のプールサイドに、元気な声が響き渡る。

「せんせー、おはよーございまーっす」

昨日も全力で夏を満喫していた虎の男の仔が、屈託のない笑みを浮かべていた。

「ん？　おお、来たか。秋穂！」お前は今年も初日から張り切ってるなあ、秋穂！」

「へへへー、まあね。プールカード、全コンプ目指してるし！」

そういって男児の差し出した紙切れを、プールの入口に立っていた教諭は受け取って、確かめる。カードの表には『プールカード』の文字と、『四年二組　秋穂枢沙(アキホスーシャ)』という名前が書かれている。裏面には格子状の欄が描かれているが、全て空白のまっさらな状態だ。その左上隅、一日目の欄に、先生は赤いスタンプを捺(お)す。

「元気なのはお前の取り柄(とりえ)だもんな。実に良いことだ。けどなあ……」

と、先生は秋穂と呼び掛けた児童に視線を戻す。いかにも待ちきれないと言いたげに尻尾をそわそわと動かし、目をキラキラと輝かせるその様子に、眉間(みけん)を少しきつめに抑えながら、言葉を続けた。

「いいか？　こんなこと、何度も言いたくはないんだがな、去年みたいにはしゃぎすぎて、周りに迷惑をかけるんじゃないぞ。頼むから」

「分かってるって。はしるなー、とびこむなー、えーと、それから」

「友達の水着を脱がすな」

「……ちぇっ」

「当然分かってると思うが、自分の水着を脱ぐのもダメだからな？」

「うんうんおっけー、じゃあね、せんせー！」
返されたカードを受け取った途端、逃げるように更衣室へ駆け込んでいく虎の仔を目で追って、
「だから、走るなって言っただろ!?」
さっそく声を上げさせられた先生は、小さな溜息を吐く。
「……今年の夏休みこそは、何事もなく過ぎるといいが……」

学校指定の水着はばっちり穿(は)いて、毛皮を突き刺すほどに冷たい地獄のシャワーも浴びた。ちょうど来ていたエノシタとしゃべりながら、軽く準備運動をして、授業でいつもやっている通りバディチェックも済ませてから、秋穂はプールにとぷんと浸かる。
外ではしゃぎ回るのは好きでも、決して運動神経が良い方ではなかった。けれど水泳だけは話が別で、結構得意なのが自慢だった。
それに、夏休みのプール開放日には、授業と違って割と自由にプールで泳ぐことができる。だから秋穂はプール開放日が好きだった。
そして……当然、理由はそれだけではない。
（おっ、あそこ凛斗(リント)来てるじゃん。マーくんも一緒かー。……水着姿、目に焼き付けなきゃ）
プールの中で、水を掛け合ったりして遊んでいる級友たちを見つけ、秋穂は心の中で静かにロックオンする。
そう、例えば、サッカーが上手くて、細身だけれども結構力持ちの狼とか、ふくよかで大きなお腹にお肉がいっぱい詰まっていて抱き心地の良い熊とか。さっきまで近くで泳いでいた狸ことエノシタも、改めて見てみれば存外素材は悪くない。
みんなぴっちりした水着を穿いていて、膨らむべきところは膨らんでいて、デカさによっては形がモロに分かったりもする。それこそまさ

に男児の夢がみちみちに詰まった楽園、これ以上の眺めはそうそうない――と、秋穂は鼻息を荒くする。
　何を隠そう、かれにとっては友人たちの水着姿こそ、プールに通う一番の目的と言っても過言ではなかった。
（ん？　あそこにいるのは……）
　至福の光景を横目に見つつ、ぐるりと泳ぎ回っていた秋穂は、いつしか視界の端に見慣れない姿を捉えた。
「ダメだー、アルバ。どうしても浮かないよ」
「……マジかア。んー、見た目くらいならまだ弄れそうだが、これ以上は意味ねえかな」
　プールの中で大きな波を立てながら悪戦苦闘している男の仔は、秋穂より一回りか二回りくらい大きな体格で、中学生以上にも見えるし、子供にしては全身にがっしりした筋肉が付いていて、見た目のインパクトが強烈だ。
　一方、プールサイドに屈み込んでその巨体に話しかけているのは、幼稚園児かと思うほどに小柄で軽そうな仔だった。
　どちらも別の意味で小学生離れしたカラダ付きのふたり、いわば凸凹コンビとでもいうべき体格差ではあるが、かれらはどちらも同じ種族のようにみえる。
　しかしそれが何という名の種族なのか、秋穂にはとっさに判別ができなかった。友達にも、いや、他のクラスや先生たち、町ですれ違う程度の顔見知りにさえ、あのふたりと似たような見た目の知り合いはいなかったからだ。
（うーん、何だろう？　強いて言うなら、こないだテレビで見たワニの兄ちゃんに似てるかな？　でも、ツノとか翼とかも生えてるし、カラダの色も全然違うよな〰〰……）

まじまじと見れば見るほど、謎は深まるばかり。ふたりには秋穂のような毛皮はないし、翼はあるものの羽毛はない。

……ワニじゃないなら、ヘビとかトカゲとかの爬虫類？　でも、翼が生えたやつなんているのだろうか？

当てずっぽうにもほどがある考えだけなら次から次へと湧いてくるが、詳しいことはまるで手掛かりがなく、完全にお手上げだった。

それにしても――

(すげー、いいなあ……あんなにキレィな仔を見るの、初めてだ)

水を弾く艶やかな肌。大きい方は鮮やかな黄色で、小さな方は夕焼けみたいな赤色だ。もっとかっこいい、本に出てくるみたいな色の名前があるのかもしれないが、秋穂の小さな頭の中にはそんなものを引き出す機能はまだない。

それでも、真夏の抜けるように青い空と、それを映すプールのなかで太陽に照らされたふたりを見ていると、ほうっ、という興奮混じりの溜息が思わず漏れてしまう。

「にしてもここまで浮かねェとは思わなかったな……いくら筋肉だるまだッつーても限度があンだろ」

「オイラもびっくりした。前はもうちょっとなんとかなりそうだったんだけど、あれから筋肉も増えてるから、かなあ」

ちゃんと意識して耳を傾けてみれば、かれらの会話内容も分かるようになってきた。

「ううー、でも、泳げるようになりたいよ。アニキやバルズさんとも一緒に水遊びとかしたら、絶対に楽しいからね！」

「バルズのやつも、こないだ泳げねェって言ってたしな。アレが使いこなせりゃ話は早エんだが」

ふたりはなにやら怪しげな話をしている。だが、別に声を潜めているわけでもないのに、周囲はあまりかれらに注意を払っていないようだった。……目立たない隅っこの方にいるからだろうか？

プールじゅうを見渡していた秋穂でさえ、最初のうちはふたりがいることにまったく気付いていなかったくらいだ。なんだか不思議だなあ、と思いながらぼんやりと眺めていた秋穂だが、ふと、その光景に違和感を覚えた。

「――ない」

そう、ないのだ。そこにあるはずの、いや、あってくれないと困る、何より大事なモノが、見当たらない。

ふたりはちゃんと学校指定の水着を身に着けている。それならば、おおよそ男児たるもの、その股間にはうっすらとでも盛り上がりがあるべきだろう。種族ごとの、成長の度合いごとの、形も向きも大きさも、十人十色、百花繚乱、千差万別の神秘なる峰々。それこそが秋穂の求める、このプールにおいて最大の宝なのだから。

それなのに、かれらが身に纏うその薄布は、ぱんぱんに詰まった夢を見せてくれるどころか、膨らみのない下腹部の丸みだけをそっけなく示し、あまつさえその股間に本来あり得べからざる窪みまであるかのような食い込みを、秋穂の両目に見せつけているのだ。

混乱のあまり秋穂の脳髄は一瞬、正常な働きを中断してしまい、頭の中が真っ白になってしまったが、すぐにその空隙を大量の疑問符が埋め尽くした。

（あ、れ……⁉　ふたりとも、オスだよな？　見た目はオスっぽいけどホントは違う、とか？　いやいや、まさか……だって、それなら水着の形も違うはずだし）

頭の中に自問自答が溢(あふ)れかえり、しっちゃかめっちゃかのパニック状態だ。

（それか、もしかして、あいつらの種族はオスでもちんぽがなかったりするのかな？　って、そんなのアリなのか⁉　ていうかあのふたり、どこのクラスの誰なの⁉　うー、ひとつも分かんない……‼）

「おーい、アキホ。そんなとこでぼーっとしてどした？　お前もこっち来いよ」

答えが出ない疑問の洪水に溺(おぼ)れかけていた耳に、聞き慣れたエノシタの声が救命ロープのように届いて、秋穂ははっと我に返る。ぶんぶんと頭を振って、迷宮入りしかけた疑問はとりあえず放っておくことにした。そもそも、秋穂の頭はそこまでフクザツな問題を考えられるようにはできていない。

「うんー、すぐ行く。ちょっと待っててー」

そう答え返して、かれは手招きする友人たちのほうに走って行ったのだった。

＊＊＊

昼下がり、午後三時半。プールの開放時間も終わり、水遊びでくたくたに疲れたカラダを着慣れたタンクトップと短パンに包んだ秋穂は、それでもまだ遊び足りない気持ちだったので、友人たちとこの後の相談をしていた。狸のエノシタに鹿のミナミ、それから熊のマーくんなど、いつも通りの面々だ。

「そういやさー……」

と、ふと話題が途切れた瞬間、秋穂は何となしに口を開く。

「今日プールに、あんまり見たことない仔がふたり、来てたじゃん。誰か、詳しいこと知ってるやつ、いる？」

その問いに、マーくんとエノシタが一応は答えてくれたのだが。

「んあー？　そうだったっけ。あんまり覚えてないけど――」

「またいつもの〝ナゾだー〟ってやつ？　ま、アキホらしいけど……それより、このあとなんだけどさ――」

　友人たちは秋穂ほど気を惹かれていないようで、すぐに別の話題に移ろうとしてしまう。しかし、秋穂は諦めきれずに食い下がった。

「えーっ、でもさ、みんな気になるでしょ？　あれって絶対めっちゃ珍しい種族だろうし、なんかすげーカッコよかったし」

　それに、あの股間だ。

　あそこにはきっと、何か特大のヒミツが隠されているに違いない。今までに感じたことのないドキドキとワクワクを与えてくれる、最高のミステリーが、きっと。

「――秋穂が気になるってことは、……デカかったんでしょ、アソコが」

　ミナミの見透かしたような声が秋穂の耳を刺す。女子と見紛うほどの顔と、物静かでお淑やかな雰囲気に騙されやすいが、口を開けば小学生男児らしい下ネタがどんどん飛び出すのだ。

「そこなんだよ！　その逆でさ、全然、何もなかったんだ！」

「そっか、じゃあ……ぶっちゃけ、僕も興味ないかなあ。デカいならまだしも、見えないなんて、ねえ？」

　しかし件の下ネタ王も見えないモノを追い求めるロマンはまだ理解できないらしく、いまいち食いつきがよくなかった。他の友達に目を向けても、秋穂の肩を持ってくれる仲間はいないらしい。

「むむー、薄情なヤツらめ」

　たしかにミナミの言うことにも一理ある。秋穂自身、どうしてそこまで気になるのか自分でも不思議に思う気持ちはあった。

けれどもそのロマンは秋穂にとって、当然ながらいつまでも放っておけるような問題ではないのだった。

「たとえ独りぼっちになったとしても、この謎は、おれが突き止めなきゃいけない……名探偵アキホの名に賭けて！」

「また始まったよ」

「飽きないねー」

と、意気込んでみたはいいものの、謎の核心に迫るような情報は何一つとして手に入らなかった。

分かったことと言えば、ふたりは転校生らしい、ということ。夏休みの直前に、それもよりによって四年一組と三組――秋穂の両隣のクラスに、転校してきたのだとか。

そしてもう一つ……ふたりの種族は〝竜〟というらしい。

「いやいやいや、そんなビッグニュース、なんでウワサにならないんだよ！」

そんな風に秋穂がいくら吠えてみても、話を聞いた隣のクラスの連中ときたら、どこかぼんやりとした要領を得ない答えを返してくるばかり。たまに転校生のことを知っているという話を聞くことができても、蓋を開けてみれば。

――ふたりは最近こっちに引っ越してきた、親戚どうしなんだって。

という情報もあった一方、

――違うよ、近所に住んでただけらしいよ。でも、なにかがあって故郷に住めなくなったんだ。

と声を潜める仔もいて、

――ううん、ふたりとも親がいなくて、ヒミツの組織で生まれたんだよ。ずっとどこかに閉じ込められてたけど、そこから逃げてきたんだ。絶対そうだって！

　そんなことを言い張るヤツまで出てくる始末。……当然、それはマンガの読み過ぎだよ、と周りにツッコまれていたけれど、もしも秋穂が真実ではなく面白い話だけを求めていたのなら、かれ自身もそんな話に飛び付いていただろう。

　いずれにせよ、聞こえてくるウワサの全ては真偽不明の伝聞ばかり、先生が、父ちゃんが、町の誰かがこんなことを言ってた気がする、それを又聞きしたんだけど、というものしかなく、あのふたりと直接話をしたことがある勇者は、ただのひとりもいなかった。

「これは……ちょっぴり予想以上の難問だったかな……？」

　さしもの名探偵もこれには匙を投げかけたが、そんな程度ではへこたれないのが秋穂の信条である。

　探偵もののドラマやマンガの主人公だって、最初から全て上手くいくわけじゃなく、手詰まりのお先真っ暗な状況からでも、些細な証拠と僅かな閃きから、隠されたヒミツを鮮やかに暴き出して大逆転するものなのだ。秋穂にだって、それができるかもしれない。

　そう自分に言い聞かせ、その後も日が暮れてみんなが帰る時間になるまで、秋穂は地道に聞き込みを続け、へとへとになって家路についたのであった。

　それから、お風呂に入って、晩ご飯の時間になって、好物のコロッケを頬張っていても、頭の中は昼間のことでいっぱいだった。〝竜〟だなんて、生まれてこの方（といっても十年に満たないが）見たこともなかったし、かろうじて

名前を聞いたことはあっても、カラダの特徴なんて知るはずもなかった。
しかもそれは秋穂に限った話ではない。この県内で、いや周囲の県を含めても、竜と知り合いのひとなんて両手の指で数えられるくらいしかいないんじゃないだろうか？　そもそも、虎だって近所ではマイナーな種族なのだから。

「あれ？　今日はおかわりはいいの？　コロッケもまだあるけど」
「んー……あ、ごめん。ごちそうさまー……」
そんなことをぐるぐる考えていたら、口もお箸もほとんど動いていなかったようだ。
いつもならご飯もおかずも二回はおかわりするので、家族にとってはこれが大問題に映ったようだった。
「なんだスウ、珍しいな。学校で何か気になることでもあったか？」
「そんなとこ」

普段おかずを取り合っている兄ですら、どこか心配げにそう聞いてくるほどだ。……そっけない返事が気に食わなかったのか、結局全身をくすぐられる目にあったが。

（ナゾの転校生、それからナゾの、股間の食い込み——）

食後のひととき、最近お気に入りの（そして、かれが名探偵を自称しだすきっかけになった）探偵ドラマを観るともなしに眺めながら、秋穂は今日手に入れた情報の断片を改めて思い返してみる。一つ一つは小さなピースでも、何かのヒントをきっかけに組み合わせれば、大きな絵になる……と、ドラマの中で言っていた。
そう、秋穂の必死の聞き込みは決して徒労に終わったわけではない。最後の最後にたったひとり、帰り道で再会した友人グループのマーくんが、ぽつりとこんなことを教えてくれたのだ。

──あー、そういえば思い出した。プール時間の終わりがけにねえ、そのふたりが校舎の裏手に行くっぽいところを見た気がするなあ。

それこそまさしく暗闇の中に差し込んだ一条の光。普段だったら「思い出すのが遅い！」とお腹もみもみ攻撃を仕掛けていたかもしれないが、そのときの秋穂は思わず顔をほころばせて、マーくんの大きなお腹に抱き付いてしまったくらいだ。どっちにしろお腹を触ってる気がするのは、この際置いておこう。

（ふっふっふ、待ってろよー、竜の転校生たち。キミたちの行動パターンは、もう読めてしまってるのだよ！）

次のプール開放日こそ、作戦決行の大チャンス。かれらのあとを追いかければ、どこに住んでるのかとか、本当に怪しい組織の一員なのかとか、あらゆる真実は秋穂の手の中も同然だ。

（名付けて、謎の転校生こーび……じゃなくて、びこー作戦！）

どうせ他に誰も気にしないなら、このヒミツを解き明かすことこそ、かれの使命なのだろう。

ちょうどドラマも終わったところで、軽く伸びをしてソファーから立ち上がる。

「じゃあ、もう寝るね」

家族におやすみを言ってから、秋穂はそそくさと自室に戻る。今日ばかりは夜更かしもせず、すぐに寝床に潜り込んで電気も消した。できるだけ早く、夜が明けて欲しいからだ。

（次にプールがあるのは、明後日（あさって））

そのときこそ〝竜〟の神秘を暴き、股間のナゾを解明してみせよう。そう考えるだけでわくわくしてくる。どきどきという自分の鼓動が聞こえるくらい、胸が高鳴っている。

こんな気持ちになったのは、はじめて自分のちんぽから白くてねばねばしたアレが出てきた

とき以来じゃないだろうか。……せっかく早く寝床に就いたのに、今夜はあまり良く眠れないかもしれない。

（もしも……）

もしもナゾが解けたら、いや解けなくても、連絡先を聞いておきたい。それに、

「……ふたりとも友達になれたら、いいな」

秋穂はぽつりとつぶやきを漏らして、ひとり悶々と転がっていた。

……あまりに興奮しすぎたせいか、翌朝起きたらパンツの中がべたべたになってしまっていたのは、また別の話。

二

そして待ちに待ったその日がやってきた。

「おはよー、せんせー」

つとめていつも通りにしようとしているはずだが、秋穂の声は少しだけ緊張で上擦ってしまう。プールカードを差し出す動きも、どこかぎこちない。ハンコを捺したカードを受け取るときに、かれは意を決したように声を上げる。

「――ねえ、転校生の仔たちって、来てる？」

「ん？　転校生……ああ、あのふたりか？　さっき、入っていったはずだが」

「マジ!?　さんきゅー！」

プールに着くや否やそんな質問を投げかけ、かと思えば答えをロクに聞きもせずすっ飛んでいく虎の少年を目で追って、体育教諭は肩をすくめる。

「どうしたってんだ、秋穂のやつ。まったく落ち着きのない……」

何かあったのだろうか、と怪しみかけて、ふっと息を吐く。

「……いつものことか」

今日のプールはなんだかいつもより熱い。

それはもちろん、目が痛くなるほど青い空に、もくもくと遠くにそびえる入道雲と、絶賛猛暑日真っ最中なのもあるが、それ以上に秋穂の全身を激しく滾らせる興奮のためでもあったに違いない。

何はともあれ今回は、日課の同級生ウォッチングもほどほどに留め、転校生のふたりからなるべく目を離さないようにしていたのだが、相変わらずふたりはみんなから離れた場所にいたし、泳ぐのは苦手なままのようだったし、そして相変わらずその股間には水泳パンツが食い込んでいた。

（いったいどんなナゾが……あそこにはあるのか……ッ!?）

　そこに潜む神秘に思いを馳(は)せれば馳せるほどに、秋穂の体温はどんどん上がっていってしまう。せめて熱中症にだけはならないようにしようと、かれは火照(ほて)る身体をプールで冷まそうとするのだった。

　そして、プールの開放時間が終わり……秋穂は今日こそ、ふたりの行方を見逃すまいと気を張っていた。エノシタやミナミたち、友達の誘いも名残(なごり)惜しいが今日はパスだ。いつもなら結構強引に秋穂を引っ張っていこうとする友達も、妙に張り切っているかれの様子を目の当たりにすると、「また例のアレか」「こりゃ当分ダメだな」とでも言いたげな苦笑を浮かべて、それ以上引き留めようとはしなかった。

　ターゲットたる転校生たちはプールが終わったあとも帰ろうとする様子はなく、先日耳にしたマーくんからの情報通り、校舎の裏手側に行こうとしているようだった。秋穂はふたりに見つからないように、と物陰に潜みながら、できうる限り静かに尾行を試みる。

（そうだ……うおお、目覚めろ、おれの野生の本能……っ!!）

　低く身を屈めたかれの背筋を這(は)い上がるものは、大きな期待と興奮と、そして好奇心をくすぐる〝なにか〟の予感。その姿はまさしく、狙った獲物を逃すまいとする一匹の虎であった。……というのは明らかに言い過ぎではあるが、少なくとも秋穂の頭の中ではそうなっている。

（この感覚がどんどん強くなる方へ行ったら、きっと〝なにか〟が起きる）

　根拠も理由もこれっぽっちもないけれど、なぜだかそんな確信があった。

＊＊＊

「……ッ、ん……」

「……イイよ、く、ぁ……」

そしてたどり着いた、人目に付かない物陰。

秋穂自身、学校の裏手にこんなスペースがあるなんて考えたこともなかった。

　耳をそばだてて集中すれば、柔らかいもの同士がぶつかり合うような音が聞こえてくる。くちゅ、ぬちゃ、という水音の合間に、途切れ途切れの呻（うめ）き声と、荒く、切なげな吐息（といき）が混じる。

　さらに近付いてみると、ふわっと不思議な香りまで漂ってきた。爽やかな海辺のような、いや、山奥の木立（こだち）のような、形容しようとするたびに印象が変わる、嗅いだことなどないはずなのに、どこか懐かしさを感じるような、エキゾチックな香り。

　鼻腔（びこう）をくすぐるその空気は、秋穂の胸を無性にどきどきと高鳴らせ、頭の奥がぐるぐるするような、切ないような感じにさせる。

（この音と匂い、なんだろ……いや、これだけじゃまだダメだ！　ケッテーテキなショーコを見つけなきゃ）

　逸（はや）る気持ちを抑え、ごくりと唾（つば）を飲み込んで、秋穂は物陰からぎりぎりまで身を乗り出して、ついにその場を覗（のぞ）き込んだ。

　誰も知らない学校の裏、そこで繰り広げられていたのは――ふたりの転校生が、艶（つや）やかなそのカラダを密着させている場面だった。それも、当然のように真っ裸で。

「前も後ろも、ガバガバだなア、え？」

「だって、そりゃ、んッ……ぉあッ」

対照的な意味でどちらも小学生離れした、ふたつの肉体。小さな紅いカラダが、大きな黄色いカラダに乗っかって、なにやら盛んに動いている。

まるで全力疾走中のように汗まみれだけど、ふたりの表情を見れば、苦痛なんかとは無縁に見える。むしろ、一心不乱にお互いの快楽だけを貪りあい、なにもかも蕩(とろ)けきった状態になってしまっているのが、部外者の秋穂にさえはっきりと分かる。

(え……ッ!?　こ、これって、まさか……)

親や先生がいたら、きっと目隠しされていただろう。そもそもこんな場面に居合わせることさえ、許してはくれないに違いない。だって、これは――

コドモが見てはいけないこと。

オトナが教えてくれないこと。

――えっちなこと。

(だ、だよな、わ〜〜〜っ……!)

そう、秋穂も知識としては知っていた。現代の知識欲旺盛(おうせい)な少年が、なんでも聞ける便利な道具を手にして、それを活用しない手はない。悪友たちから、親の目を掻(か)い潜(くぐ)ったり、保護機能をなんとかやりすごす方法を聞きかじったりもしていた。

だから、そういうことがこの世にあることは知っていた。けれど――ホンモノを見るなんて、当然、初めてのことだった。

いったいどれくらい気持ち良いんだろう?　少なくとも秋穂の想像なんて遥かに飛び越えてしまっているに違いない。頭の中に、ありとあらゆる妄想が後から後から湧いて、溢れて、漏れ出して――

「――いいなぁ……」

思わず、そう呟いてしまっていた。はっと我に返って口元を覆ったが、もう遅い。そのときには既に、息を荒げて絡み合っていたふたりの視線が、秋穂の方へと向いていた。

「あッ、ごめん、いや、あの、邪魔とかするつもりじゃなくって、さ……？」

しどろもどろになって泳がせていた目は、その場に突如として現れた〝エサ〟に吸い寄せられ、まんまと食いついてしまった。小柄な、紅い仔の股間。その赤さをもっと鮮やかに、強烈に、目に焼き付けるそれ。

（あれ……？　さっきプールで見かけたときには、確かに何もなかったハズだよな？）

つい自分を疑ってしまったが、無理もないだろう。秋穂の目の前にあるのは、かれの記憶を裏切りあざ笑うかの如く圧倒的な存在感で、汁まみれになり、ぬらぬらと光を照り返す、まさしく男根そのもの。カラダの小ささに比べて、冗談みたいに巨大な肉の塊が、天を衝くように聳え立っていたのだ。のみならずその根元には、その巨塔に見合ったこれまたまるまると大振りな金玉が、当然のように鎮座している。

「でっ――けえ〰、すげえ……！」

「お？　コレが気になるか？」

バケモノのような巨根の持ち主である紅い仔竜は、ふてぶてしい笑みを浮かべて声を掛けてくる。

「なかなか目の付け所がイイじゃん、こりゃ見込みがあるなア？」

「んぁ、あ、ふう……へへっ、キミもこっちに来る？」

「そうそう、そんなところに突っ立ってんなよ。見たいんだろ、コレが」

黄色の方も嬉しそうに秋穂を呼び寄せ、紅い方などはわざわざ手を差し出して招いてくれている。これ以上のチャンスは、今後もそうないに違いない。

「……み、見たいっ！」
　となると迷う必要など皆無に等しい。そして秋穂はこういうとき、とことんまで自分に正直だった。

＊＊＊

「えーっと、おれは秋穂。名字が秋穂（アキホ）で、名前が枢沙（スーシャ）」
　とりあえず自己紹介をしておこう、と秋穂は少しだけ姿勢を正してそう口にする。すると、さっきまでお尻をぐちゃぐちゃに犯されて甘い声を上げていた方、筋肉質な黄色い仔竜が、人懐っこい笑顔でそれに応えてくれた。
「アキホくん、だね。覚えたよ！　オイラたちは、……えっとね、確かここら辺に、名前を書いた紙が……あったあった」
　近くの地面に無造作に放り出されていた鞄（かばん）をごそごそと探ると、中から皺（しわ）の寄ったふたり分のプールカードを取り出して、秋穂に差し出す。そこにはそれぞれ、『四年一組　久留熊群斗』『四年三組　緋米田或葉』という文字が書かれていた。……が、秋穂は生憎（あいにく）勉強が得意ではないので、読み方はよく分からない。
　字体はどちらも同じ、オトナが書いたようなきっちりと丁寧な文字で、どちらがどちらの名前なのかを推測する手掛かりもない。しかしそれでも、秋穂はふんふんと、いかにも分かったように頷いて、笑みを返す。
「なるほどー。なるほどね。じゃあ、きみの方が――」
「オイラはムルト。クルクマ・ムルトだよ。で、こっちの、ちんぽがでかい方が――」
「――ヒメダ・アルバ、ってな」
　こうして相手から情報を引き出す。これは授業中にも応用が利く上級テクニックだ。もっとも、秋穂の成功率は決して高くはない……というか、よく見破られては怒られるのだが。

「てわけでアキホくん、よろしくね！」
「う、うん、その、確かに、でけえよな……」
相方を「ちんぽがでかい方」と紹介しておきながら、ムルトと名乗った黄色い仔竜の股間からも、いつの間にやら巨大な肉棒が出現していた。紅い仔に負けず劣らず立派なそれは快楽の余韻にびくびくと脈打ち、涎のように大量の我慢汁を垂れ流しては地面に染みを作っている。その様子を目の当たりにして、秋穂はついつい、ごくりと生唾を飲み込んでしまった。

「なア、スーシャ、だっけ？　お前さん、こないだのプールのときも、何度かこっち見てただろ。ンで今日は、こっそり後を尾けて、こんなトコまで入って来ちまった、と。なかなか勇気があるヤツだなア？」

アルバという名前らしい紅い仔は、可愛らしい身体付きとは正反対の、どこか凄味を帯びた笑顔を浮かべる。高い声で冗談を言うような調子ながらも、そのセリフは間違いなく物騒な響きに満ちている。さしもの秋穂も、もしも路上でこんな相手に出くわしてしまったら、びびって逃げ帰っていたかもしれない。……当の本人が全裸で、巨根の先から汁をだらだらと溢していなければ。
「うえー、ひょっとしてバレちゃってた？　最初から？」
「まあオイラたちも、途中から半分誘ってたようなところはあったからね。あんまり気にしなくて良いよ！」
「狙いがドンピシャでこっちもしてやったりって感じだしよオ、むしろな」
「そのさ……ふたりが〝竜〟だって聞いて、珍しいなって思って、気になっちゃって、それに、その――」
恥ずかしさを覚えつつ答える秋穂の視線は再び、ふたりの股間へと移る。

「――やっぱりあるよなあ。ていうか、ねえ、竜ってみんな、こんなにでけえの？」

おれも竜に生まれたかったー、と冗談めかしつつ、半ば本気でそう言いながら、秋穂は二本並び立つ仔竜たちのモノを正面に見据えて目を輝かせる。

「ははは！　分ッかりやすいヤツだなア」

そう言って腹を抱えるアルバの笑顔には、先ほどまで帯びていた険しい影はすでにない。自分と、隣に控える巨体のイチモツとを見較べて、

「ま、気持ちはよーく分かるが」と頷いている。

「みんな、って訳じゃないよ。むしろ珍しいというか、ちょっと前までいなくなっちゃってたんだけど」

「なんつーか、知り合いで思い当たるヤツら全員、特大サイズしかいねエな……」

ふたりの転校生は顔を見合わせて、苦笑気味に首を傾げる。

「で、そこの脳内ちんぽまみれ少年よ。そこまで熱心に見入ってくれンのは嬉しいが、それだけで満足なのかね？」

「ここで知り合ったのも、きっと何かの縁だしね。ほら、やりたいコトがあるなら、言っちゃおうよ」

「え、良いの？　おれ、お邪魔じゃない？」

あまりに都合の良い展開に、さすがの秋穂も遠慮がちにそう言ってはみたが、アルバはひらひらと手を振り、事もなげに言う。

「いやいや全く。お返しにそっちのちんぽも見せてくれりゃア、トントンだろ？」

「じゃっ、じゃあさ、触りたいし、嗅ぎたいし、舐めるのも――」

「途端にぐいぐい来るね、この仔」

と、欲望のままに突っ走りかけたところで、

秋穂の中に残っていたなけなしの理性がなんとかブレーキを掛ける。苟も名探偵を名乗るならば、ナゾをナゾのままになどしていて良いものだろうか？

「――っ、ねえ、さっきのプールのときさ、おれはずーっとふたりの股間を見てたんだけど、どー……しても、分からないことがあったんだ。ほら、ふたりのちんぽって、こんなにデカくてすごい目立ちそうなのに、水着を穿いてたときには全然気付けなくてさ。ていうか、なにもなかったんだよ。へこんでるように見えた。それが、どうしてなんだろ？　……って」

秋穂が、あまり良くない頭と不足しがちな言葉をなんとかひねり出しながら、いかにも真剣そうな顔でそう告げると、転校生の仔竜たちは虚を衝かれたかのように目を瞬く。

ややあってムルトが、なにかの説明をするためなのか口を開こうとしたが、アルバの小さな手がそれを遮り、にやーっという音が聞こえてきそうなほどの、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「手品さ」

「えっ？」

「ヨオし。んじゃせっかくだから見せてやろう。このデカブツの股間にご注目」

紅い仔竜は芝居がかった口調でそう言うと、まだ衰える様子もないムルトの剛直に手を翳す。にわかに〝手品〟の助手役にされた黄色の仔竜は、少しだけ照れ臭そうに顔を赤くして微笑む。

「さアさアお立ち会い！　そそり立ったるこの肉棒、恰も夢か幻か、煙が如く一瞬に、消してご覧に入れましょう。ワン、ツー、スリー！」

期待と興奮を誘う口上にキラキラと輝く秋穂の目の前で、魔法の掛け声とともにムルトの竜根がしずしずと体内に沈んでいき、まるでそんなモノなど最初からなかったかのように消失してしまう。あとに残されたのは、薄黄色の鱗肌

にほんのり紅色に色付いた一筋の割れ目だけだった。それこそはまさしく、あの水着の向こう側に隠されていた真実なのだろう。

「えっ……すっげ、すげー!!　それっ、ど、どうなってんの!?」

「イッツ・ドラゴン・マジーック！　ってな」

「あー、いや、なんていうかね。竜のカラダってこうなってるんだよ」

文字通り地に足が付かないほどにはしゃぐ秋穂をなだめるように、ムルトはあっけらかんとネタばらしをする。

「まア見ての通り。スリットっつって、このナカにモノが収まってるのさ。便利だろ？」

「えー、じゃあアルバのも？」

「ん？　見てエか？　へヘッ、そりゃそうだよなア。いいぞオ、こっちにとっても好都合……だけどな」

と、アルバは意味ありげに声を潜める。

「この世は持ちつ持たれつ、だろ？　見せてもらってばかりってのは、どう考えても不公平だ。そうだよなア？　さっきも言った通り、そっちのちんぽも見せて貰わねエと。そしたらお互い、ウィンウィンだ。ほオら、脱いだ脱いだ！」

「の、望むところだし！」

秋穂は自他を問わない脱パンツの常習犯だ。友達の前ですっぽんぽんになるくらいは屁でもない。しかし、この場に限っては、なぜか説明のできない緊張感がかれを襲っていた。

負けられない戦いに挑む戦士のように、容疑者たちを前に犯人を言い当てようとする前の探偵のように、どきどきと高鳴る胸の音が聞こえてしまわないか心配になるほどだ。

一応周囲に目を遣って、誰も来そうにないことを確認してから、秋穂は恐る恐る半パンを脱

ぎ、その下のボクサーブリーフもずらし始める。
　プールの塩素と、汗の匂いに混じって、むわりとしたちんぽの熱気が鼻腔をくすぐる。さっきからの息も吐かせぬ興奮の連続で、秋穂のモノもまた、しっかり固く大きくなっていたのであった。
「ほほー。コイツはなかなか」
　一見すると純粋無垢にも思えてしまうほどあどけない顔を、いかにも好色そうな笑みで台無しにして、アルバは舌なめずりする。その金色の目が見据える秋穂の股間には、かれらふたりのモノには及ばずとも、小学生にしては発育過多なほどの肉棒がびくびくと脈打ちながら屹立(きつりつ)していた。
「散々こっちのをデカいだの何だのと言ってた割には、お前さんのも充分規格外じゃねエか、え？」
「これは確かに素質アリだね、へへっ。アルバが言った通りだった」
「だろォ？　ただの虎じゃねエとは思ってたが、予想以上に仕事が進みそうだ。幸先が良いねエ」
「え、な、なんの話……？」
　急に怪しい笑顔で頷きあうふたりに秋穂は恐る恐るそう尋ねてみたが、当然の如く返事はなくて、その代わりムルトが秋穂の背後に回ると、その筋肉質な腕で秋穂の胴をぎゅっと抱きしめてくる。
「んあ……っ」
　密着する毛皮と鱗肌。さっきまで激しくまぐわっていたからだろう、はち切れそうなほどに筋肉の詰まったその身体は汗ばんでいたが、じっとりと不快になるかと言えばそうでもない。真夏の日差しを遮(さえぎ)った校舎の裏で、ほんのり微風が通っているからだろうか、ムルトの肌はひんやりぷにっとした不思議な感触で、ずっと触っていたくなるほどだ。

「……ど、どしたの？」

「ううん。ただ、アキホくんに出会えて良かったな、ってだけ」

「――――！」

耳元に聞こえたムルトの声は、なんというか……暖かく、懐かしかった。なにかとても大事なモノをようやく見つけて、心から安心しているような、それがこちらにも伝わってくるような。よく分からないけど、そんな感じがするように秋穂には思えた。

「おうよ。ここまで良いモンを見せてもらったからにゃア、一肌でも二肌でも喜んで脱ぐともさ。ま、もうとっくに脱ぐ服もねエけどな！」

「ホントに、オイラもお礼したいんだ。それじゃあ改めて、アキホくん――」

ふたりの仔竜は、声を合わせてこう言った。

「――これから、ナニをしてみたい？」

＊　＊　＊

「じゃあオイラ、ここに寝そべるから、アキホくんはじっとしててね」

そう言うと、黄色の仔竜は秋穂を両腕に抱えたままゆっくりと上体を倒し、コンクリートの地面に仰向け（あおむ）になる。背中越しに、呼吸によって上下する腹筋の動きや、規則正しい心臓の拍動までもが伝わってきて、秋穂の興奮はますます強くなる。なにより、ムルトのお腹は驚異的なまでのハリと弾力で秋穂の体重などまるでないかの如くどっしりと受け止め、支えてくれている。まるで筋肉の敷き布団だ。

「よーッし。邪魔するぜ」

未知の感覚にふわふわしていた意識は、その声とともに現実に引き戻される。しかしその視界に映るのもまた、今まで夢にも見たことのない光景……地面に垂らしたムルトの太い尻尾を

伝って、紅い仔竜が舌なめずりせんばかりの表情でよじ登り、秋穂の方へとにじり寄って来ているのだ。

かくして、ふたりの仔竜に挟まれる形となった秋穂は――

「……あれ⁉」

――どうしてこんな状況になっているのか、つらつらと思い出していた。

そう、最初にかれが望んだのは、至極単純なことだった。

「スリット、だっけ。アルバの股間のソレをさ、間近で見てみたいな」

それだけでいい……はずだった。

だが、アルバが「ただ見せるだけじゃァ芸がねエよな？　いっそスリットに顔くっつけてみるか？」とニヤニヤしながら言い出したのを皮切りに、「アルバは背丈が小っちゃいし、アキホくんに身を屈めてもらうのも窮屈だよね」と、いつの間にやらアルバが秋穂の顔に座るという方向で話が進められ、「せっかくだし」とムルトまでそこに混じることを申し出て、紆余曲折を経た結果、ムルトの身体を肉布団として寝転んだ秋穂にアルバが顔面騎乗するという、戦慄の〝仔竜サンドイッチ計画〟が始動していたのである。

「こいつの腹、筋肉ダルマのくせになかなか寝心地が良いだろ？　ちょっとくらい暴れたくらいで壊れる心配もねエし、存分にヨガってくれて良いんだぜ」

ようやく秋穂の足元にたどり着くと、アルバはくるりと尻を向け、太短い尻尾をふりふりと揺らす。その下に見えるのは、さっき目にしたムルトのモノとも似た魅惑の割れ目――そう、スリットだ。

仔竜の股間が近付いて来る、その距離が縮まるにつれ、煽情的な匂いを撒き散らしては秋穂の嗅覚をこれでもかとくすぐる。

「〰〰っ、あッ……！」

良い匂い、ではないはずなのに、なぜだか夢中になってしまう。秋穂は催眠術にでも掛けられたかのように、自分からアルバの股間に顔を寄せていく。

間近に見れば見るほど、そこにあるのは控えめな割れ目だけで、あの凶器とも言うべき肉棒が収まっているとは夢にも思えない。ホントに手品みたいだ、と秋穂はぼんやり考える。

スリットの周りはつやつやと柔らかできめ細かい鱗に覆われ、指を沿わせれば暖かく湿っていて、しっとり滑らかな肌触りだ。

思わずその指先を舐める。微かにしょっぱいが、それがスリット由来の味なのか、はたまた自分の汗なのか、そこまでは分からなかった。

こうなると、もはや直接真実を確かめるしかないだろう。止めどなく湧き出てくる興味と好奇心とに抗えず、ついに秋穂は――自分の鼻先でスリットを押し広げ、舌を挿れた。

「!? む、んッ」

いや、正確には、挿れようとした。だが、舌端がそのナカに触れようとした瞬間、今まで想像すらしなかったほどに濃厚で複雑な香りと味覚が、頭から背筋を通って尻尾の先まで一気に貫き、びりびりとした衝撃で秋穂の魂そのものを震わせたのだった。

ややあって、その衝撃からなんとか立ち直った秋穂は、今度こそ呑み込まれまいと腹を括り、仔竜が抱える蜜壺の奥底まで舌を伸ばす。

しかし相手は見た目にそぐわぬ歴戦の強者、対して秋穂は実戦経験など皆無のひよっこだ。ヒミツを求めて迷宮を突き進んでいた秋穂の舌は、そこに待ち構えていた強大な伏兵――アル

バの誇る竜根に出くわし、またしても驚愕に打ち震える。それでもなお、全容を味わったとは言えない。秋穂の舌が触れたのは、まだほんの先っちょだけだからだ。

「どうだア？　念願のスリットと竜ちんぽの感想は」

「んふ……はぁ、あむっふ……」

　それは到底コトバにすることなどできようもない感動だった。

むわりとした熱気の中、顔にのしかかる仔竜の小さな重みと、しっかりした肉の厚み。

　息をするたびに甘酸っぱさを帯びて蒸れた匂いが鼻腔を潜り抜け、頭のいちばん敏感なところに突き刺さるのだ。

　秋穂はただ無我夢中になって、目の前のモノを舐めて、しゃぶって、味わうことに全神経を集中させるほかなかった。

「ダメだよアルバ、今のアキホくん、もう完全にイッちゃってるみたいだ」

「ま、それもしゃーねエわな。んじゃこっちもお楽しみをいただきますか、ッと」

「なんかすごい悪い顔だね……あ、そうそう、オイラのも一緒に咥(くわ)えてよ。いいでしょ？」

「当然、言われなくてもそのつもりッ！」

　にひひ、と好色そうにほくそ笑むアルバは、姿勢を低くし、身体を秋穂の胴にぺたんとくっつけ、虎の仔の秘所に顔を埋める。もさもさと生えた毛皮を舌で掻き分けながら、仔竜の鼻先は求める宝を首尾よく見つけ、そのままその顎(あぎと)の餌食(えじき)とした。

「あひッ」

　犠牲者の甘やかな悲鳴を聞きながらも、獲物を狙う仔竜の瞳は鈍(にぶ)らない。幸い、もう一方のターゲットもそう遠くはない。アルバは右手を筋肉仔竜のスリットに突っ込み、無造作に弄(まさぐ)っ

て肉棒を引きずり出すと、秋穂のモノと一緒に口の中へ招き入れる。どうやら竜という種族の口は、巨根をふたつ咥え込んでも大丈夫らしい。

「ちょっと、スリット、雑に弄りすぎ……でも、イイねこれ、んンッ!!」

「あ、アルバぁ、それ、すご……ッ!!」

柔らかく温かな仔竜の口の中で舐め回されつつ、自分とは別の巨根と捏ね合わされる快感。

ひとりでこっそりちんぽを擦っていた時とはまるで違う、圧倒的な性感の渦が秋穂の心を呑み込んでいく。

……それは、他者と交わった経験もない小学生の男児がまともに耐えられるようなモノでは、断じてなかった。

「ッ、う、ああ、も、もう――」

「なにイ？　ひほえねエなア〰〰」

しかし対する仔竜は、口の動きを止める様子もない。それどころか、より念入りに口の中で転がしては、豊富な経験に裏打ちされたテクニックで的確かつ無慈悲に急所を責め立てる。

「んー、にゃア、ほりあえふ一発……イっひまえッ!!」

「〰〰、〰〰ッ!!　ぐ、〰〰!?　!!?」

どこかで何かが弾け飛んだような衝撃とともに、口の中も目の前も、頭の中まで真っ白になって――

＊＊＊

「……ふえっ!?」

「あ、起きたねアキホくん。大丈夫？　気分は悪くない？」

――意識が戻った頃には、もう太陽がだいぶ低くなっていた。

「スーシャのミルク、たっぷり飲ませてもらっちまった。いやア、美味かったぜ。ごっそさん」
「あれだけ出てた割に、濃さもかなり凄かったよね。アキホくんもオイラたちの、味わってくれたかな？」
　秋穂の口の中にはまだ、仔竜の汗やその他いろんな体液の複雑な味が渦巻いていて、股間を中心に残っている性感の名残が、心地良く淡い怠さと相俟って全身を甘く疼かせている。
「あー……まだ気持ち良いのが、いっぱい残ってる……」
「悪りイな。ちょいと調子に乗ってはしゃぎすぎちまったか」
　紅い仔竜は意外にも少しばかりしおらしげな様子を見せていたが、秋穂にしてみれば謝られる筋合いなど全くない。むしろいくら感謝しても足りないほどの気持ちであった。
「ううん。全っ然、だいじょぶだって！　気持ち良すぎて気を失うなんて、やりたくてもできることじゃないし。なんなら得したー、みたいな。それに……」
　感極まったかのように言葉を詰まらせ、大きく息を吐きながら、胸の内に溢れかえる想いをなんとか口に出そうとする。
「……スリット、すごかったな……はぁ〰〰。舐めれば舐めるほど汁が溢れてきてさ、おまけにねっとりしたミルクまで。いい匂いだし、頭がふわふわするし、上も下も気持ち良いし……」
「最高、だよなア」
　アルバの言葉に首がもげるほどに頷いて、秋穂は身体をがばりと引き寄せ、
「うん‼　も、もっと……！　もっとみんなでいろいろ――」

そう言いかけたとき、『夕焼け小焼け』のメロディとともに、町内放送のチャイムが聞こえてきた。さすがにそろそろ学校から出ないと、閉じ込められてしまうかもしれない。仔竜のふたりも、秋穂を宥めるような調子で声を掛ける。

「まアそう焦るなって。夏休みはまだまだあるんだろ？　こっちも当分プールには通わにゃなんねエし、またそのときに遊ぼうぜ」
「それに、これでもうアキホくんとオイラたちは友達、でしょ」
「――～～ッ、うん、わかった……！」

名残は惜しいが仕方ない。帰宅を促すアナウンスに背を押されるまま、秋穂はとりあえずの身支度を済ませ、服についた砂埃をぱっぱと払う。そして、今日新たにできた友達に向き直ると、ふたりの手を取り、真剣な顔つきで言った。

「……約束！　また次のプールの日まで、約束だからね‼」
「もちろんだよ。オイラたちもアキホくんとはもっと仲良くなりたいし！」
「それに……まだ見せてねェ手品もあるし、な？」

かくして、スリットという一つの大きなナゾを解き明かした名探偵は、まだまだ残る別のナゾの予感を感じつつも、帰りが遅くなりすぎて家族から怒られないうちにと、夕暮れが迫る町並みを家に向かって駆けていくのであった。

三

転校生たちと友達になり、初めて一緒に遊んだあの日から数日。

表面上、秋穂の日々には何の変化もなかった。よく食べ、よく遊び、よく喋り、そしてプールの日を心待ちにしている。去年の夏休みとも同じだ。違うとすれば、四年生になって宿題の量が増えたことくらい。

だが、もしも誰かが秋穂の心を覗いていたなら、そこに溢れているものが去年とは、いや、ほんの一ヶ月前ともまるきり違っていることに気が付いただろう。

（ちんぽ……筋肉……スリット……）

この有様である。……もともと小学四年生の男児らしいスケベ心が占める割合が大きかったのも事実だが。

その変化は幼馴染みの友人たちにもある程度感付かれていたようで、最近ちょっと変わったよね、と言われることもあった。

「えー、そうかな？　どこが？」

と聞いてみれば、

「なんてーか……エロネタにガツガツしなくなった、みたいな？」

「なんか余裕が出てきたような気がするね」

狸と鹿の少年はそんな風に言い合っていたが、当の秋穂があまりよく分かっていなさそうな顔をしていたので、気のせいか、と話題は立ち消えになった。

実際、かれ自身も変化を自覚してはいなかったが、真夏の太陽のもと、わざわざ汗水垂らして学校まで行く目的がプールのためなのか、それとも新しくできた友達のためなのか、もはやそれすらも頭の中ではあやふやになって、何かひとには言えないヒミツを手に入れたような興奮と期待が、秋穂の足取りを軽くしていた。

ヒミツ、と言えば。

秋穂はあるとき、どうしても気になっていた質問を、とうとう仔竜のふたりにぶつけてみることにした。

「――やっぱさ、なんか変だなって思うんだ」

「なにが？　スリットのこととか？」

「そう、いや、そうなんだけど、じゃなくて。……ふたりって、だいぶ目立つじゃん。転校生だし、珍しい種族だし、それになによりカッコいいしね。なのにみんな、ふたりのことを気にしなさすぎっていうか……んー、ほら、反応が鈍い？　気がするんだよなあ」

そこで一旦言葉を切って、秋穂はふたりの顔を窺う。特段変わったところは見受けられなかったが、アルバの瞳の奥に、一瞬面白がるような光が揺れ動いた気がする。ともあれ、言外に先を促されたので、秋穂は言葉を続けた。

「おれ、スリットなんてあの日初めて見たから、っていうかそんなのがあることすら知らなかったからさ。すげー気になって、どきどきが止まらなくて、周りの友達もそうなのかなって思ってたら、全然そんなこともなくて。なんか、どっかズレてるっていうか……なんて言うのかな、ぼやーっとして、ふたりのことがちゃんと見えてないみたい、っていうか。それがずっと気になってたんだよね」

頭の中に溢れる想いをなんとか言葉にしようと、普段あまり使わない頭脳をフル回転させるかれの言葉に、紅い仔竜は頷きを返す。

「なるほどなア。スーシャはそこいらのヤツとは目の付け所が違ったってワケだ」

アルバの何気ない茶々が、どことなく秋穂の自尊心をくすぐる。こうなってくると、思い付いたことは全部口に出してしまいたくなるのが秋穂という男児のサガだ。

「あとさ！　ほら、アルバって、金玉が付いてるときと付いてないときがあるじゃん。スリットの中にしまってるのかなーとも思ったけど、前に見たサイズからして、いくらなんでもアレを入れておくのは無理じゃないかな？　とか。ていうか、痛そうだし。それから……他にも、いろいろ……」

　堰（せき）を切ったように溢れ出てきたその疑問に、竜のふたりはしばらく口を噤（つぐ）んでいたが、やがてどちらからともなく笑いだした。ムルトはくすくすと、アルバは腹を抱えてげらげらと。

　秋穂はそれをおろおろと眺めていたが、どうすることもできない。……そうこうしているうちに、アルバは目尻の笑い涙を掬（すく）うと、あっけらかんとした声色で言った。

「まア、もともと隠すつもりもなかったことだし、スーシャにはこれからも一緒に遊んでほしいしな」

「そうだね。――オイラたちの〝ヒミツ〟……教えちゃおっか」

　仔竜たちはそう言ってうんうんと頷きあっていたが、慌てたのは秋穂の方だった。

「ちょっと待って待って。なんか今から重大なコト言われちゃう雰囲気っぽくなってるけど、おれ、多分そんな難しいこと分かんないからさ！　せ、せめて要点だけ！　三行で！」

「あ、うん、ええと」

　少しだけ宙空に視線を泳がせて、ふたりは言うべき言葉を探す。

「この辺りに、なんかすごいエネルギーがあるらしくて――」

「その正体を突き止めてこいッつわれたモンで――」

「ここは違う世界から調べに来ました」

見事に三行。
それも、秋穂が知っている程度の簡単な言葉だけが並んでいた……はず。
それでも理解が及ばず、耳から入ったはずの言葉は頭の中を素通りして、秋穂は目をぱちくりさせる。させるしかなかった。

「なんかすごい、エネルギー？」
「そ。なんか……すげエらしい」
「実はオイラたちもよく分かってないんだけどね。えっちなことと関係があるパワー？　なんだけど、それがあればいろんな世界が救われる……？　みたいな」

口にした当事者たちの言葉ですら、妙にふわふわしていて、そこらじゅうに付いた疑問符が目に見えるくらいだ。ということは深く考えるだけ無駄かもしれない、と秋穂は早々に判断し、理解の努力を諦めた。

「で、ちょうどこの学校から入ろうとした気がビンビンに伝わってきたから〝そういう〟雰囲気だが、問題があってな」
「オイラ、ぜんぜん知らなかったんだけど、学校ってところはヨソモノが入るのにだいぶ苦労するってアルバに教えてもらったんだ」
「うん？　んん〜〜、な、なるほど？」
いまだに全く要領を得ないまま、ナゾの転校生たちの説明は続く。さすがに三行だけではふたりにとっても言い足りなかったのだろう。
というか、金玉の有無に関する素朴な疑問が、どうしてこんな急展開を巻き起こしてしまったのだろうか？　……そんな心からの疑問を、秋穂は口にしかけて思いとどまり、とりあえずはふたりが話すままに聞くことにした。
「アルバはもともと見ての通りだったからまだ良いとして、オイラなんてこの世界のオトナよりもずっとデカかったから、余計にね」

「てなわけで、こっちも奥の手を使ったのさ。まアそこまで出し惜しみするようなモンでもねエし。言ったろ？　手品が使えるんだ、ってさ。変身とか、見た目を変えるとかな、そういうのは一応、得意分野でね。子供の姿になったら、あとは適当な後見人でも立てて、転校生ってことにすりゃアいい」

ツッコミどころや聞きたいことはそれまでも山ほどあったが、アルバが何でもなさげに言った部分だけはさすがに聞き捨てならなかった。

「変身……って、え？　本当に形が変わるの？　ぐにゃぐにゃ〰〰って？」

「まアな。うねうね〰〰って」

そう言うとアルバは、自分の手先を秋穂に見せる。真剣に見つめる秋穂の目の前で、柔らかく小さな仔竜の手はみるみるうちに変貌(へんぼう)し——あっという間に、一回り大きなサイズの、ごつごつと固そうな拳(こぶし)が現れていた。

「こんなモン。自分のだけじゃなくて、別のヤツにも使える。タマのありなしを気分で変えるのも、隣にいるデカいのを縮めたのも、こいつのおかげ。まアいわゆる魔法というか、一種のズルだな」

「……え。えーっ、すげーっ！　そ、それってさ、例えばおれがオトナになったらこんな感じ……ってのに変身できたりするのかな⁉」

目を爛々(らんらん)と輝かせてはしゃぐ虎の仔に、アルバは苦笑しつつも自分の手を元通りの可愛らしい形に戻して答える。

「それがなア、実は無理なんだよな。変身先は〝竜〟って呼べる範囲限定。他にもいろんな縛りがあるわ、副作用もあるわで痒(かゆ)いところにゃ手が届かねエんだ」

そこにムルトも口を添える。
「本人の素質っていうのかな。元の姿とか、魂のカタチみたいなのに沿った変化になる……らしいんだよね。だからオイラも、子供になったのはいいけど、こんなムキムキのままになっちゃってさ」
「なるほど……この魅惑の筋肉ボディにはそんなヒミツが……」
そう言って、ムルトに胸筋やら腹筋やら腕の筋肉やらを一通り触らせてもらいつつ、秋穂は質問を続ける。
「じゃあさ、さっきアルバが言ってた副作用っていうのは？」
「感覚やら思考やらが、変身後のカラダに引き摺られちまうンだよ。デカブツになったら腹がどんどん減って食べ物のことばっかり気になったり、闇属性っぽいのになったら性格が悪くなったり、子供になったらそれ相応の考え方しかできなくなったり、まアそんなとこさ」
ふむふむと頷きながら話を聞いていた秋穂だが、そこでぱあっと、何かを思い付いたかのような明るい表情を浮かべた。――もしこの場に、エノシタやミナミなど、昔から秋穂のことをよく知る誰かがいたら、こう直感したことだろう。
……ああ、またこの問題児がロクでもないことを思い付いたぞ、と。
「……えっと、よーするにさ。おれを〝竜〟に変身させるのはできるんだよ、ね？　さっきの手品を見てからもう、興味が湧いて止まらないんだよ。ねーねー、おれにも試させて……くれないかな？」
秋穂の全身から放たれる期待のオーラに、さすがの仔竜も少々意表を突かれたような様子だ。
「おおっと、そう来るか。そーだな、別に減るモンでもねエし、実際だいぶ面白そうだし。まア今は……」

　と、アルバは周りを見る。水の中ではしゃぎ回る子供たち、かれらも自分たちもみんな同じ水着姿。つまりはプール時間の真っ最中だ。

「まだ大勢に見られるのはマズい。ヤるならプールの後で、な？」

「さっき言った、エネルギーを探す仕事とは直接関係ないんだけど、せっかくプールもあるんだし、せめてちょっとくらいは泳げるようになれたらいいんだけどねえ」

　はーっ、と一際(ひときわ)大きな溜息を吐くムルトを顎で示して、アルバは秋穂に向き直る。

「こいつときたら筋肉が重すぎて浮かねエんだよ。図体がデカいからどこまで行っても足が付いちまうし」

「アルバは逆に、浅い方でも底に足が付かないもんね」

「要するに、体格の多様性に配慮しねエこの学校が、いや、社会全体が悪いんだな」

　わいわいと詮無(せんな)い掛け合いをしつつ、仔竜たちは自分たちが泳げない理由を明後日(あさって)の方向へ転嫁(てんか)する。その様子を眺めていた秋穂は、ぽんっと拳で掌を打って口を開く。

「そうだ、一緒に泳いでみようよ。浮き方とか手の掻(か)き方とか、少しならおれにも手伝えるだろうし、ふたりのためにできることがないかなって思ってたんだ！」

「え、ホントにいいの？　やったー、大助かりだよ！」

「もちろん。いつも遊んでもらってるし、ヒミツのこととか教えてもらってばっかだったから、これくらいはねー。……よっし、それじゃー、ビシビシ行くぞー！」

　男児たちの明るい声が水飛沫(みずしぶき)に混じりあって、それからプール開放時間の終わりまで、かれらの水泳特訓は続いたのであった。

「さアて、お待ちかねの変身タイムだな。……身内以外でヤるのは初めてだから、ちょいと変な感じになるかもだけど、そンときゃ許せよ」

＊＊＊

　太陽が徐々に高度を下げ始めた頃、例のごとく誰も来ない校舎裏にて。

　ばっちり服を脱いでわくわくスタンバイする秋穂に、アルバはわざとらしく額を抑えながらぶつぶつと呟き出す。気になって耳を傾けてみれば、「――こいつの身体組成から言って適正なのは……いや、違うな――」とか「――あそこイジればなんとかなるか……？　そうなるとアレがイカれるけど、まアいっか――」とか、意識して聞いたところでちんぷんかんぷんな呪文が並ぶばかり。というか、端々(はしばし)に聞こえる言葉が妙に不穏だったので、さすがの秋穂も少しだけ顔をこわばらせる。

「え、なに、急に怖いんだけど⁉」

「だいじょーぶだいじょーぶ、誰にだって最初はあるだろ。理屈は間違ってねェはずだし、いけるいけるいける……」

「ま、まあ、こんなこと言ってるけど、アルバの腕は確かだから、気にしなくていいよ！」

　かくして一抹の不安を抱えつつも、秋穂はアルバに言われた通り、コンクリートの床に寝そべって、そのときを待った。興奮と緊張でガチガチになった身体を揉(も)み解(ほぐ)すように、紅い仔竜の小さな手が全身を弄(まさぐ)っていく――

――始まりは胸の奥に生じた小さな感覚からだった。それはどんどん大きく育って、心臓の鼓動と共に、身体の隅々にまで流れ出していく。

　いろんなところがぞわぞわして、ちくちくする気がするけど、不快なんかじゃなくて、むしろ気持ち良い。

前に一度、温泉施設でサウナに入ったときみたいに、身体の中も外も全部燃えるように熱くて、汗だかなんだかよく分からない汁が、あちらこちらからだらだらと流れ出ていくような気がして、思わず舌を突き出して喘（あえ）ぎたくなる。

腕も、脚も、爪先も、頭から尻尾に至るまで、この世に生まれたときからずっと〝虎〟を形作っていた要素が全て、〝竜〟へと作り直されていくらしい。

　それと同時に、頭から何か硬いモノがメキメキと軋（きし）みながら生え、背中もバキバキと盛大な音を立てているのが聞こえた。まるで骨という骨が砕け散り、バラバラになったあとキレイにまとめ直されて、全く新しい形に再構成されていくように。

（ツノと、翼だ……おれの……！）

目で見たわけでもないのに、すぐにそうだと分かった。そして目に見えるところでも、変化は着実に進みつつあった。ふさふさとした毛並みを押し退けるように、ゴツくて硬質な鱗が生えてくる。その色は、元々生えていたタテガミと同じ淡いクリーム色に、所々濃い黒茶色が混じって虎斑（とらふ）になったツートンカラーだった。

（あ、ああッ――!!）

　それから……正直、秋穂がいちばん期待していた部分。

　その期待を裏切るどころか、妄想していた以上に強い刺激と快感がかれの股間に襲来する。秋穂には、自分の性器がふたりのモノにも似たスリットに変わりつつあるのだ、とはっきり理解できた。それを認識するだけで、できたばかりの割れ目がじんわりと潤（うるお）い温かくなり、きゅんきゅんとした切ない気持ちが心を満たす。

「そっか、スリットってこんな感覚だったんだ……！」

　初めての感覚だけに、どう扱っていいのかも分からず、気を紛らわすこともできずに、かれはただ悶々としてしまう。その様子を隣で見ていたアルバは、訳知り顔で頷いてみせる。

「わかるぜエ。竜ッて生き物はえっちなことを求めずにはいられねエんだ。もともとそーゆー風にできてるからな。それに加えてスーシャはただでさえ性欲が高めだろ」

　だから、いいコトを教えてやるよ、とアルバは横たわったままの秋穂の耳に顔を近付け、甘い声で囁く。

「スリットの渇望を満たす手段。知りたいか？　知りたいよなア？」

ねっとりと粘着くような吐息とともに、アルバは自分の股間を秋穂の股間に宛がう。そのまま互いのスリットを密着させると、ぐにぐにと動かしあった。

　ふたつの蜜壺がまるでディープキスをするかのように、ぬちゃぬちゃと淫靡に絡み合う。それは、秋穂が夢にも見たことのない、禁断の新感覚であった。

「うひッ、ん、あ、え……!?」

「いいでしょ？　竜ってさ、上の口でも下の口でもキスができちゃうんだよ。オイラたちもよくこうやって遊ぶんだよね」

　こんなときでも落ち着いたムルトの声が、オーバーヒート気味の頭になんとか届く。しかしホッとしかけたのも束の間、秋穂のスリットが仕上がるのを待ち兼ねていたとばかりに、さらに興奮を煽るようなアルバの声が聞こえてきた。

「ははは ア、どうだ？　ここらでひとつ、ゲームといこうか。ルールは簡単、最初にチンポをおっ勃てちまった方の負け……ってな感じで、イってみよう！」

　アルバの小さめながらもぷっくりしたスリットと、できたてほやほやの秋穂竜のスリットがぶつかり合う。ぶに、ぐにゅ、と割れ目が交わり、絡み合い、とろりとした汁が漏れ出すたびに、両者は甘い吐息と悩ましげな嬌声を上げる。アルバのほうはそれでもまだ余裕綽々といった様子だが、秋穂はそれどころではない。
「そ、そんなのッ！　ズルいよ、おれ、勝てるわけ――んぎッ！」
　そして、やはりというべきか、先に音を上げたのは、まだ竜の身体がもたらす快楽に慣れていない秋穂のほうだった。
「んあっ、あッ……!!」
　強すぎる快楽のためか、濁声混じりの汚いよがり声とともに、真っ赤に紅潮していたスリットから、呆れるほどに巨大なイチモツが天を衝いて聳り立ったのである。
　アルバはいかにも感心したという様子で腰に手を当て、ひゅうと口笛を吹く。
「いや〜〜〜、元からデケエなとは思ってたが、竜になったらまた一段とデカさが増してねエか、こいつ？」
「色艶もキレイで、どくどくって音が聞こえるくらい血行もいいね。ニオイも格別だし、こんな逸材は滅多にないよ」
　口々に誉めそやす仔竜たちの歓声も耳に入らない様子で、秋穂の目は初めて見る竜としての自分の巨根に釘付けになってしまっていた。

「お、おれの……ちんちん、こんなことになっちゃってたのか……はー、ホントにでっかいし、くんくん――うひゃ、臭っさぁ……こんなの、頭ほわほわしてバカになっちゃう」

　虎だったときよりも長く突き出た鼻面で、秋穂は自分のスリットと、そこから突き出た竜根の香りに酔い痴れる。そんなかれの顔をくいっと持ち上げて、アルバは真っ正面から秋穂の瞳を覗き込んだ。その表情は途端に相好を崩して、にたぁーっという卑猥な笑みに変わる。

「さアて、スーシャ。雄どうしの真剣勝負に負けたからにゃ……当然、分かってるよなア？　お前さんのスリット、使わせてもらうぜ」

　一旦は秋穂の肌から離れたアルバのスリットから、早回しの動画のように男根が伸び始めると、再び秋穂の股間に――むわりと蒸気を立てて屹立する柱の、その根元に口を開くクレバスに近付く。

「え、ちょ、まって、いま挿れたりしたら、あ、あ〰〰……」

　秋穂の制止も甲斐なく、紅い仔竜の最終兵器が、未だ秋穂自身も把握しきれていない彼の秘所に容赦なく突き立てられる。

「っ、〰〰、？　……！」

　間髪を容れずアルバが腰を動かせば、そのひとつひとつのストロークに、腹の中身ごと掻き混ぜられるかのような衝撃と、同じくらいインパクトの強い快感が押し寄せてきた。

　……けれど、あともう一押し、まだもっとその先へ行ける気がする。なにか、そう、ナニかがあれば――

「あー、アルバばっかりズルいや。じゃあオイラはお尻の方もらっちゃうね」

「!!　そ、それ、……!!」

　今まさに犯されているスリットの下、ひくひくと物欲しげに蠢いていた尻穴に黄色い仔竜の剛直が吸い込まれていく。

それでようやく、全てのピースが揃ってあるべき場所に収ったかのような、充足感とこの上ない悦びが秋穂の魂を塗りつぶしていった。

溜まりに溜まったあらゆる感情と興奮が、そのまま全て特濃の精液に変換され、またも強烈な快感の衝撃を伴って大口を開けた巨根の先端からどぽどぽと放出していく。

「イイねイイね、最っ高の出しっぷりだよ！」

「お……おお……!?」

既にまともな言葉は出ない。どちゅ、と上下に押し込まれれば、おッ、と激しく射精する。永遠にその繰り返し。

いつの間にやら、かれらの周囲には湯気を立てる白濁の水溜まりができていた。ぜんぶ、秋穂が出した竜の精液だろう。明らかに異常なくらい吐精しているのに、まだ涸れるどころか、薄まる様子すらもなく、むしろここからが本番だとばかりにどんどんぶっ放したくなる始末。

もはや、秋穂自身の意思程度では到底止められそうもない。壊れた蛇口のように、新たに掘り当てられた温泉のように、どぼどぼと精が噴出し続ける。

「んはっ……えっ、ま、まだッ!? このカラダ、まだッ、イけちゃうッ」

そのうえ今回は、脳の奥底までぐちゃぐちゃに蕩けきり、魂の芯まで精液に浸りきっているにもかかわらず、意識のほうは一向にトんでくれそうになかった。曲がりなりにも竜の身に変じたことで、過剰な快感への耐性（？）が向上したのだろうか。秋穂は仔竜たちが与えてくれる怒濤のごとき肉欲を全身で受け止め、圧倒されながらも、底知れない貪欲さでそれを逆に飲み干そうとしている自分にも気が付いていた。

「――ッ、はぁ、あー、予想以上だ。さすがだね、アキホくん！」

やがて、さしもの仔竜たちも息が絶え絶えになるほど激しく交わり尽くしたあと。
つい数時間前にできたばかりの秋穂のスリットは、すでに歴戦の貫禄を漂わせ始め、何十回……否、何百回と竜の巨根に穿たれ続けた結果、満足に閉じることさえできなくなっていた。
変身によって得た仮の姿とはいえ、他ならぬ自分の肉体が予想以上に惨憺たる有様になってしまったことに気付いて、秋穂は今更ながらに危機感を覚える。

「え、これ……おれの身体、けっこうヤバめになっちゃったけど、ちゃんと戻れるのかな?」
「あ」
アルバの漏らしたその一言で、秋穂にはピンと来てしまった。——これは多分、後先のことなんてなんにも考えてなかったんだろうな、と。何を隠そう、秋穂自身もそうだったのだから、文句を言えるような立場ではないが。

「そーいやそーだな、へへっ。んー、竜以外の姿に戻す?　ンな器用なことできっかなア?」
「えーっ、ちょっと、ねえアルバ……!」
余計に不安を掻き立てられるような仔竜の発言には、さすがの秋穂も血の気が引いた。だが当のアルバは真面目くさった顔の演技をすぐに投げ棄て、ぷっと噴き出すと秋穂の肩をばしばしと叩く。
「ははは、冗談だよ、じょーだん。言ったろ?　こいつはただの、タネも仕掛けもある手品だからな。変身させた時の手順を逆に踏めば万事解決、きれいさっぱり元通りさア。……多分」
「もーっ!　はぁ、でも、ちょっと安心した」
冷静に考えれば安心できる材料など何一つないのだが、アルバのふざけ声を聞いていると、何故だかあれこれ気にするのが馬鹿らしくなって、むしろ全てが上手くいくような予感がしてしまう。

そもそも秋穂自身が、元から人一倍脳天気で楽天的な性格だ。かれは既にさっきまでの心配をケロリと忘れて、ぐっぽりと開きっぱなしになった自分の股間をしげしげ眺めていた。

「て言うかおれ、スリットこんなにガバガバにしちゃったけど、元のカラダになんか影響とかない？」

「さあ？　……はは、いやすまん。スリットなんて、スーシャにはもともとなかった器官だし、元のカラダに戻りゃア消えてなくなるだろ？　気にしなくて良いんじゃねエの」

「なるほどー、それもそっかぁ。うひょ〰〰、変身ってサイコー‼」

根拠もないアルバの放言にうんうんと頷いて、秋穂は無邪気に歓声を上げる。隣でムルトがどことなく引き攣った笑みを浮かべていたのは、都合良く見なかったことにした。

「じゃあスーシャ、目を閉じてくれ。そのままイメージするんだ。お前さんは今から元に戻る。一回来た道だからな、戻るのは簡単だ、って信じるんだ。三つ数えればあら不思議、ぜーんぶ元通り、ってな。準備は良いか？　ワン、ツー、スリー！」

言われた通りに目を瞑っていると、なんだか全身がぞわっとするような感覚がしたが、それだけだった。とは言いつつも恐る恐る目を開けてみれば——もうすっかり前のままの、慣れ親しんだ自分の手足が視界に映った。肉球だってちゃんと付いている。

「おおー……ホントに戻ってる。キレイさっぱりだ」

でも、ちょっと勿体なかったかも……と内心で思っていたことが、そのまま表情に出てしまっていたのだろう。仔竜たちは秋穂の顔を覗き込んで、ちょっぴり悪い笑みを浮かべる。

「あれー、また竜のカラダに戻りたくなっちゃった？　……まあ確実に忘れられない体験にはなったはずだもんね」
「心配ご無用、そんなときには一声掛けてくれりゃア、いつでも駆け付けサービスしてやるよ。どんな風に変身させりゃ良いのかは、バッチリ覚えておくからさ。アフターメンテナンスも、任せて安心、ってなア！」
「は、はは……マエムキに、ケントーします」

ドラマか何かで聞いた難しい言葉を使ってみたが、たぶん意味は合っているはずだ。竜として味わった体験はまたとないものだったが、秋穂は自分自身の身体が嫌いなわけではない。むしろ、気に入っている方だと思う。
だから、竜のカラダにまた戻れるのは嬉しいが、変わりっぱなしになるつもりもなかった。たまに変身してえっちな遊びをするくらいなら……まあ、たぶん大丈夫だろう。

そうこうしている間にも、日没の時間は着々と迫りつつあった。あと十分もしないうちに、帰宅を促す放送が鳴り始めてしまうだろう。
――その前に、ふたりと話しておきたいことがあった。

「前に言ってた、ふたりのお仕事のことでさ。えっちなエネルギーって、すぐに見つかりそうなのかな？」
「ん？　まア手掛かりがないわけじゃねエし、時間さえありゃなんとでもなるけど。つってもこっちへ来て早々に夏休みに入っちまったから、まだ目星が付けきれてねエところは割とあるんだよな」
アルバはそう言って、顎（あご）の辺りをさすりながら考えに耽（ふけ）る。ぱっと見は幼稚園児もかくやという体型なのに、そういう所作は確かにどことなく〝おじさん〟っぽくて、秋穂は密かに納得してしまった。

「えっちな、って言うくらいだから読んで字の如く、性欲が強いヤツの周囲に集まるとは聞いていたが、条件はそれだけでもねェんだと」
「地道にやっていくしかないよね。世界を救う、とか言っても別に今すぐどうこうってワケじゃないらしいし」
　ふたりの言葉を聞きながら、秋穂は言いたかったことを言うために、ひゅーっと息を吸う。
……心臓が、どきどきしてきた。
「ま、まあ、それでさ！　……プールの特訓もそうなんだけど、おれにもやれることがあれば、やりたいなっていうか。その、気持ち良いコトも、素敵な思い出も、貰うばっかじゃイヤだな……とか、えっと、ほら……」
　何度か口を開いては閉じ、それでも求める言葉が見つからずに、秋穂はもごもごと口篭もる。
（あれ？　おかしいな、もっとちゃんと、カッコいいセリフをバシッと決める……はずだったのに）
　言いたいことは頭の中にちゃんとあるのに、それを口に出そうとすると何故だかすんなり出てこない。焦れば焦るほどに、かれの口は硬く、重たくなっていってしまう。
　——だからといって、何も言わずにこのまま別れることなどできない。
　もちろん、これが最後のさよならなんかじゃないし、また次のプールのときには何事もなく会えるのだろう。けれども今、このときにちゃんと伝えておきたくて、秋穂は自分の意志と舌先を奮い立たせ、もう一度口を開いた。
「お、おれさ！　……これでも知り合いは結構いるし、学校の中だけじゃなくて近所でも、それっぽいヤツのこととか、いろんな場所を知ってるし、案内できるよ。だから——」

心臓のどきどきは全力疾走したときのように
どんどん早まっている。けれども秋穂は言葉を
続けた。
「――だから、ふたりの、と、友達として……
おれにもなにか、手伝わせてほしい、な」
「……！」
その言葉を聞いたふたりは、秋穂の両手を取
って喜びを示す。
「もちろんだよ、アキホくん！　それに、本当
にありがとう……やっぱりオイラたち、アキホ
くんに会えてとってもラッキーだったよ！」
「少なくとも、この辺りでえっちなエネルギー
を集めてくれそうな候補者はひとり見つかった
し、なア？」
「……それってさ、うちの学校に性欲がやベー
ヤツがいるってこと？　うわー、誰だろ……」
「……」
ツッコミはなかった。さすがにわざとらしす
ぎたかもしれない。

秋穂自身、いかに空とぼけようとも、自分が
周囲よりも数段えっちなことに興味があること
くらいは自覚していた。
「ま、ともかく。――これからもよろしく頼む
ぜ、スーシャ」
「頼りにしてるよ、アキホくん！」
「……うん！」

＊＊＊

「んく、んく……ぷはっ」
喉を通り抜けるジンジャーエールの爽やかな
刺激。
「あああ〰〰……あれ？」
いつも通り扇風機で宇宙人を召喚していたら、
携帯にメッセージが来ていた。
「おー、またなんか見つかったのかな。へへ、
楽しみだな……」

ヒミツの友達からの、大きい声では言えない遊びの誘いだ。もちろん、すぐに向かう以外の選択肢はない。

「じゃー、いってきまーす」

脱ぎ散らかしていたシャツやズボンを再び集め、身支度もそこそこに、いつものサンダルを引っ掛けて家を飛び出していく。

今日も今日とて快晴の、真夏の一日。

夏休みはいつだって短いが、今年は特にあっという間だ。もう半分以上が過ぎてしまって、なのに宿題はほとんど手付かずのまま。

だけど今年の夏は、去年までとは大違いだ。濃厚で、充実していて、知らなかったことさえたくさん知ることができて……その上、新しい友達までできた。

「えーと、ヤること終わったら、市民プールに行って特訓の続きしようぜ、と……」

そそくさと返信を済ませ、秋穂は待ち合わせの場所へ急ぐ。遅刻の常習犯といえども、こればかりはミスするわけにはいかない。お楽しみはこれからなのだから。

「こんどはエノシタとかミナミとかも誘って、みんなでどっかに行きたいな」

それでもやりたいこと、行きたい場所、まだまだいっぱいあって、数えだしたらキリがないくらいだ。

だから秋穂は今日も、元気いっぱいに玄関を抜けて飛び出していく。

夏休みはまだ終わらない。

幕間

夕暮れ時だというのに、まだまだ外は汗ばむ暑さで、ツクツクボウシの鳴き声がじわじわと響いている。

「んー、なんかやっぱ浴衣(ゆかた)とか着てきた方が良かったのかな……」

大きな鳥居の前で、虎の男の仔がそわそわと周りに目を向けていた。通り過ぎていくひとたちには着飾った姿が多いなか、かれはいつものシャツと短パン姿だった。

近所でいちばん大きな神社はこの日が縁日で、参道には屋台がたくさん並び、ひとも大勢集まっている。暗くなったら花火も上がる予定だ。

要するに、夏休み最大のスペシャルイベント、お祭りの日である。

「ていうかあいつら、まだかな……連絡くらいくれても……ん？」

しびれを切らせて携帯を見ようとしたかれはふとした違和感に直前になって気付いたが、もはや手遅れ。

「隙ありッ！」

「わーーッ」

気配を殺してこっそりと近寄っていた狸少年の本家脱ズボン技がキレイに決まり、虎の仔の白いブリーフが公衆の面前に曝(さら)される――寸前で、なんとかズボンを抑えられたので、かれの名誉はすんでの所で守られた。

「くっそー油断した!!　エノシタ〰〰来てたなら言ってよ！」

「だぁれがこんな美味しいチャンス、逃すってんだ！　修行が足りんな!!」

「秋穂が早めに来るなんて珍しいよね。いっつも遅刻してくるくせに」

　わいわい盛り上がる男児ふたりを冷めた目で見ながら、もうひとり鹿の少年も近付いてくる。こちらはちゃんと、夏祭りらしい涼しげな色の浴衣を身に着けている。

「ミナミは何着ても似合うからズルだよなー」
「そーだそーだ、バッとして脱がさせろ！」
「はいはい……それより、僕らに会わせたい仔っていうのはまだかな？　転校生なんだっけ」
　ふたりのヤジを事もなげにいなしながら、鹿のミナミは周囲に目を遣る。
「んー、さすがにそろそろ着くハズなんだけど……あ！　おーい、こっちこっち！」
　つられてきょろきょろ動かしていた秋穂の視線が、接近するふたつの影を目敏く捉えた。

　手を振るかれに応えて、大きい方の相手が人懐っこそうな笑顔で駆けてくる。もう一つの小さな方は……なんと、空を飛んできていた。

「悪りィ、遅くなったな」
「ごめんね、なんだか迷っちゃって……」
　小さく紅い仔竜がセリフの割には悪びれる様子もないのに対して、大きく黄色い仔竜の方は、申し訳なさそうに額にかいた汗を拭っている。
「大丈夫、こっちも今揃ったところだから！　えーっと、紹介するね。こっちがおれの友達のエノシタとミナミで、こっちが――」
「――な、な、……」
「わお」
　遅れてきた転校生たちを紹介しようとする秋穂の声は、しかし、幼馴染みのふたりにはほとんど届いていないようだった。

「なんつーカッコしとるん！　い、いくら夏だからって、それもう、見え……」
「うん、バッチリ見えてるね。……つるつるだけど」
　さすがに秋穂まではいかずともスケベ盛りの男児ふたり、突然現れたハレンチな格好の存在に目を釘付けにされてしまう。
　それもそのはず仔竜たちの見た目ときたら、片やぴちぴちのスパッツだけを穿いた真っ赤な身体、しかもその生地が妙に薄くて、太ももや股間の僅かな凹凸さえもくっきり見えてしまう有様。
　片や小学生にしてはいくらなんでも筋肉質すぎる艶やかな黄色の巨体に、明らかにサイズが合っていない制服のシャツをなんとか羽織っているだけ、あろうことか下は何も履いていない。そのシャツも、急いで来たせいか汗にしっとり濡れていて、却って筋肉を際立たせている。
「……あ！　しまった、おれはふたりの格好に慣れちゃってたけど、エノシタたちは初めてなんだった!!」
　と、慌ててみてももう遅い。……しかしエノシタたちも適応力は強い方なので、初見の衝撃が和らいだあとは、「そういうもんか」と受け容れつつあるようだった。
「えっと、やり直しね。このふたりが、転校生で〝竜〟の、アルバとムルトだよ」
「おう、どーも」
「ふたりともよろしくね！」
　そんなわけで、秋穂は狸と鹿の友人相手に、この夏初めて友達になったふたりを紹介する。エノシタたちも、まだぎこちなさは残るものの、ちゃんと挨拶を返しながら改めて仔竜の格好をまじまじと見遣る。

「竜、竜かあ……アキホが探偵だ～とか言ってヒミツを探っちょったんよな？」
「確かにこれは気になるよね」
「だから言ったじゃん！　最高のヒミツなんだよ、って!!」
「ていうかさ、ふたりともその格好でここまで歩いてきたの？」

こういうときミナミは気になったことを物怖(ものお)じせずに訊けるので強い。アルバたちのほうも、特に気負う様子もなく答える。

「まア、竜ってのはもともと服なんて着ねエし、別にフツーだろ？」
「ふ、ふつー……かなあ……」
「だいいち、こんな暑いときに服なんか着たら溶けちまうだろオ？　そーゆーこった」
「な、なるほど……？　これが、ふつー……」
「そーそー」

そしてエノシタは（秋穂も同じだが）ツッコミはしても割と簡単に言いくるめられてしまう。そんなわけで、仔竜たちの格好についてはそれ以上誰もなにも言わなくなったのだった。

「それより、これからお祭りに行くんだよね？　オイラ、初めてだからすっごく楽しみだよ！」
いかにも嬉しそうにムルトが言うので、秋穂たちもついつい笑顔になってしまう。
「ここら辺ってイナカだけど、お祭りのときはひともたくさん来るし、賑(にぎ)やかになるよね」
「去年はアキホがチョコバナナとか食い過ぎて鼻血出したりして大変なことになったよな」
「わ〰〰っ、恥ずかしいからもうそれ以上言わないで……！」
友人たちの容赦(ようしゃ)ない暴露攻撃に慌てふためきつつ、わいわいと話しながら道を歩く。ふたりの身元については、とりあえずかなり遠いところから来た、とだけ伝えてあった。

「そりゃアもう遥か地の果てさ。こことはもう世界が違うッてくらいでな。だからこいつなんか見るもの全部知らなくて珍しいから、興味津々なんだよ」
　もちろん秋穂がそんな気の利いた設定を考えついたわけではない。すべてはこの口が上手い仔竜の筋書き通りだった。
　そんなわけで、ムルトも気兼ねなく知りたいことを聞いたりしていた。
「そっかー、お祭りって食べ物もあるんだ！　他にどんなのがあるの？」
「焼きそばとか、かき氷とか、たこ焼きとか、……うーん、行けば分かるよ！」
「そろそろ屋台も見えてきたしね」
　かれらの歩いていた道には提灯が増え、賑わいの声が大きくなっていく。ほどなく、両脇には様々な種類の屋台が立ち並び、美味しそうな食べ物の匂いが漂うようになっていた。

「わっ、すごい！　イイ匂いがいっぱいだ……あのイカ焼きっての食べたいな！　あとはあの焼きトウモロコシと、焼きそばと……」
　普段は穏やかな印象が強いムルトも爛々と目を輝かせて、まるで腹を空かせた猛獣のようだ。
　あちこちの屋台に駆け寄っては目に付くモノを片っ端から注文し、その大きな両腕いっぱいにごちそうを抱えては満面の笑みで口に運んでいくのだった。
「んーっ、美味しい！　ぷりぷりで香ばしくって、甘塩っぱい感じ……それにこの、食欲が疼く匂い……えへへ、アニキと旅してた頃を思い出すなあ」
「くひひ、イカ臭いってなア言い得て妙だよな、わかるぜエ」
　アルバはよく分からないことを言いつつ頷いていたが、ムルトは特に気にもせず食べ続け、秋穂たちにもちょくちょくお裾分けをして屋台グルメを堪能していたのだった。

「せっかくだし、かき氷も食おうぜ！　おれ、ブルーハワイ！　ムルトは？」

「じゃあオイラ、イチゴ味で！　わー、甘酸っぱくて冷たい……あ、あれ？　なんか頭がキーンってなっちゃう……！」

「バカだなア、急いで食べ過ぎなンだよ。ほれ、串団子。結局こういうシンプルなのがいちばん美味(うめ)エんだよな」

「ありがと、アルバ――はむ、んーっ！」

仔竜たち、とりわけカラダの大きいムルトが屋台の食べ物を片っ端から平らげていくので、秋穂たちも負けじとあれこれ食べていたのだが、ふと我に返ったエノシタが不安げに呟く。

「ていうかこんなに豪遊して大丈夫なん？」

「あっ、しまった！　お小遣いの残りは、あと、えーっと……」

そう言って財布を開き、苦手な算数の問題を解くときと同じ渋面になった秋穂に、アルバはニヤニヤしながら肩を組んで話しかける。

「なアに、心配すんな。軍資金ならバッチリだ。欲しいのがあンなら奢(おご)ってやるぜ」

「え、マジ？　うわ……アルバ、神……？」

「おうおう、なアんでも好きなだけ食ってけ」

途端に狸の目が崇拝の色を帯びる。

「オイラもちゃんとお小遣いは貰ってきたから、もっといろいろ、いっぱい食べれるよ！」

ムルトまで心強いことを言うので、それまで割と大人しくしていたミナミもハメを外すと決めたらしい。

「じゃあ遠慮なく、僕リンゴ飴が食べたいな。ツヤツヤしてて、なんかちょっとエロいよね」

……口を開くと相変わらずだが。

「あーはいはい……お、たこ焼きもあるじゃん。アキホ、お前も一口食うか？」

「食う食う！　――あちちっ、でもウマい！」

できたてのたこ焼きは中身がとろけるような柔らかさで、ソースや青のりの豊かでコク深い風味のなか、蛸(たこ)の弾力が牙に心地いい。

虎と狸がはふはふ言いながらたこ焼きのハーモニーを実感しているそばで、ミナミはアルバがこれ見よがしにしゃぶっていたモノをじっと見つめていた。
「んあ？　ほオひた？　あむ……んっふ。お前さんも食いてエか？　チョコバナナ」
いったいどうした技術によるものか、いかがわしいカタチに整えられたバナナをずろり、と口から引き出して見せ、アルバは口元に着いたチョコを長い舌で舐め取る、が——
「ちんこじゃん」
「……おう？」
「うんこまみれのちんこじゃん!!　それってさ、どうやってやるの？　教えてよ」
年相応の語彙力を遺憾なく発揮するミナミに、さしものイタズラ仔竜も少しだけたじろいで苦笑いする。
「さすがはスーシャの友達だな……まア、ちょっとしたコツがあるのさ」
そう言って、もう一本チョコバナナを買って鹿の仔に手渡すと、求められるままに口や舌の使い方をレクチャーするのだった。
小学生男児たちの食欲も落ち着いたあたりで、かれらは別の屋台にも目を向けはじめていた。
「ねえねえあれは？　食べ物じゃないの？」
微妙に古臭いキャラもののお面屋とか、二世代ほど前のゲーム機が置かれたくじ引き屋とかを越えた先、ひな壇にお菓子やおもちゃが並ぶ屋台を指して、ムルトが尋ねる。
「あー、射的！　いいじゃんいいじゃん、みんなで勝負しよーよ！」
「いいね、楽しそう！　じゃ、オイラから……」
秋穂の誘いに目を輝かせて頷いたムルトは、屋台の親父さんからコルク銃を受け取ると立ち並ぶ賞品に狙いを定め、ぽんぽんと撃っていく。

しかし、さすがに慣れていないせいか、はたまた多すぎる筋肉で力みすぎたのが仇となったのか、ムルトの放ったコルク弾は微妙に外れたり、当たっても倒すまでには至らないまま終わってしまった。

「あーっ惜しい！　よし、おれも……」

そう意気込んで秋穂が撃った弾は、これまた賞品にかすりもせず、明後日の方へ飛んで行く。

「む〰〰っ、なんなんだよコレーっ!!」

「仕方ねエな……まア見とけ」

地団駄を踏んで悔しがる秋穂を見かねたか、今度はアルバがバトンタッチして親父さんに代金を払い、銃を構える。――すっと呼吸を一つ、妙に手慣れた感じで放たれたコルクが、きれいにお菓子の箱を射抜く。その次も、またその次も、紅い仔竜の操る銃は一つも狙いを過たず、餌食となった商品たちを屋台の床へと沈めたのだった。

「す、すげーっ!!」

これにはさすがの男児一行も度肝を抜かれ、興奮のまま口々にアルバを誉めそやす。

「アルバが射的まで上手いなんて、オイラも知らなかったよ！」

「こんなちっこいカラダなのに、なんでもできちゃうもんな〰〰……」

満更でもなさげにふんぞり返るアルバの肩を軽く揉むようにぽんぽんしつつ、ひたすら感心のため息が止まらない。なぜだかこの紅い仔竜は、ありとあらゆることをそつなくできてしまうのだ。

「ていうか秋穂、さっき勝負だ〜とか言ってた割に完敗しちゃったね」

ミナミに茶化すようにそう言われ、秋穂は今更ながらそんなこと言ったなあと思い出す。

「あ。……くっそー、じゃあ次はアレ！　金魚すくいでリベンジだ!!」

「お？　いいぜエ？　こちとら金魚すくい検定三級を持ってたこともあるからなア」

「なんだその微妙にすごいのかすごくないのか分からない資格……」
いまだアルバのことをよく知らないエノシタなどはそんな風に言っていたが、案の定というべきか、金魚すくいでもアルバは抜群の腕前を発揮して、周りがみんなあたふたしている間に鮮やかなポイ捌きで金魚を掻っ攫っていったのだった。

「うわ〜〜っ負けた、完敗！　でも悔しくないっていうか、むしろスゲーもん見れてラッキー、みたいな！」
勝負にも一段落ついたところで、秋穂たちは再び参道を歩いていた。熱気と興奮はいまだに冷めず、みんなで互いの奮闘の様子を語り合ったり、目の前で繰り広げられた神業を褒め称えたりしていたのだった。
「……ていうかもう最後の方、屋台のおじさんも涙目になってなかった？」
「ま、これくらいは楽勝だし？　どうせだからこいつもやるよ。持ってけ持ってけ」
アルバも心なしかいつもより上機嫌で、小さなカラダにたんまり抱え込んだお菓子を仲間たちに惜しげもなく配っている。
「やった〜〜おれキャベ一郎すき！　でもさ、なんかさっきから貰ってばっかじゃない？」
「なアに。このミニサイズなボディにゃお菓子もそんなに入らねエからさ。お前らは育ち盛りなんだから、どんどん食え」
「……あのさ、アルバも同い年なんだよね？」
「あ、あはは……」
アルバと男児らのやりとりに、ムルトは若干引き攣った笑みを浮かべるしかないのだった。

そうこうしているうちに、辺りも大分暗くなってきた。どこかのスピーカーから、もう少しで花火の打ち上げが始まります、というアナウンスが流れている。

「へっへっへ……実は知っちょるんよね、花火がバッチリ見える穴場スポット！」
　ここぞとばかりにドヤ顔をしたエノシタが、鼻息も荒く仔竜のふたりに告げる。
「えっ、スゴい！　どこにあるの？」
「裏山でさ、去年たまたま見つけたんよ。で、こないだ秘密基地として完成したわけ」
　盛り上がっているムルトに対して、アルバは肩をすくめてほんの微かに迷うような声で聞く。
「でも、行って良いのか？　秘密なんだろ？」
　しかし秋穂は、アルバが内心で抱えていそうな思いのことなど知ってか知らずか、ただ明るい声で笑い飛ばすのだった。
「なに言ってんの。みんなもう友達なんだし、全然おっけーだよ。ね？」
　エノシタとミナミも当然という風に頷く。
「もっちろん。じゃ、案内するから……」
「あ！　だったら今度こそ、誰が一番乗りできるか競争しよ！　はいよーいどん!!」
「は!?　待て、ずりーぞ!!」
　そして、友達の制止する声も耳に入らない様子で、虎の男の仔は裏山へ続く道をばたばたと走っていくのだった。

「はー、はー……もー、みんな遅いよー！」
「この、バカアキホ、ぜー、ぜー、いつも駆けっこで負けちょるからって、はー、こんな時ばっか調子乗るとか……！」
　秋穂もエノシタも、蒸し暑い空気のなかを全力疾走してきたので、身体中汗まみれになっている。
「おお、こりゃア確かに見晴らしがすげエな。よくこんな良い場所を見つけられたモンだ」
「エノシタってなんかこういう場所を探すのが得意なんだ。それに僕たち、いつもこの辺りで虫捕りとかしてるからね」
　後からやってきたアルバたちは息も切らさず、〝秘密基地〟に興味を惹かれているようだった。

幼馴染組のなかでは本来いちばん足が速くて体力もあるミナミも、涼しい顔をしている。
「おっと、そろそろ花火が上がる頃かな」
　ミナミの声に秋穂とエノシタも無益な言い争いを一時中断し、木立の切れ間に目を向ける。

　ひゅー、と光の尾を引いて空に上がった球が、どおんという大きな音と共に花開き、目の前に広がる夜空を美しく彩った。
「わあ……！」
「おお……」
　いつもうるさい男児たちも、一瞬言葉を忘れて見入ってしまい、その後はいつも以上にけたたましい歓声を上げ、ぴょんぴょん飛び跳ねて感動を伝えあう。
　アルバはそれには混じらず、少し離れたところでムルトに肩車してもらい、じーっと花火を見つめていたのだが、そこへ秋穂がとててと駆け寄り、全身で感動を表したのだった。

「なっ、花火めっちゃすっげーよな！　ふたりとも一緒に見れて、嬉しくてさ。射的とか金魚すくいとか、アルバのすごいとこもいっぱい見れたし……今日はすごく楽しかった！　一緒に来てくれて、ホントにありがとう!!」

　あまりにもまっすぐなその言葉に、アルバがつい何とも答えられずにいると、ムルトもうんうんと頷いて言葉を添える。
「オイラたちの方こそ、お礼を言わなきゃ！　初めてのお祭りにみんなと来られて、こんなに楽しくて、もう最高だよ！　ね、アルバ！」
「お、おう」
　紅い仔竜はいつも通り皮肉めいた言葉の一つでも言おうとしていたようだが、「――いや」と僅かに言い淀んで、バツが悪そうにぼそっと言葉を漏らす。
「……まア、この夏は色々世話にもなったし、なんだ……ありがとな」

それだけ言い切ると、ふいと顔を背けてしまったアルバに、秋穂がまだまだ言い足りなかった言葉を掛けようとしたちょうどそのとき、狸と鹿のふたりが近付いてきた。
「えーなになに、どしたん？」
「ううん、なんでもないよ。一緒に来てくれてありがとー、って言ってただけ！」
エノシタは単純に楽しそうな秋穂たちの様子が気になっただけのようだったが、ミナミの方はもう少しなにかが気になったのか、質問を重ねてきた。
「そう言えば竜のふたりと秋穂、いつの間にそんなに仲良くなったの？」
「あー、プールの時にさ……」
「お、見なよ。いちばんデカい花火だぜ」
放っておくと脳天気な虎の少年はどこまでも話してしまいそうだったので、さすがのアルバも再度振り向き、しかしあくまでも落ち着き払った様子で、それとなく会話を断ち切る。

そして最後の花火が上がり、空一面が真昼のように明るくなったあと——遅れてきた大きなどどどという響きが空気を震わせ、その余韻も夜空に溶けて消えてしまうと、辺りはすっかり暗くなっていて、虫の声がなんだかいつもより大きく聞こえていた。
「あれでもう終わり？　ちぇー、もっと見てたかったなー」
「あんまり遅くなっても怒られるからな」
「怒られてお尻ペンペンされたら、エノシタのケツがまた大きくなっちゃうもんね」
「おいミナミ！　また、ってなんだよ!!」
いつも通りの級友たちの掛け合いも一通り終わってしまうと、それぞれ手を振って、家路を辿り始めるのだった。
「じゃ、みんな気をつけて帰ろうね」
「……おう、じゃあな」

狸と鹿がそう言って去って行くのに合わせ、仔竜たちも笑顔（と、にやけ面）で手を振る。
「オイラたちの初めてのお祭り、一緒に来てくれてありがとう！　また学校でね！」
「変なヤツらに引っ掛からねエよう、気イつけて帰れよ」
　秋穂も同級生と一緒に立ち去りかけたのだが、どうしても込み上げてくる寂しさに耐えきれず――そして、急にムラッと感じた下腹部の疼きに正直に従い、道を引き返すことにした。
　ムルトとアルバはまだ先ほどの場所にいて、なにかを話していたようだったが、戻って来た秋穂に気が付くと、紅い方がにやーっと笑みを深くする。
「なんだア？　まだ物足りなかったか？」
「う、うん……ほら、最近あんまりデキてなかったし、なんかこう、さっきまでわいわいしてたのに、急にひとりになっちゃうの、イヤだなって……」
「オイラたちも特に予定はないし、ヤりたいのはいつだって大歓迎だよ。ね、アルバ？」
「いいぜエ。スーシャん家にはこっちからテキトーに誤魔化しといてやるよ」
　と、どこからかスマホを取り出すと秋穂の家に電話をかけ、普段聞いたことがないよそ行きの声と口調でそれらしい事情を滔々（とうとう）と並べ立て、通話を切ると、いつもより数段悪い顔でニヤリとし、親指を立てる。家族への説明は恙（つつが）なく済んだということらしい。
「ンじゃア、今日はスリットと尻穴のどっちが先に抉（えぐ）れるか試してみるとすッか」
「さっきの花火みたいに、射精（うちあげ）の高さで勝負するのもいいかもね！」
「……！　う、うん……!!」
　えっちなことにはどこまでも貪欲な仔竜たちが、傍から聞けば悪い冗談かとも思うほど過激で苛烈（かれつ）な内容を嬉々として話し合っている横で、秋穂も期待でそわそわと尻尾を揺らす。

秋穂もこの夏、仔竜たちの〝お仕事〟を手伝うちに、もうすっかりかれらの流儀に染まってしまっていたのだった。

「……そーいやアルバ、いまのスマホどこから出したの……？」

「ん？　あー、まア、気にすんな」

「通知が来たときとかのバイブがちょうど良いんだよね」

「あ、へぇー、そうなんだ……」

何でもなさそうにそう答えつつ、おれも今度竜になったときに試してみようかな、と秋穂は密かに思ったのだった。

——翌日、夜の間ぐちゃぐちゃに犯し犯された痕跡こそはアルバの手品でまるっと元通りになったものの、夏の山奥で転げ回っていたせいでできた無数の虫刺されだけはどうにもできず、泣き顔になりながら全身を掻きむしる秋穂の姿があった。

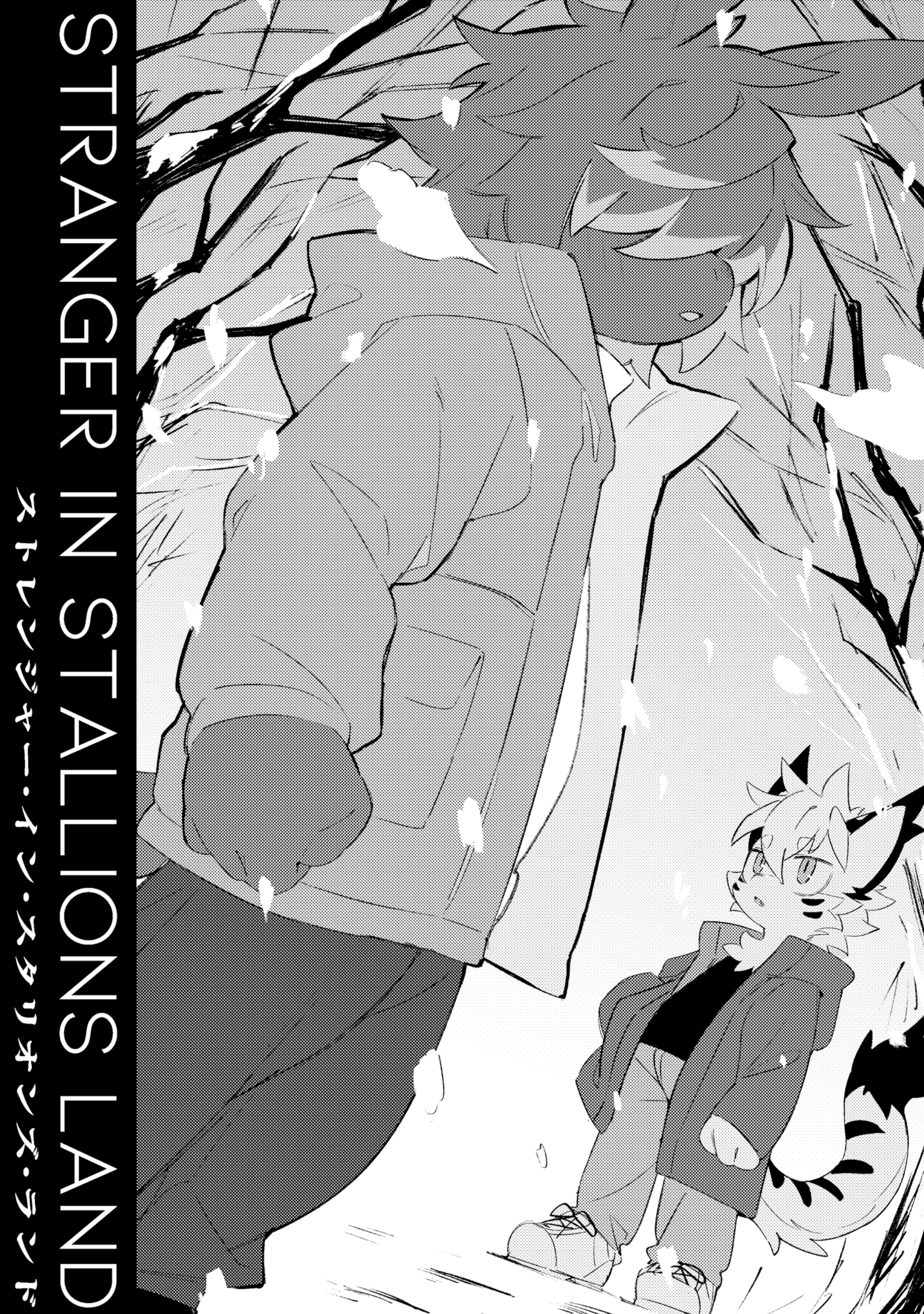
「アキホ……お前、何したらこんなことになるんだよ……」

「夜の山でヤってたんでしょ、ナニかを」

幼なじみふたりに冷ややかな視線を投げられながら、秋穂は努（つと）めて笑顔を作ると、ぺろりと舌を出す。

「……なーいしょ」

こうして、秋穂の大切な夏の思い出が、またひとつ増えたのであった。


STRANGER IN STALLIONS LAND
ストレンジャー・イン・スタリオンズ・ランド

一

　がやがやと元気のいい喋り声とともに、四年二組の教室のドアが開かれると、中からは様々な種族の子供たちがわっと飛び出していく。
　時は十二月下旬、強く吹き付ける風には霰も混じり、例年よりもかなり気温が低いはずだが、学校から解放された児童らの熱気は、むわっとした蒸気になって天に昇っていくほどだった。
　なんといっても、二学期が終わって今日からは冬休み。重い道具箱や宿題の束を抱えていても、秋穂の足取りは軽かった。
「いったん荷物を家に置いたらさ、みんなで集まって遊ぼうよ！　公園集合で‼」
　白い息を盛んに吐きながらはしゃぐ虎の少年に、一緒に歩いていた狸の少年はいつも通り少しだけ呆れた声で答える。
「こんなクソ寒いのに、相変わらず元気だな」
「おれ、暑いのより寒いほうがマシなんだよね。毛皮もあるからへーキだし！」
「ていうか宿題はどうするのさ。また放置？」
　同じく隣にいた鹿にも手痛い言葉を投げかけられるが、それくらいではへこたれないのが秋穂の信条だった。根拠も確証もありはしないが、かれは自信だけはたっぷりに胸を張る。
「まあそれは……未来のおれがなんとかしてくれるから、任せた！」
「うわ出た」
「いつものアキホだな〜〜」
　幼なじみたちが揶揄い混じりの声を上げるので、秋穂も少しムキになって言い返す。
「だってさー、今のうちにみんなともっと遊んでおきたいんだよー。アルバとムルトも来てくれるよね？」
「ん？　あア」

数歩後ろからついてきていた仔竜のふたりは、わくわく顔で返事を待っている秋穂に向かって安心させるような笑みを見せる。
「オイラたちもアキホくんたちとはいつだって遊びたいし、ぜんぜん大丈夫だよ！」
「帰っても、食ってヤって寝るだけだしなア。ちゃんと遊べるときに外で遊ばねエと、カラダもなまっちまう」
と、相変わらず心配になるほど薄着なふたりが応じてくれたので、秋穂はやったー、と手を振り上げて喜ぶ。
「てわけで。エノシタとミナミも来てね！」
「しゃーないなー、分かったよ」
そんな風に、いつも通りの会話が続く。

「じゃ、僕こっちだから」
「またあとでなー」
ミナミとエノシタとは途中で別れて、秋穂は残ったムルトとアルバと一緒に帰り道を辿る。

そういえば夏休み以来、結構長いこと一緒に遊んでいるし、いろんなヒミツも教えてもらったはずなのに、ふたりがどこに住んでいるのかも、かれはまだ知らない。まあ、そんな些細なことは、今更どうでもいいことだが。

「なんか、二学期もあっという間だったね！」
ムルトは大きな身体を揺すりながら、感慨深そうにそう呟く。筋肉質な黄色の体は、冬の弱い陽光のもとでも生き生きと輝いていた。
まだ知り合って四ヶ月ほどだが、見るたびに筋肉がデカくなっている気がする。しかもホントならもっともっとムキムキだったらしい。
つい見蕩（みと）れてしまっていた秋穂は我に返ると、手に提げていた道具箱入りの袋を別の手に持ち替えながら、それに答える。
「んー、そうかな？　おれは結構長く感じたけどな〰〰」

「スーシャにもそのうち分かるさ。時間ッてのはどんどん速く流れて行きやがるんだ」

　隣を歩いていたアルバも、意味ありげな表情を浮かべて口を挟んできた。小さな紅い身体はどうみても幼い男の仔そのものなのに、言動はいつもどこか大人びているというか、悪く言えばおじさんっぽく見える。

　だが、そんなところも秋穂にとっては面白くて、だからこそかれは仔竜のふたりが好きなのだった。

「それって、楽しいことといっぱいだから、ってこと？　確かに毎日ジュージツしてたよね！」

　アルバの言葉に対しても、秋穂は暢気（のんき）にそう答えて勝手に納得している。その様子にムルトはくすくすと笑い、アルバも毒気を抜かれたのかニヤッと破顔し、

「まア、そーゆーことにしとこうか」

　と、肩を竦（すく）めて答えるだけだった。

「それにしても、学校で色々収穫があったのは、ホントに良かったね。えっちなエネルギーも、だいたいの目星は付けられたし！」

「運動会の時とか、凄かったよなア……まさかウチのグラウンドにあんなモンが埋まってたなんてな」

「それに、みんな思った以上にエネルギーとの親和性が高かったからねえ。エノシタくんとかミナミくんも、充分有望だよ！」

「こっちにとっちゃア願ったり叶ったりだが、要するにみーんなえっちが好きってことなんだよな……大丈夫なのかア、この学校？」

　思い出を語り合う仔竜たちに、秋穂はぴょんと跳（は）ねながら別の話題を振る。

「ふたりは、休みの間はどうするの？」

「んーっとね。オイラたちは一旦、元の世界に戻ろうかなって思ってるんだ。向こうで待ってるアニキたちに、色々報告とかもしておきたいし。それに――」

と、ムルトはアルバの方を見る。
「――えへへっ、アルバには申し訳ないけど、やっぱりアニキのじゃなきゃ物足りないんだ」
「言うねエ。ま、あのサイズと比べられンのは さすがに荷が重いか。こっちもぼちぼち、うちのデカブツを構ってやらねエと」
「うーん、ふたりともアツアツだね……」
道の真ん中で堂々とそんな話をするのもどうなんだろう、と秋穂は一瞬思ったが、不思議なことに町行くひとびとは誰もかれらを気にしてはいないようだった。これもアルバの手品か、何かの効果なのだろう。
そしてムルトは、いつもの笑顔を更に大きく輝かせて、秋穂に提案する。
「そうだ！　アキホくんもオイラたちと一緒に来る？　みんなきっと大歓迎だよ！」
「えっ、良いの!?　めちゃくちゃ気になる!!　けど……う〰〰、ごめん！　冬休みは、いつも家族で親戚ん家に行くんだ」
ものすごく魅力的な提案だっただけに、断りを口にするのは並大抵の難しさではなかったが、年末年始の旅行もまた、秋穂がここ数ヶ月の間ずっと待ち望んでいたことでもあった。
（それに――馴とも早く会いたいな）
向こうには一年ぶりに会える親戚の仔もいる。……もしも行かなかったら、相手もきっと寂しがるだろう。
「そっか、じゃあまた今度、オイラたちの世界に招待するよ！」
「うん、めっちゃくちゃ楽しみにしてる……!!　おれの家こっちだから、また後でね！」
「んじゃアな」
すぐあとで遊ぶ約束をしているとはいえ、それでも名残惜しくて、何度も振り返っては手を振りつつ、秋穂は自宅に戻るのだった。

＊＊＊

　その夜。秋穂の家では夕飯を囲みながら、冬休みの予定を話し合っていた。
「家族みんなで田舎（いなか）に行くのも、ひょっとしたらこれが最後かもしれないもんね〜」
　母親（リカ）は快活な声に少し寂しさを滲（にじ）ませつつ、息子たちの皿に料理を取り分けていく。枢沙によく似た黄金色の毛皮に、黒い縞が優美な模様を描いている。
「まだ入試も終わってないのに気が早いって」
　兄の籟（ライ）は、よそわれるそばから勢いよく料理を平らげていたが、一通り口の中のものを呑み込むとそう答える。父親譲りの白黒の毛並みはここのところ一段と濃く厚くなり、背丈もぐんぐん伸びている。
「でもお前、第一志望に受かったら寮に入りてえんだろ？　色々準備もしねえとな」
　父親（ジョウ）も唸り声でそう言いつつ、猛烈な速さで箸を動かし続ける。とにかくこの家族は食べる量が多い。
　枢沙自身も、普段ならご多分に漏れず大食いなのだが、今日は箸が止まり気味だった。
「うえー、ニンジン嫌い〰〰!!　もう、なんでおれの皿にいっぱい入れるの！」
　そう、舌をぺろっと出して恨みがましい目で見つめる先には、かれの天敵とも言うべき橙色の塊が、こんもりと盛られているのだった。
「スウ！　ごちゃごちゃ言ってねえでとっとと食え!!」
「そうそう、もう十歳でしょ？　栄養もあるんだし、ちゃんと食べなさい」
「う、うう〰〰……」
　両親にそれぞれ叱られながら、かれは目を瞑（つぶ）って恐る恐るニンジンを口に運ぶ。途端に広がる苦みや甘みに土臭さ、そういうノイズをなんとか我慢しながら、どうにかごくりと呑み込む。

「よーし偉い偉い。じゃあもう一個食えるな」
「うわー兄ちゃんのバカ！　意地悪!!」
やっとのことで強敵を倒した余韻に浸る間もなく、冷酷な兄の手で再び対峙させられることとなったせいで、さすがのかれも限界を迎え、兄のカラダにぽかぽかと拳をぶつけるのだった。

「ほらふたりとも、食べ終わったんなら片付けて！　冬休みの宿題もあるんでしょ？　向こうへ行く前に、やれることはやっちゃいなさい」
「うへー……」

母親の声に追い立てられて自室に戻ったのは良いものの、ランドセルからドリルやらプリントやらを出すのもなんだか気が重くて、枢沙はベッドの上でスマホを触る。
今日の使用可能時間にはまだ余裕があるから、とりあえずはチャットアプリを開いてエノシタたちとのグループに目を遣った。

【エノシタ】冬休みってみんな旅行とか行くよなー　ミナミは海外行くらしいし　うらやま
【ミナミ】秋穂も家族でどっか行くんでしょ
【アキホ】うん、しんせきんち　でもそれまでヒマなんだよねー
【エノシタ】宿題やれ　バカ
【アキホ】バカじゃないし！

だらだらと会話を眺めていたら、もう一つのグループにも未読の通知が来ていた。こっちはアルバが作ったヒミツのグループで、ムルトと秋穂とかれだけが参加している。
「えーと……おいら、かえるの、あさて……？あ、明後日か」
ムルトはまだスマホの扱いに慣れておらず（力加減を誤って画面を割ったり、ぶっ壊したりしているのを見たのも二度や三度ではない）文字の読み書きさえ少し怪しいので、メッセージはいつもこんな調子だった。

一方のアルバはというと、笑顔の顔文字とか汗や爆発の絵文字なんかをやたらと使ったり、言葉遣いがちょっと古臭かったりして、なんというか……オジサンっぽい。それでも読みやすくて分かりやすいのは、さすがと言うべきか。

「おれも親戚んちに行ったら、エネルギー探し試してみるよ、っと」

そう送信すると、ふたりから感謝を示すスタンプが送られてくる。こっちにいる間はスマホも通じるからまた連絡くれよ、というアルバの返信に了解のスタンプを送り返したところで、使用時間が終わりを告げる。

「はー、もう時間切れか……」

画面の切れたスマホを無造作に置くと、頭をぽすっと枕に埋めて、秋穂はベッドに突っ伏す。だがくぐもった唸り声はやがて笑いに変わり、

「へへへ、写真とかいっぱい撮って、ふたりに送っちゃおっと」

そう言って身を起こすと、向こうに着いたら何をしようか、とつらつら考え出すのだった。

（絶対、面白いことが待ってるもんね！）

わくわく気分のまま机の方に目を向けると、放り出されたままのランドセルが視界に入ってきたが、都合良く見えなかったことにする。

「宿題は……まあ、持って行けばいいか」

――結局今回も手付かずのまま、出発の日を迎えることになりそうだった。

＊＊＊

あっという間に時は流れ、十二月二十九日の早朝。太陽はまだ昇らず、路面にはうっすらと霜が降りていて、乾いた寒風が吹き付けている。

秋穂は寝ぼけ眼(まなこ)をこすりながら、自家用車の後部座席に座って、車窓に額をくっつけていた。息をする度に窓が白く曇(くも)るので、指でラクガキをしつつ、外の景色を眺める。

「しかし今年は、いつもより寒い気がするな」
父親がぼやき混じりにそう呟くので、かれは視線を前に向けた。カーナビに映るテレビではちょうど天気予報をやっていて、アナウンサーが難しい言葉を喋っていた。
——停滞する寒気の影響で、全国的に記録的な寒さに見舞われ、ふだん雪の少ない地域でも積雪が観測されています。この傾向はまだ数日は続くとみられ……
画面に震える雪だるまのマークが表示され、各地でレポーターが雪かきの状況などを伝える映像が続く。いかにも寒そうな北の方の町だけでなく、都心部や南の方でもやけに激しい風とともに雪が吹き付け、見ているだけで寒そうだ。

「ねえねえ、向こうも雪、降るかな？」
しかしかれは、どこか期待を篭(こ)めた声で、尻尾を揺らしながらそう訊く。
「まさか。秀方(ひでかた)で降ったら、それこそ異常気象でしょ」
にべもなく言い切る母に対し、兄(ライ)はスマホを見ながら唸る。
「いや……駿(シュン)に聞いたら結構天気がやべえらしいし、ありえるかも」
「俺が小さい頃にも一度、やたらと寒くなった時があったな。あっちでも山奥ならたまに雪が降るんだが……まあ、村の中は大丈夫だろ」
「えー、つまんないなー」
父の補足に枢沙は口を尖らせるが、とはいえ一旦は納得して再び視線を車外の景色に戻すのだった。
車は高速に乗り、南西を目指してひた走る。目的地まではおよそ三時間、らしい。

　町並みは次第に疎らになっていき、冬枯れで茶色になった田畑が目立ってくる。その所々に、最近積もったのだろう雪が白い帯となり、朝日を浴びてキラキラと輝いていた。

（もしも本当に向こうでも雪が降ったら、馴と雪合戦とかしたいな。あーでも、あいつ割と寒がりだったんだよな……）

　景色を見るのにもだんだん飽きてきて、かれはただぼんやりと到着後の遊びに思いを馳せていた。本当はゲームでもやりたかったが、車のなかで根を詰めて操作しようとすると、覿面に酔ってしまうのだ。

（……一緒にゲームもしたいし、マンガの話とか、友達の話とかも……ふあぁ）

　途中で一度パーキングエリアでの休憩を挟み、ふかふかの肉まんでお腹を満たしたこともあり、早起きのせいで寝不足気味の脳には徐々に睡魔が忍び寄っていた。

　車は海峡を越える長いトンネルに近付き、暗闇のなかへ潜り込んでいく。規則正しく並んだオレンジ色の照明が、繰り返し繰り返し目の前を過るたび、単調なパターンが催眠術のようにかれの瞼を重くしていく。そして――

――吾が愛し仔の胤を嗣ぐもの……

――此方と彼方を結ぶものよ……

（んぅ、え……？）

　微睡みにとらわれていた耳に、どこからともなく声が聞こえた気がした。

　低く、深く、古びた響き。まるで地の底から湧き上がってくるかのような、よく分からない音の連なり。

――かくも久しく待ちいたり……

――疾く参れ、汝が祖たる吾が許へ……

その声があまりに不気味だったので、枢沙ははっと身を起こす。気が付けば心臓もどきどきと鼓動を早めていた。
「どうした、スウ？」
「え……あ、いや、なんでも――」
スマホから顔を上げた兄がそう尋ねてきたが、かれ自身も何が何やら分からず、居心地悪げに座り直す。
（――夢、だったのかな……？）
車はいつの間にかトンネルを抜けており、外の景色は再び、どこか頼りなげな冬の日差しに照らされた町並みに戻っていた。
（それでも、どこか胸の奥がざわざわしてる。よく分かんないけど、絶対おれを呼んでた）
証拠もないのに、何故だかそんな確信が心に根を下ろす。しかし今は深く追求もできない。秋穂はとりあえず伸びをして、脳裏にこびりついた眠気を追いやろうとするのだった。

＊＊＊

「やっぱり降ってたじゃん、雪！」
最後のインターチェンジを降りて目的地へ向かう道すがら、車窓から見えたのはいつもとはまるで違う銀世界だった。
無邪気にはしゃぎ声を上げる枢沙に比べて、家族の反応は当惑気味だった。
「まさか本当に……ねえ？」
「くそ、ノーマルタイヤのままだってのに」
もともとが温暖な地域のため積雪への耐性がまるでなく、雪道に慣れない車ばかりで当初の想定よりも移動時間が延びてしまっていた。
それでも比較的大きめの市街地ではまだ道路に申し訳程度の凍結防止剤が撒かれていたが、国道を離れた田舎道に差し掛かると、いよいよ雪が道を覆い隠していたのだった。

そしてようやく目指す家が見えてきた頃には、予定時間を一時間ほど過ぎて太陽もだいぶ高く昇ってしまっていた。

　山間（やまあい）のそう広くもない土地に数戸の家が寄り集まって、一応は集落の体（てい）をなしている。車が止まったのは、その中でも一際大きな家だった。玄関には『春間（はるま）』の表札が掲げられている。

「お、よう来たな！　元気そうで何よりやわ。雪道で難儀したやろ？」

　ちょうど門の前に立っていた大柄で黒い馬の男性が、車に近寄って破顔する。

「よう、駸（シン）！　そっちも相変わらずだな。いやしかし、ここまで酷いとは思わなかった」

　秋穂の父がしかめ面で唸るのに、駸と呼ばれた相手も苦笑する。

「本当にな。ここらへんで雪が積もるなんて、生まれて初めてやが。そっちが着く前に家の前だけでも片付けようと思ってたんに」

　挨拶もそこそこに、秋穂家の面々は駸に連れられて屋内へ入った。みんな来たぞー、という駸の呼び声に応えるように、奥からぬっと黒い大きな影が現れる。

「おっす、ライ。……なんかまたデカくなってないか？　スウも久しぶり」

「デカいのはお互い様だろ」

「駿（シュン）兄ちゃん！」

　すらっとした長身の駿は、籟（ライ）と同学年のはずだが、既に高校生どころか大学生っぽい雰囲気がある。艶（つや）のある黒い毛色の腕が、籟の白い背中をばしばし叩くと、続いて枢沙の頭を気安い様子でわしゃわしゃと掻き混ぜる。

「あれ？　馴は……？」

　しかし、去年までなら一緒に出迎えてくれていた、もうひとりの姿が見当たらなかったので、枢沙はきょろきょろと視線を動かす。――扉の物陰に求める相手を見つけると、かれはぱっと笑顔になってそこへ駆け寄るのだった。

「みーっけ！　……？　どしたの？」
　わいわいと語り合う家族たちから少し離れた場所で、半ば隠れるようにして立っていた馬の男の仔は、それでも枢沙の姿を見ると嬉しそうな様子を見せる。少しだけ躊躇うように口元をもごもごとさせると、ようやく観念したように小さく嗄れ気味の声を出す。
「ス、スウちゃん……へへ、げ、元気やった？　その……こ、こげな声やけん、恥しくて」
　枢沙より一歳年上の馴は、背丈も横幅も一回り大きくて、胸やお腹、太ももには柔らかそうな肉が付いている。
　濃い黒色のタテガミは長く伸びて目の辺りをすっぽりと覆い、鼻先から下しか見えないが、明らかに緊張しているのが丸わかりだった。
　声変わりの途中なのか、その声は確かに低く掠れていたが、秋穂は大して気にもせずに笑う。
「えー？　良いじゃん良いじゃん、おれ馴の声好きだよ！」
「へ、へへへ……そう？　ありがと……！」
　安心した声色とともに尻尾がぴこぴこ揺れる。かと思えば黒い毛色の上からでも分かるくらいに顔を赤らめると、馴はそれを誤魔化すように俯いてしまう。
　そうこうしているうちに、奥からエプロン姿のマキおばさんも出てきて、秋穂家の面々を居間へ招くのだった。
「ああ、いらっしゃい！　さあみんな、とりあえず上がって上がって。外寒かったでしょ！」
　春間家の中は古い木の香りがして、秋穂の家よりも格段に大きく、まるで旅館のようだ。
　枢沙としてはあちこちを駆け回りたくてうずうずしていたが、兄や父だけでなくおじさんにも怒られることは火を見るより明らかだったので、ひとまずは大人しくしていた。

「──ほんと、今年の寒さときたら──」

「──うちの辺りはまだマシだったけど──」

オトナたちが近況報告やとりとめもない世間話を続けているのを尻目に、枢沙はカバンからさっそくゲーム機を取り出すと、対戦しようぜ、と馴を誘う。

「あー、やっぱ馴と一緒に遊ばないと年末って気分にならないよなー」

「ぼくも、スウちゃんとみんなが来てくれるの、ずーっと待っちょったよ……こ、今年は、どんなことがあった？」

居間の大きなテレビを使っていいと言われたので、ゲーム機を接続用のドックに挿しながらふたりは会話を続ける。

「それがさ、すっげーんだよ！　夏休みの間に新しい友達ができたりしたし、楽しいこととかめっちゃいっぱいあってさ──」

「あ、新しい友達、へえ……いいな……」

呟く馴の声はほんの少しだけ複雑な色を帯びていたが、秋穂はそれに気付く素振りもなく、楽しかった一年の思い出を語り続ける。

「で、みんな一緒に夏祭り行ったりとか──」

「……うん……」

「あと、運動会のときとかも面白くて──」

テレビの画面では各々(おのおの)の選んだキャラクターが取っ組み合い、ワザを仕掛けあっているが、ふたりの会話はなんとも和やかなものだ。

時折、攻撃が上手くヒットしたり、紙一重で避けられたりしたときに歓声や嘆声を上げつつ、ふたりの時間は過ぎていく。

「おいスウ、お前宿題も持ってきたんだろ？　今やっとかないと絶対残っちまうぞ」

「もー、兄ちゃん！　分かってるって!!」

「馴もまだだったよな？　ちょうど良いから、ふたりとも部屋でやってこいよ」

「うえ……う、うん……」

　それぞれの兄から耳に痛い言葉を投げかけられ、ちょうどキリの良いところでもあったので、ふたりは渋々ながらゲーム機の電源を切る。
「じゃ、馴の部屋で宿題やろっか」
「いいよ……も、もし分からん所とかあったら、教えてあげれるけん……」
「え、やったー、馴大好き！」
「！　……へ、へへへ……」
　無邪気に抱き付いてくる枢沙の背を嬉しそうに撫で返したあとで、馴はそそくさと自室へ向かうのだった。

＊＊＊

　やがて日も落ち、みんなで囲む夕食も済んだころ。特にやることもなくまったりとしていたところに、おばさんからの声が聞こえた。
「お風呂沸いたから、あなた達から入っちゃいなさい」
「はーい」
　と答えながら腰を上げた秋穂は、はたと立ち止まって振り返り、何の気なしに声を掛ける。
「そうだ、馴。どうせなら一緒に入る？」
「う、え？」
　何故か一瞬固まってしまった馴の顔が、一拍置いてぼっと赤く染まる。明らかに慌てた様子で口をぱくつかせると、
「い、一緒？　そ、それ……あ、いや、うん、いい、んや……けど……」
　もごもごと何かを言いかけていたが、表情は満更でもなさそうだったので、秋穂は特に気にすることもなくその手を引く。
「じゃあ行こうぜー、馴ん家ってお風呂広いからヨユーだもんね！」
「う、うん……！」
　そしてふたりはばたばたと小走りに風呂場へ向かったのだった。

タイル張りの広い洗い場と、大きなヒノキの浴槽。この辺りで名家と言われるだけあって、春間家の浴室は実に立派なものだった。

「いーよなー、家のお風呂がこんなにデカいって。いつでも温泉みたいじゃん」

「へへ……でも、掃除とか大変だよ」

裸になったふたりは代わる代わるシャワーを浴びつつ、他愛ない会話を交わす。

（スウちゃん……なんか、前よりもカッコよくなっちょる気がする）

立ち昇る湯気のなかで、馴の視線はついつい秋穂のカラダに吸い寄せられてしまう。

背丈はそこまで高くないのに、存外しっかりと筋肉が付いていて、虎らしい縞模様の毛皮に覆われた胸やお腹が、なんだかすごく魅力的に見えるのだ。

そう意識し始めると、馴の股間が熱を帯びて来そうだったので、慌てて頭を振る。

だが当の秋穂は馴の内心など知る由もない。

「なー、背中流しっこしようぜ！」

「わ……!! ぅ、ぅん、お願いね」

無邪気に近付いてくる年下の相手に、焦りを気取られないようなんとか平静を装いながら、馴は背中を向ける。

「……、んうっ、ひゃ……」

秋穂の手が背中に触れるたび、柔らかいスポンジで優しく擦られるたびに、ぞくぞくという快い感触が背筋を走る。なにより、背後からの息遣いまで聞こえるほどの距離の近さに、馴の興奮はいよいよ増すばかりで、ついにはそれを隠しきれなくなる。

──秋穂の目の前で、かれの股間はみるみる勃起し、勢いよく膨張して、馬らしいカタチも露わに硬く巨大に聳り立ち、湯気の中でびくびくと脈打つのだった。

（わ、わあ、あああ……〰〰！）

そもそも春間の一族は馬の名家である。当然その男根は他種族の追随を許さないほど大きく、馴もまたその恩恵にどっぷりと浴していた。

だがあまりにも大きく、平常時ですら目立つそれは、馴にとってはむしろコンプレックスの対象ともなり、年齢を重ねるにつれてますます巨大化するバケモノを、かれはひた隠しにするようになっていた。

――その、誰にも見られたくないグロテスクな肉の塊を、よりによって大好きな相手の前で曝け出してしまうなんて。

馴はひたすら消え入るばかりに恥ずかしく、頭のなかが声にならない悲鳴でぐちゃぐちゃになって、いっぱいいっぱいになる。

「や、やめえ！　見らんで……ッ！」

「え……」

秋穂がひゅっと息を呑む音まで、聞こえた気がした。

（ほ、ほら、引いとる！　もういけん――）

「す、すっげ〰〰っ!!」

（――……え？）

予想外の歓声に、ノイズまみれだったはずの脳みそが空っぽになってしまった。

「馴のちんぽ、やべーっ！　馬ちんってデカくなったらこんなカタチになるんだ……!!」

「す、スウちゃん……？」

状況が呑み込まずにたじろぐ馬の仔に対し、脳がちんぽに支配された虎の男児は瞳を爛々と輝かせながら、大はしゃぎで言葉を続ける。

「なあなあ、ちんぽ測ったことある？　サイズどんくらいだった!?」

「え、いや、測ったことは……ないんやけど……って、何言いよるん！」

どぎまぎしながら喋っているせいで、いつもなら口にしないようなことまで喋ってしまい、馴はただただ顔を赤らめる。しかし秋穂はそんなことを気にもせず話し続ける。

「おれのもデカい方かなーって思ってたけど、やっぱ馬ってすげーよな、良いなあ！」

それればかりか、かれは自分のちんちんも振り回して大きくしながら、馴の前に近付ける。

それは確かに虎の基準からすれば破格の大きさで、秋穂のカラダにも春間の家に連なる血が流れていることの、何よりの証拠でもあった。

「スウちゃん……！　め、恥しいっちゃ……」

口ではそう言いつつも、馴の興奮は増していくばかり。ふたつの先端が軽く触れ合うや否や、馴の下半身はどくどくという音が聞こえるほど熱く脈打ち、血管が浮き上がって、既に巨大なちんぽが一段と硬く、大きく存在感を増す。

「うひょー、まだデカくなるの!?」

驚きに目を丸くした秋穂の手が、ごく自然に伸びて馴のモノに触れる。

「ひゃう!?　や、やめ――！」

漏れかけた言葉を、口を噤んで呑み込む。

――やめてほしくはなかった。むしろ逆だ。もしかしたら、ずっとこんな瞬間を待っていたのかもしれない。

そんな気持ちが届いたのかどうか、虎の仔のふわふわした手はまるでお構いなしに馬ちんを握ったり、軽く揺らしたりし続ける。

「重っ！　熱いし、すげー硬い!!」

「ス――スウちゃんのだって、デカいやろ！　ぼくのより、良いカタチやし！」

馴も次第に秋穂のペースに呑まれてきたのか、ちょっぴりムキになって虎のちんぽを握り返す。

「やったなー！　えい、もみもみ攻撃!!」
「こ、こっちも、負けちょらんけん……！」
　ふたりはそのまま、互いのちんぽを揉み合い、握り、軽く扱きあう。立ち込める湯気が絡み付くなか、弾ませた息は次第に嬌声混じりとなり、そして――洗い場に白い飛沫が飛び散る。
「ふ……はぁっ……」
「んく、へへへ……」
　息を荒げる馴の目の前で、秋穂は鼻先にまで飛んできたふたり分の精をぺろりと舐め取ると、我に返ったように苦笑いを浮かべる。
「あ、洗い直そっか……」
　どちらからともなくそう言うと、ふたりしてお湯をかぶり直し、もう一度石鹸でごしごしとカラダを洗うと、まるで何事もなかったかのように、並んで湯船に浸かったのだった。

＊＊＊

（さっきの感覚、ひょっとして……）
　お風呂から上がって、居間で家族のみんなとテレビ番組を眺めていたころ。秋穂は浴室での出来事を思い返していた。
　馴の巨大な馬ちんから、大量の精液が迸ったその瞬間。夏休みからお馴染みになりつつあった〝えっちなエネルギー〟の気配を、微かにではあったが、確かに感じたのだ。
（あれがアルバたちの探してるヤツなら、馴も一緒にお手伝いとかできたりするかな!?）
　テレビでは年末特有の妙に長い特番が流れ、時々出演者の笑い声が響く。それを右から左へ聞き流しながら、秋穂は馴のそばへ近寄る。

「なあ馴、さっきのお風呂のことだけどさ……なんか感じなかった？」
　そのままそれとなく話が聞ければ良かったのだが、生憎かれの頭はそこまで高性能ではなかったので、要領を得ない言葉しか出てこないのだった。
「なんか、って……？」
　案の定これっぽっちも言いたいことが伝わっていない様子に、秋穂は頭を抱えて唸る。
「う〰〰、なんて言うのかな、ほら、変わったエネルギー、みたいな」
「⁇　……ごめんスウちゃん、よう分からん」
　馴は首を傾げるばかりで、秋穂もそれ以上の言葉が出せずに頭を掻いていると、後ろから兄たちの訝しげな視線を感じた。
「そう言えば風呂がやたらと長かったけど、変なイタズラとかしてたんじゃないよな？」
「スウ、お前大人しくしてろって散々言ってるのに、またなんかやったのか」

「わー！　違う、違うって‼」
　慌てて首を振りながら、秋穂は馴のそばから離れる。兄たちの誤解（？）を払拭するために話題を変え、なんとか怪しまれないよう会話を続けるのだった。……今は、さらなる追求も諦める他ない。
（あ、あれ……なんじゃろ、この気持ち）
　馴のほうも、藪をつついて蛇を出さないよう顔を赤く染めて俯いていたが、心の中でなにか名付けがたい感情が芽生えつつあるのを、うっすらと自覚しはじめる。
　――それは、なんだか甘くてちょっぴり切ない、小さな疼きのようなものだった。
　やがて寝る時間が迫ってくると、秋穂家には客間が用意されたのだが、枢沙はそこで一計を案じる。布団を出してくれていたマキおばさんに、こう聞いてみたのだ。

「ねえ……おれ、馴と一緒に寝てもいい？」
「あら、そう？　まあ、馴も喜ぶでしょうし、布団を敷けば良いだけだから大丈夫よ」

かくして、首尾良く馴とふたりきりで話せる時間を手にしたかれは、パジャマ姿で布団の上に転がりながら、そわそわするのだった。
結局考えをまとめきらないまま、とりとめもない話題から話を始めて、馴もときどき反応を返す。家族のこと、学校のこと、最近読んでるマンガのこと……
やがて秋穂は内心でちょっとだけ覚悟を決め、本当に話したいと思っていたことを口に出す。

「――一緒にゲームやってたときにさ、新しくできた友達の話したの、覚えてる？」
「え、うん……〝竜〟じゃったっけ」
馴の声音は何故か少しだけトーンが下がったように聞こえたが、秋穂は気にせず続ける。
「そうそう。でさ、そいつらがなんかのエネルギーを探してるらしいんだ。世界を救うために必要なんだー、とか言ってさ」
「……？　そ、それって、マンガの話？」
「ううん、本気なんだってば。ほら――」

そう言って秋穂は、スマホで撮った友達との写真を見せる。紅い仔竜のアルバと同じく黄色いムルト、それに秋穂が並んで写った自撮りだ。
「わ、これが、竜？　すげ……初めて見たわ。真剣(しんけん)きれいやに……」
馴は素直に驚嘆しつつも、秋穂がそこまで熱を篭(こ)めて話す理由までは分からず、写真の画面をすっすとスライドさせて、別の画像を眺めていく。
プールでの写真や、他の種族の友達との写真、それからまた別の、白い竜らしき仔の自撮り。
その顔にはどこか、奇妙な既視感があるような気がするが――

「――この白い仔も、竜なん？　さっき名前が出んかったけど」

「それ、おれなんだ」

秋穂が何気なく言ったその言葉を、馴は暫時吞み込めず、ただ目を瞬かせる。オレナンダ？　変な名前だ。どこか外国の出身だろうか。いや、まさか――

「おれがさ、アルバの……手品？　ってやつで竜に変身したんだよ。そのときの写真」

そこまで言われて、ようやく馴の脳内で言葉と意味とが結び付く。いや、本当はもっと早く理解できていたはずだが、どこか目を逸らしていたのかもしれない。というより――

「――なんか、ずりいっちゃ」

止める間もなく、口から言葉が漏れていた。

「ごめん！　そうだよな、おればっかり楽しいことやってる感じだし……大丈夫、馴のこともアルバたちに紹介するからさ、一緒に遊んだりとか……」

「あ、や、そ、そげんじゃのうて、その――」

慌ててしどろもどろになりつつ、馴自身も自分が思わず発した言葉に驚いていた。

そんな言葉が出て来た理由は……はっきりとは言語化できなかったが、心のどこか奥の方にしこりのようなものがあるのは分かった。

「――ずりいのはそん仔たちのほう。なんか、スウちゃんを独り占めしてるみてえで」

「馴……？」

これ以上言い訳をしてもさらに墓穴を掘るだけのような気がしたので、馴は頭を振ってなんとか笑みを浮かべる。

「う、ううん、ごめんねスウちゃん、変なこと言うて。せっかく来てくれたのに……あ、そう、えねるぎー！　その、探しとるやつ‼　明日、一緒に村ん中探してみようよ！」

秋穂にも笑顔になってほしくて、ふと思い浮かんだ提案を言ってみたが、それに対する反応は予想以上に劇的だった。

「え、マジ!? やったー、馴も手伝ってくれるなら、めっちゃ嬉しいよ！ おれも馴と一緒にいたかったし、サイコーじゃん!!」
……ただ、かれの上げた歓声がちょっと大きすぎたのか、隣の部屋にいた駿から「お前ら、とっとと寝ろ!!」と叱られてしまったが。

ともあれ枢沙と馴は、くすくすと笑いながら部屋の電気を消し、隣同士の布団に潜り込む。
「それじゃーおやすみ、馴！」
「う、うん、おやすみ……スウちゃん」
暗闇のなかで横になった馴は、まだ少しだけ逸る心のまま、おずおずとその手を隣に伸ばす。それを枢沙は何も言わずに柔らかく握り返し、ふたりはそのまま眠りについた。
……秋穂の寝相が悪くて、夜中に馴の布団にまで侵入した挙句、寝惚けて散々抱き付いてきたせいで、馴があまり深く眠れなかったのは、また別の話。

二

翌朝、雪はまだ静かに降り続いていた。春間家の居間で両家族揃って朝食を済ませたあと、枢沙は馴を引っ張るようにして外へ飛び出したのだった。

「よーっし、探検開始！」

フード付きのコート（馴のもの）を借りた秋穂は、積もった雪をざくざくと踏み締めながら道を歩く。

すこし遅れて、同じような格好をした馴も、白い息を吐きながら追いかけていく。

「ここでこげえに雪が積もるなんて、思いもせんじゃったなあ……」

秀方（ひでかた）の家々は、雪に覆われてまるで絵本の中みたいだった。場所によっては足が埋まってしまうくらいに雪が積もっている。

「……張り切って出てきたけど、どっか怪しげなところとか、馴は知ってる？」

「ええっ、ノープラン!?　す、スウちゃんらしいけど……」

馴は少し息を整え、タテガミを無意識に弄（いじ）りながら考える。

「ぱ、パワースポット的なところとか、あとは、古そうなところとか？　と、とりあえず、行ってみよっか」

そしてふたりは、とりあえず思い付いた場所、目に付いた場所から探検を始めることにしたのだった。

地区で唯一のお店がある辺り。雪と年の瀬の静けさが相俟（あいま）って、外に出ているひとは誰もいない。一際（ひときわ）古い建物を見かけて、辺りをぐるっと回ってみたが、特に変わったものはなかった。

「確か……古い酒蔵じゃったかな？　おじいちゃんが言っちょった気がする」

「うーん、何もなしかな。次行ってみよ！」
あぜ道が交わる辻の辺りに立っていた、古い石碑。積もった雪を払いのけると、よく分からない古い文字が彫られているのが見えた。
「おっ、これとか呪文みたいじゃん⁉」
「そ、そうかな……？　なんか、道標みたいな気もするけど……」
馴にそう言われてもう一度よく見てみれば、確かにそんな風にも思えてくる。
「ほら、これ……『右』？　……『日出』……うーん、読みきらんっちゃ」
「馴、すげー！　こんな文字読めるんだ」
「ん、んへへ……でも、また次探さなきゃ」
少し開けた場所に、一本だけ伸びる太い木。家のある辺りからは大分離れてしまったので、これ以上遠くへ行ったら怒られてしまうかもしれない。
秋穂はその木の幹にひしと抱き付き、耳を押し当ててみたが、特になにも聞こえない。……頭上の枝に積もっていた雪が落ちてきたので、慌てて避ける羽目にはなったが。
「これも、ただの木なのかな。ほんとは伝説の神が宿る木とかだったりしない⁉」
「う、うーん……それじゃったら、神社とかがあるんやないかな」
「むー。仕方ない、一旦村の中に戻ろう！」
そうして、さしもの秋穂も成果の上がらない捜索活動にはいい加減疲れてしまい、集落内の公園で一息つくことにしたのだった。
雪に埋もれた遊具はどれも古く、錆が浮いていて、妙に寂しげに見える。パワースポットというより、これでは心霊スポットみたいだ。
「良さげなエネルギーがあったら、びびっと分かるんだけどなー。アルバたちはひょいひょい見つけてたから、簡単だと思ってたのに」

秋穂はブランコに乗り、勢いよく漕ぎ始める。
その隣に馴は恐る恐る座って、軽く揺らす。
「行けそうなところは大体行っちゃったしなー。今日はこれくらいで諦めて帰ろっか」
「う、うん……」
ほっとしたような、でも少し残念そうな声で馴が頷くと、秋穂はぽんとブランコから飛び降りて、雪の積もった地面にぽすっと着地する。
「そうだ、またお風呂で馴の馬ちんをごしごしたらなにか分かっちゃうかも!?」
「う、うええ!? そ、それはもう、喜んで……じゃのうて、別にいいんやけど！」

ふたりで軽く笑いあいながら帰路につき、もうすぐ春間家の玄関が見えてくる辺りまで来たとき、馴はふと足を止めた。
「あれ……スウちゃん、こげなところに鳥居なんかあったかや？」
「えー……？」

それは、道の脇に佇む古ぼけた石造りの鳥居だった。赤い塗料もほとんど剥がれ、馴に言われるまではそこにそんなものがあったことさえ気付けなかった。——明らかに、怪しい。
「おおお……これだよ、これ！ この先に絶対なんかあるって!!」
秋穂の瞳は輝きを取り戻すと、そこから続く雪道をどんどん進んでいく。道の先にあるのは、どうやら春間家の裏山らしい。
「よっしゃー、馴、行くぞ！ 冒険だ!!」
「わ、ちょっと、待って……！」
意気揚々と山道を登る枢沙の後ろを、馴は慌てていて行くのだった。

＊＊＊

「はあ、ぜえ、さすがに疲れたなあ……」
馴はぽっちゃりした体を必死に動かしながら、時折転びそうになりつつも秋穂を追う。

「それに、家のすぐ裏にこんな山道があったたっち、いっちょん知らんかった」
「んー、もうすぐだと思ったんだけど……馴、大丈夫？」
　山道は思ったよりも長く、木々が生い茂って薄暗い。秋穂もすこしペースを落とし、ついて来る馴を気遣うように振り返るが、馴は額にかいた汗を拭いながら、鼻息を荒くする。
「うん……スウちゃんと一緒なら、こいくらい平気やけん……！」

　やがて、雪の積もる道を登りきったふたりの眼前に、小さな神社の境内らしいものが現れた。
麓にあったものと似た、同じくらい古臭くて苔むした鳥居。崩れかけて雪に埋もれつつある拝殿。賽銭箱も、無残に倒れたままだ。
　そして普通ならば狛犬がいるべき場所には、なぜか一対の馬の石像が並んでいた。……それも、牡のシンボルを際立たせた姿で。
「す、すげえ！　この像どっちも馬ちん丸出しじゃん!!」
　案の定秋穂がすぐに食いつき、目をキラキラ輝かせながら像を眺める。他の箇所は惨憺たる有様だが、この像は何故かそこまで損傷が酷くない。
「じゃけど、何なんじゃろ、ここ……神社？　その割には長いこと誰も来てなさそう……？」
　馴も、恐る恐るといった様子で境内を見渡す。壊れた石灯篭がそこらに転がっては雪を被り、元々広くもない空間を更に狭く感じさせている。
　息が詰まる、というよりは、何かに見られているような感覚をずっと振り払うこともできず、馴はただ身震いする。
「うー……なんか気味悪い」
「エネルギー的なやつがあるとしたら、やっぱあそこかな？」
　秋穂は本殿を示しながらそう言ったが、馴はその袖を軽く引きながら、不安げに口を開く。

「す……スウちゃん。やっぱりもう帰らん？　暗くなってきたし、遅くなると叱らるるよ」
そう言われて、秋穂も名残惜しそうに辺りを見回すが、踏ん切りをつけたように頷く。
「うん……そうだね。明日また来ようぜ！」
そして踵を返し、山を下りようとした時――

――吾が裔たる仔らよ……

どこからか、突風が吹き付けてきたような感覚とともに、太く低い声が聞こえた気がした。
「い、今のは⁉」
「スウちゃんも聞こえた⁉　なんか、頭ん中で声がしたような……！」
ふたりは思わず顔を見合わせ、目を丸くした……が、怪奇現象は謎の声に留まらなかった。
さっきまではまだ太陽も出ていたはずなのに、周囲は突然真っ暗になっていたのだ。

「す、スウちゃんっ！　こ、こわ、怖い……」
「だ……大丈夫、馴。おれがそばにいるから！　ほ、ほら、手握ってるからさ、な！」
……本当は秋穂自身があまりに怖くて、馴の手を握らずにはいられなかったのだが、そこは黙っておくことにした。
「お化けとか、幽霊とか、おらんよね……？」
「い、いないいない！　いるわけない‼」
もしも本当にそんなものがいたら、とてもではないが正気でいられる自信がなかったので、秋穂はここでも敢えてそう断言する。
「とにかく、帰り道を――」

――愛しき仔らよ、吾が許へ参れ……

「ひぃぃっ、また聞こえた……って、馴？」
手を繋いでいた馴がいきなり歩き出したので、秋穂は怖々ながらも声を掛ける。暗いからよく分からないが、下り道とは逆方向のはずだ。

「スウちゃん……あそこだよ、多分、行かんといけん」
「え、なに!? どうしたのさ馴、急に……」
　繋いだ手を放すこともできないまま、秋穂は馴の歩くままについて行く。いつしか雪も強くなってきたようで、吹き付ける風に木々は軋み、顔にはぴしぴしと雪の粒があたる。
　かれが目指す先はどうやら本殿のようだった。それが分かったのは、暗闇のなか、そこだけがなぜかぼうっと光って見えたからだ。
　拝殿と同様、かなり年季が入っているように見えるが、不思議と崩れた様子もなく、強まる吹雪に埋もれもせず、ただ静かに佇んでいる。
　その入口が近付くにつれて、秋穂にもなんとなく馴の感じていることが分かりかけてきた。
（なんか……この先に行かなきゃって気がする。怖いけど、でも、これが使命だ……みたいな）
　ふたりは、暗闇をぼんやり照らす光を目当てに、本来なら開いているはずのない本殿の入口をくぐる。そう大きくもない社殿の中央には、立派な木製の像が安置されていた。どうやら、光の出所はこの像らしい。
「馴、これって……」
「う、うん、すごいっちゃ……」
　ごくりと唾を飲み込みながら、改めてその像を眺めてみる。筋骨隆々で逞しい、神聖にして荘厳な馬の神らしき姿だ。その股間には当然のように立派で雄々しいシンボルが聳えている。
　ふたりの視線がその一点に吸い寄せられつつあったとき、三度頭のなかで声が響いた。
　――善くぞ参った。吾が声は恙なく届いたか。巫覡のチカラは消えておらぬようで重畳なり。

「や、やっぱりこれ、神様の声!?」

どちらともなく漏らした怯え声に、謎の声はくっくっと笑い声のようなものを立て、言葉を続ける。

——案ずるなかれ、吾（わし）は汝（うぬ）らの礼参（らいさん）を待っておったのだ。さあ、もっと近くへ。汝らの顔をよく見せい……

ふたりは未だに半信半疑のまま、馬神の像へ近寄る。すると像の目がキラリと光ったような気がした。

——ふむ……汝（うぬ）は顔に面影があるな。大方、駃（ケイ）の血筋であろう。

「ケイ……って、ひいおじいちゃん……？」

馴がぽつりと呟けば、まるでそれを肯定するかのように像の光が瞬く。

同時に、秋穂にも同じような声が聞こえた。

——そちは……ほう、虎か？　しかし吾（わ）が声を聴くチカラは残っておると。ふふ、面白い。どことなく馮（ヒョウ）の名残を感じるが……汝（うぬ）が同胞（はらから）に白い毛皮のものはいるか？

「と、父ちゃんと兄ちゃんがそうだけど……」

難しい言葉は分からないながらも、白い毛皮というところだけはどうにか聞き取れたので、秋穂は恐る恐るそう答える。

——そうか、やはりな！　ははは！　吾（わし）との縁（えにし）を幾代を経ても猶保つとは、実に労甚（ろうた）きものよな。善い、善いぞ！

謎の声の主はその返事がお気に召したようで、上機嫌な笑い声を響かせていたが、枢沙と馴はただぽかんと口を開けるしかなかった。

「ご、ごめんなさい……けど、まだよく分からんで、その……あなたは、どなたですか？」

ややあって、勇気を振り絞った馴が口を開くと、相手は少しだけ虚を衝かれたようだった。

――む？　吾の名は汝らも良く知っておろう。日出縣が祖神、宇摩志日出訶備土命、となり！

あまりにも長い、聞き覚えもあるはずがない名前が耳の間を通り抜けて行ったので、いよいよ困ったふたりは顔を見合わせるしかなかった。

「ウマ……え⁇　な、なあ馴、なんて……？」

「うええっ⁉　い、いや、ぼくも良く聞こえんかったけん……」

――な、なんじゃ汝ら、この地を領る神の名を知らぬと申すか？　心して聴け、ウマシヒデカビツチノミコトとは吾のことなり！

焦りの色を強めた声が再び告げたその名も、ふたりの幼い頭は上手く掴み取ることができず、男児の偏った語彙の中から近いものを捻り出すのが精一杯だった。そして、それは――

「う、うま……でか……ち……？」

「デカチン、様？」

泰然たる態度をなんとかギリギリまで崩さなかった声の主すら絶句させる代物であった。

静まり返った本殿のなかで、ふたりに見つめられた像の股間だけが、妙に荘厳に光り輝く。

しばらくはぎこちない沈黙がその場を支配していたが、ようやく気を取り直したかのように（そして自分に言い聞かせるかのように）声が再び聞こえてきた。

――い、いや、他ならぬ吾が愛し子らの申すことじゃ、汝らの捧ぐる声を吾は嬉しく思うぞ。

「えっと、じゃあ……デカチン様って呼んでも良いの？」
恐る恐るそう聞いた秋穂に、謎の声はどこか諦めを含んだような、しかしあくまでも優しい声音で答えを返す。
――無論よな。吾(わし)のことを想い呼ばれる名であれば、否(いな)やを申す道理もなし。少々面食らってはしまったが……汝(うぬ)らの赤誠こそ吾が宝なのじゃからな、ウン……
それを聞いた秋穂は、さっきまでの怯(おび)えっぷりはどこへやら、目を輝かせて質問を重ねる。
「わーい！　ねえ、この像がデカチン様なの？　やっぱり神様ってこと？　すっげー……！」
――おお、そうじゃ、吾(わ)が稜威(いつ)を汝(うぬ)らの目に写さば、その憂懼(ゆうく)も無用となろう。善し、汝らには吾の姿を拝する誉れを授けようぞ。
その声を認識した次の瞬間、像に宿っていた光が爆発したかのように、目も眩(くら)むほどの輝きを放った。
社殿の扉がバタンと閉じたかと思えば、どこからともなくつむじ風の如き空気の流れが像を中心として巻き起こる。
男児ふたりは堪(たま)らず目を瞑(つぶ)り、その場に膝をつく。やがて、光と風が収まってふたりが目を開いたとき、その場で目撃したのは――
「――って、な、なんじゃコレは⁉」
神の像とは似ても似つかない可愛らしい馬の少年が、甲高い声で絶叫している姿だった。

＊＊＊

「要するにデカチン様は、本当はもっと強くてでっかい神様やったっちこと……？」

「然り、今更その真偽を論おうとも詮無きことではあるが……むぅ」

自称この辺り一帯の神というその小さな少年は、ひとしきり自らの現状について驚愕したり嘆いたりとドタバタした挙句、変えようのない現実を受け容れざるを得ないと観念したのか、とりあえずはその場に腰を下ろしたのだった。

背丈は秋穂よりも頭一つ小さい程で、体躯もかなり華奢にみえる。顔立ちも言ってしまえば幼い部類で、大きな黄金の瞳が目立っている。

それだけならば、自らを神だなどと言い張る言葉は到底信じるに値しなかっただろう。

だが、何もない場所に突如現れた神秘性や、かれの身体を縁取るほんのり明るい霊気のようなもの、それになにより……股間のモノだけは可愛らしい顔に似合わず、神の名に恥じぬほど立派に屹立して、かれが超常の存在であることを強く主張していた。

(うひょー、馴のよりでっかい……!)

案の定というべきか、秋穂の両目は大好きなちんぽに釘付けになる。身体が小さいからこそ、その巨大さも目立つのかもしれない。……そう考えれば、アルバもそうだよな、と思い出す。

さすがにその視線が気になったのか、神霊は子供らしい頬を膨らませて声を上げた。

「むっ、なんじゃその目は、無礼であるぞ!……いや待て、分かった。これはな――汝らの信仰が足りぬが故。ひいては吾の慢心と懈怠が招いた事態じゃ」

小さな神の化身は、精一杯の威厳を保とうと胸を張っていたが、少ししゅんとなって黄金の瞳を伏せる。

「いみじくも汝らが申した通り……吾が名を知る氏子らが、もはや絶えつつあるのじゃろう。然れば吾が神力が衰うるも必定。とは申せ……まさかここまでとはな」

項垂れるかれの様子は、見た目通りの幼子のようにも見えて、秋穂はちょっぴりどぎまぎしながら馴に耳打ちする。

「ちっちゃいデカチン様……かわいそうだけど、なんかちょっと、可愛いよね」

「う……わ、分かる気がする……」

「聞こえておるわ！」

そんな風に憤慨して見せながらも、デカチン様はすぐに気を取り直すと、鷹揚とした笑みを浮かべる。

「まあ善い、せっかく吾が愛し仔らが来てくれたのじゃからな。汝らが在ればこそ、吾はまだ消えずにいられる。今はそれで善しとしよう」

その言葉は神としての矜持だったのだろうか、少なくとも嘘や強がりなどではなさそうだったが、隠しきれない寂しさを湛えたその表情に、秋穂の口が思わず開くと、さっきまでは考えもしていなかった言葉が滑り出た。

「――だったら、おれがデカチン様のチカラを取り戻すお手伝いするよ！」

隣にいた馴は、その言葉にほんの一瞬驚いたような様子だったが、すぐに心を決めたかの如く、軽く頷く。

「スウちゃん……う、うん、ぼくも手伝う！」

にわかに盛り上がったふたりに対して、幼い姿の神霊は目を白黒させる。

「ま、真か？　いやしかし、汝らには他に為すべきこともあるだろう？　定命なる仔らの時を徒にするは、吾とて本意ではない故な」

いかにも慌てたようなその物言いに、秋穂はにかっと笑って「ううん、大丈夫だよ」と言いつつ、どのように伝えるべきかを考えながら、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「おれたち、えっちなエネルギーってやつを探してさ。もしかしたら、それがデカチン様のチカラにもなるんじゃないかなー……って」

具体的なことは何も伝わらない内容ながら、永く忘れられていた神にとっては甚く心に響く言葉だったらしく、かれは今にも号泣しそうに瞳を潤ませ、声を詰まらせながら男児ふたりを言祝ぐ。

「おお……なんたる献身！　なんたる誠忠!!　汝らの想い、断じて疎かにはするまいぞ。充分な力を取り戻した暁には相応の幸を以て酬いると、我が名に掛けて盟おうぞ！」

と、感動に打ち震える神様の言葉は結局よく分からなかったが、秋穂はとりあえずにっこり笑ってみせるのだった。

「お礼とか、そういうの、気にしなくて良いよ。それより、おれたちにできることってある？」

その問いに、神の化身は顎をさする。

「そうじゃな、吾の名と霊威を皆が思い出し、尊崇を取り戻すことが能わば至善と言えようが……そうすぐには叶わぬじゃろうよ。まずは、汝らだけでも吾を覚えていてほしい」

思ったよりもかなり控えめな願いを、しかし真摯な表情で告げる幼い姿に、秋穂と馴も釣られて背筋をぴんと伸ばし、素直に頷く。

「うん！　他には？」

「も……もちろん、ずっと覚えとるけん……」

元気な答えに神霊は柔らかく笑んで、言葉を続ける。

「うむ、願わくば、汝らの血に連なるものにも吾が存在を再び弘めてくれぬか。きっかけさえあれば、程なく信仰も戻ろうぞ。……そうじゃ、そのためにも吾が神力の一端を汝に託そう！　さあ、近う寄れ」

そう言って手招きするかれの手元へ、秋穂は無造作に近付いていく。小さな馬の姿をとった神霊の指先に、秋穂の方も手を伸ばして触れようとし――

「……む？　ま、待て、これは――!?」

「え？　……わ、わあ――ッ!?」

——その瞬間、双方とも予想だにしなかったエネルギーの奔流が神と秋穂の間を駆け抜け、夥しい光が狭い堂内を呑み込んだ。

　そのときの衝撃を、秋穂は朧気な意識のなか妙に客観的な視点で感じていた。
　かれのまだ幼いカラダに熱い痺れが走ると、全身の毛皮がぞわぞわと蠢き、色を変えていく。
　金と黒の縞模様はみるみる薄れて白い馬毛に生え替わり、猫科らしく短い鼻面がぐいぐいと伸びて鼻腔が大きく拡がる。
　同時に、身体中の筋肉が刻一刻と逞しく膨らんでいき、肩幅も一回り大きくなる。
俄に増大したその体躯を支えるために、足腰の造りも根本から再構築されていき、柔らかな肉球があったはずの足先は、見る間に蹄へ変化してカツンと床を蹴る。
　そして何より……ズボンの下に隠されていた股間のモノに、重く熱く脈打つチカラが漲る。
　急激に窮屈になりつつあったかれのパンツは早々に役割を放棄してしまったようで、内側から強まり続けた圧力に耐えきれず、遂にはびりびりに破れ落ちてしまう。
　その中から、先程までかれ自身が羨望の眼で眺めていた馬神の逸物そのものが、びきびきとのたくる血管や湯気まで立つほどの熱気と匂い、節くれ立った牡馬らしいカタチもそのままに、冗談のように巨大な勇姿を冷たい空気の中へと晒しだしたのだった。

　……やがて、始まったときと同様の唐突さで光の乱舞は収まり、後に残されたのはふたりの少年だけ。いまだチカチカする目を擦りながら、吹き飛んでしまった意識をたぐり寄せる。

「む……んん……？　いま、何が……？」
「う、え、その声、す、スウちゃん……？」

何か理解の埒外のものを目にしたかのように声を上擦らせ、フリーズしてしまった馴の問いに、秋穂は内心で疑問符を浮かべつつ答える。

「もちろん、おれだけど――って、んぐっ？　なんか声がヘン？　いや、声だけじゃなくって……え、おれのカラダ、なにこれっ!?」

「スウちゃんがっ、う、馬になっちょる!?」

ふたりして狼狽の声を上げつつ、手で触れて確かめもしたが、その度に否定しがたい厳然たる事実だけが突きつけられる。

頬を抓っても痛みを感じるだけで、夢なのではという望みも絶たれた。ここに至っては、ただ粛々と目の前の現実を受け容れ、認めるしかない。

秋穂枢沙は、いま、誰がどう見ても馬だった。

＊＊＊

「わー、すげー……蹄ってこんな感じなんだ」

最初の混乱が過ぎてしまうと、秋穂の脳内は不安や恐怖よりもむしろ自分の新しいカラダに対する興味と好奇心で埋め尽くされてしまい、鼻息も荒くあちこちを触りまくっていた。

毛皮はほとんど白一色だが、うっすらと虎斑の名残が見える。目の色やカタチは以前のままに近く、全体的な雰囲気としては直前までかれらの前にいた神の化身にもどこか似ている。

「え、えっと、スウちゃん、大丈夫なん……？　痛えところとかない？」

「ぜんぜん平気！　それより見て見て、馴！　やっぱちんぽもでっけー!!　デカチン様みたいじゃね!?」

秋穂はすっかりはしゃいだ様子で、馬らしい剛直と化した相棒を自慢げに奮い立たせる。どうやら、自分が一瞬のうちに種族すら変わってしまったことなど、屁とも思っていないらしい。

その勢いに流されるがまま、馴もその逸物に目を奪われかけていたが、はっと正気に戻って頭を振る。……そして、ふと気付いた。

「あれ、そういえばデカチン様は……？」

「え？　ホントだ。き、消えちゃったのかな？　でも、なんでだろ。おれがさっきデカチン様の手に触ろうとして、急にすごく眩しくなって、えっと、それから――」

――仔らよ、案ずるな。吾はここに居る故。されど、これは些（いささ）か想定外と言うほかないな。

聞き覚えのある声を感じて、ふたりは辺りをきょろきょろと眺めた。

堂内に響くというよりは、どこかくぐもったような聞こえ方だった。それに、最初のような威厳がある低い声でもなく、子供の姿になったあとのように高い声だった気もする。

「デ、デカチン様？　いま声がしたやんね？」

狭い社殿のなかなのに、一向に姿が見えない声の主を探すうち、秋穂ははたと気付く。

「あれ……ひょっとして、おれの中から聞こえてる……？」

――いかにも。俄（にわか）には信じ難（がた）きことながら、吾が神力は汝（な）が身に悉（ことごと）く吸収されたようじゃ。理由は……まあ、数多（あまた）の条件が組み合わさってしまったから、と言うほかなかろうな。

再び神霊の声が聞こえて、ふたりは目を見合わせた。はっきりとは分からないながら、何かとんでもない事態に巻き込まれてしまったような不穏な雰囲気に、ごくりと生唾（なまつば）を飲む。

——汝(うぬ)は吾(わ)が巫覡(かんなぎ)でありながら、馬たる血が殆ど残っておらぬ。故(かれ)、その身は旱(ひでり)に慈雨の降る如く、吾がチカラを呑み尽くさんとしたのじゃ。

「も、元には戻しきらんのですか？」

馴の問いに応えるように、馬になった秋穂の肉体が淡く光る。しかしその光はすぐに勢いを失い、ぼんやりと薄れて消えていった。

——うむ……皮肉なことだが、この身と吾がチカラの相性が良すぎたということやも知れぬ。どういうわけか、此奴(こやつ)の身体は外からの影響で変じやすい癖が付いているようでな。

（あ……それってまさか、夏休みに散々アルバたちと遊んで変身してたからとかかな……？）

色々と心当たりがある秋穂は内心でだらだらと冷や汗を掻きながら俯(うつむ)くしかなかったのだが、馴の方は必死で言葉を続ける。

「で、でも、このままじゃ、家にも帰られんし、お父さんたちになんて言えば良いか……」

その様子に神も心を動かされたのか、少しの間を置いて躊躇(ためら)い混じりの声が聞こえてきた。

——そうさな、残されたなけなしのチカラで少しの範囲なれば誤魔化(ごまか)しもできよう。しかしそうなれば汝らにもひとつ、手助けを願わねばならぬ。吾(わし)こそが庇護を与えるべき仔らにかくの如き不便を強いるは、神の名折れとも言うべきなるが……

そこには己の不甲斐(ふがい)なさへの嘆きが篭(こ)められているようだったが、秋穂はただ明るく笑って胸を叩く。

「ううん、そんなことないよ！　言ったでしょ、おれたちもデカチン様のお手伝いするって！」

そして馴も、言葉にはならないまでも、熱心に頷き、鼻息を荒げて同意してみせるのだった。

——返す返すも頼もしきかな！　吾(わ)が神力の復活にはやはり祭が肝要となろう。大晦日(おおつごもり)ともならば、この斎庭(ゆにわ)に愛しき仔らが集ったものなるが……今は嘆いても詮無(せんな)きこと。叶うならば汝(うぬ)らだけでも、その蘖(ひこばえ)となって欲しいのだ。

難しい言葉を並べられたが、要するにお祭りをすれば良いということらしい。ふたりはとりあえず、頷いてみせる。

「お祭り、かあ……お、お父さんなら、やり方知ってるかな……？」

「いっぺん帰って、聞いてみるしかないね」

——うむ、本式の祭儀は絶えて久しい。嘗(かつ)て参じたものがいたとしても、儚(はかな)い仔らの記憶は移ろい褪(あ)せているやも知れぬ。汝らには重き荷を負わせることとなるが……せめてその願いを叶えられるよう、吾(わし)も最後の神力を振り絞るとしよう！

そんな声が聞こえたかと思うと、秋穂の身体に宿った光が突然輝きを増し、空中へ浮かび上がると、花火のようにぱあっと広がった。

光の粒が散り散りになってその場で掻き消えても、目に見える変化はなにもなかった……が、秋穂と馴は朧気(おぼろげ)ながら、自分たちを中心として何かが変わりつつあることを感じていた。

——これで良し。汝(うぬ)らに纏(まつ)わる世界の認識を、ほんの少しではあるが撓(たわ)めておいた。幾許(いくばく)かは弊害があるやも知れぬが……まあ、なんとかなるじゃろう！

何だかちょっと無責任だな、と秋穂は心の中でちらりと思ったが、口には出さなかった。

——今の吾(わし)に能(あた)うのはここまでのようじゃ。仔らよ……相済(あいす)まぬ、吾は暫(しば)し眠らざるを得ぬ。どうか、その歩みに障(さわ)り無く、実り多かれ……

声は次第に薄れ、やがて聞こえなくなって、後に残されたふたりの男児はしばし呆然としていたが、やがてどちらからともなく口を開いた。

「デカチン様、いなくなっちゃったね」
「うん……ちょっと眠るとか言うちょったから、スマホの節電モードみたいなもん、かな？」
なるべく明るい声色で冗談っぽく振る舞おうとしたが、馴は急に襲ってきた不安に声を少し震わせながら言葉を続ける。
「じゃけど、ぼくらだけで大丈夫なんかな」

秋穂はすぐに返事をしようとして口を開きかけたが、前髪に隠れて見えないはずの馴の目に様々な思いが揺れ動くのを感じ取った気がして、少しの間言い淀(よど)む。
「……えっと、馴。ごめんね。おれがあちこち連れ回したせいで、こんなとんでもないことに巻き込んじゃって」
「うぇっ!? う……ううんっ、そうやなくて！　その、スウちゃんと一緒におれたんは、すごく嬉しくて、ただ、ぼくが……ドジやけん、足手まといにならんかな、って」
声を詰まらせるように呟く馴に、それ以上は寂しい顔をさせたくなかった。そう思ったとき、秋穂の手は、無意識のうちに馴のふくよかな体を抱き寄せていた。
「――それは、心配ないよ。馴と一緒だったら、きっとなんでもできるからさ！」
「スウ、ちゃん……」
馬になって、毛皮も虎の時より少しだけ薄くなったせいか、馴の体温がもっと近く感じられた気がして、秋穂は照れ臭そうに微笑み、馴もつられて顔を綻(ほころ)ばせる。……こんな風に秋穂が隣にいてくれるだけで、馴の胸の中に渦巻いていた暗い気持ちは、嘘のように解(ほど)けていくようだった。

（スウちゃんの身体……こげえ近くで見たら、馬になって筋肉がもっと増えた気がする）

　抱きしめてくれる秋穂の背をぎこちなく撫で返しながら、馴はそんな風に感じて密かに興奮する。……どこか心の奥で、かれが自分と同じ馬になったことを喜んでいる自分がいることに気付いてはいたが、馴はその気持ちを胸の中にしまっておくことにした。

　ややあって抱擁（ほうよう）を解いた秋穂は、いつも通りなんの悩みもなさそうな表情になって、明るいはしゃぎ声を上げる。

「それより、お祭りってどんなのかなー。デカチン様のお祭りだから、ひょっとしてちんぽでチャンバラとかしたりして!?」

　そんなことを言われたものだから、馴も互いの股間で身を潜めている凶器のことを思い出し、ぶわっと顔を赤く染める。

「やっ、やめえ！　そげえことばかり言いよると、神様に叱らるるよ……！」

　と、口ではあわあわと言いながらも、頭の中ではその光景をばっちり想像してしまったのか、馴のズボンは傍（はた）から見ても丸わかりなほど堆（うずたか）く盛り上がり、今にも破けそうなほどであった。

「おおー、馴もビンビンじゃん！　おれも負けてらんないぞー!!」

「もうっ、スウちゃん！　そ、それより見て、お堂の外、また明るうなっちょるけん、ね！　とりあえず、家まで帰ろ!!」

「あ、待ってよ、まだ蹄（ひづめ）で歩くの、慣れてないから……！」

　こうして、新たな肉体の感覚にいまだ戸惑いつつも、秋穂は馴とともに山を降り、春間家へ戻るのであった。

三

「た、ただいま〜〜……」
　春間家の玄関を恐る恐るくぐると、ちょうど籟（ライ）と駿（シュン）がふたりで喋っているところだった。
「お、スウ。遅かったじゃねえか。どっか遠くまで行ってたのか？　……あー、ジュンも一緒だったか」
　こちらを見て口を開いた兄の声が、あまりにもいつも通りで何事もなかったかのようだったので、枢沙は逆に面食らってしまう。
「あー、その、兄ちゃん……おれのこと、ちゃんと分かる？　なんかヘンじゃ……ない？」
　視線は無意識のうちに蹄と化した自分の足元へと向き、緊張のためか声もだいぶ上擦って、挙動不審なことこの上ない。
　しかし、かれの勇気を振り絞った質問に対し、籟はただ訝（いぶか）しげに眉を顰（ひそ）めるばかりだった。
「はぁ……？　何言ってるか良く分からんが、またなんか妙なイタズラとかしてたんじゃねぇよな？　怒られるまえに言っとけよ」
「い、いやっ！　イタズラじゃないけど、うん、まあ……あはは、気にしなくていいよ！」
　それ以上は下手に追求されないよう、笑って誤魔化してはみたが、馬に変身してしまったことを見咎（みとが）められる心配はなさそうだったので、ほっと息を吐く。
（多分、デカチン様が言ってた、世界の認識がどうとかっていうのはこのことなんだろうな。……けっこー便利じゃん！）
　と、枢沙が密かに感心していると、駿が馴と自分に向かってぼやき混じりの声を掛けてくるのが聞こえた。
「なぁお前ら……ライが家におるときくらいは大人しゅうせえっち言いよろうが」

そして籟も、ははっと苦笑いしながら言葉を添える。
「まあ、そこはあんま気にしなくていい。俺にとっちゃ、お前らふたりとも弟みたいなもんだから」
「……え？」
兄が言った言葉の意味が理解できず、枢沙は馴の方を見る。だがその馴も見るからに困惑の表情を浮かべていて——どうやら、聞き間違いなどではなかったようだ、とかれは悟る。
弟みたいなもん？
「に……兄ちゃん、それ……」
「あ、ライ。ここにいたのね」
言いかける前に、奥から秋穂の母が現れる。
……なぜか、猛烈にイヤな予感がした。
「駿と話してた。そしたらちょうどこいつらも外から帰ってきてさ」
籟の返事を聞いて、リカの視線が動く。
「あらおかえり、ジュンちゃん、スウちゃん」
「あっ、あ……」
それは確かにいつも見慣れた母の笑顔だった。けれど、違う。枢沙はそんな風に見られたことはなかった。その眼差しは、息子へ向けるものではなくて——
「……ご、ごめんなさい、部屋に戻るね！」
「あ、ま、待ってよ、スウちゃん……！」
無性に怖くなったかれは、逃げるように馴の部屋へ駆け出す。馴も慌ててその後を追うと、残された一同はぽかんとした顔になった。
「どうしたんだ、あいつ？」
「さあ……さっきからなんか、変なことばかり言いよったなあ」
駿と籟はそう言って肩を竦め、リカも心配そうに首を傾げるしかないのだった。

「だ、大丈夫、スウちゃん……？」
「あ……うん、ごめん……ちょっと、びっくりしちゃって」
部屋に入るや、枢沙は腰からへなへなと崩れ落ちてしまい、ばつの悪さと脳内のパニックを笑って誤魔化そうとした。
心臓の鼓動もいつになく暴れ気味で、それをどうにか鎮(しず)めようと胸に手を当て、何度か深呼吸をする。
そして、ようやく一旦落ち着くと、まだ少しだけ震えの残る声で馴に話しかける。
「あれってさ、つまり、兄ちゃんと母ちゃんが、その……」
「う、うん……多分、スウちゃんがライ兄(にい)の弟じゃのうて、……ぼ、ぼくの弟っちことになっちょるみたい」
つっかえながらも言葉にしたことで、互いに現状への理解がようやく追いついてきて、この事態が現実なのだと呑み込めるようになった。
枢沙も、いつまでもへたり込んではいられないので、気持ちを切り替えるように頬を叩くと、大きく息を吐く。
「いやー……思ってたより、ヤバいことになっちゃってるな。むむむ、これってやっぱ、デカチン様のチカラのせいだよなー……というか、ここに机って二つもあったっけ？」
少し心に余裕が戻って周囲にも目を向けられるようになったことで、部屋の内装も以前とは変わっていることに気付いた。
もともと部屋には馴の机が置かれていたが、その隣にもう一つ、同じくらいの大きさの机がいつの間にか現れていたのだ。
「ううん、ぼくの机だけじゃったよ。見覚えはない、はず……じゃけど……」
言い淀(よど)む馴の気持ちは、枢沙にもなんとなく分かる気がした。認識している記憶とは裏腹に、その机のどこに何が入っているのか、不思議と直感的に分かってしまうのだ。

……いや、〝覚えている〟と言ってしまったほうが、かれの感覚には近い。
もちろんそれが、今までの自分にはなかったはずの記憶だという意識もある。枢沙の家の、自室にあった机のこともちゃんと思い出せる。
それでも……その机は、かれの机だった。

「……あ、ほら見て、スウちゃんのノート！」
枢沙が記憶の混乱にぼんやりしているうちに、馴が机の上からノートを持ち上げる。昨日まで宿題のために使っていたもので間違いない。
その表紙に書かれていた名前は――
「春間……スウ？　うん、どう見てもおれの字だし、中身も……昨日馴と一緒に解いてた問題もそのままだ」

その他にも、部屋中のありとあらゆるモノは、ふたりがずっとここで一緒に暮らしてきたことを如実に物語る存在ばかりだった。

テーマパークのような場所で撮られた、馬の三兄弟の写真。
拙（つたな）い絵とともに「じゅんにいちゃん」と描かれている古びた画用紙。
何かの大会で貰ったらしい賞状にも、確かに『春間駒（ハルマスウ）』と名前が書かれている。

「おれ、こんな字書けないよ」
「あ、あはは……」
画数が多くてごちゃごちゃしているから、お手本を見ても絶対にきれいには書けそうもない。
……それでも、一見して読み方が思い浮かんだのは、自分の名前だから、なのだろう。
認めるしかない。かれの名前は今、駒（スウ）なのだ。

「スマホはどうなってるんだろ」
いつも眺めているチャットアプリを開くと、プロフィール写真が変わっているのはもちろん、連絡先もがらりと入れ替わっていた。

「知らない名前がいっぱいある……のに、エノシタとかミナミの名前がなくなってる……」
「これ、うちの近所の仔たちの名前やね」
「……あれ？　でも、アルバとムルトの名前はある！　あ……よ、良かった……」

見覚えのないものばかりに囲まれて、思ったよりもストレスを感じていたらしく、そんな中よく知った名前を見つけただけで、かれは言葉にならないほどの安堵を覚えていた。
（そうだ、ふたりにも状況を伝えなきゃ！）
そう思い付き、早速メッセージを送信するが、いつまで経っても既読はつかない。
（うう――……別の世界に行くとか言ってたもんなあ。すぐには、返事来ないかも……）
横で心配そうに見ている馴にも首を振って、ひとまずはスマホを置くことにする。
そして枢沙は――駒は、半ば自分に言い聞かせるかのように、声を上げた。

「決めた。とにかくいまは、じたばたしてても仕方ないし……おれ、馴の弟をちゃんとやって、家族のみんなとお話しようと思う！」
「！　……う、うんっ」
その言葉に、馴はどこかホッとしたような、嬉しそうな様子になって頷く。
「それで、デカチン様のお祭りだっけ、それも早いとこやって、元に戻して貰わなきゃね」
「――、うん。そ……そう、だよね」
「お祭りのやり方とか全然分かんないもんなー。やっぱ屋台とかもいっぱい要るよね？　あとは盆踊りとか？」
少し間を置いてから、馴は冷静にツッコむ。
「……そ、それは、お正月だから違うんじゃないかな？　多分、もっとなんか、儀式的なやつだと思う」
「ちぇー。まあ、あんな山奥のボロい神社だとどっちも難しそうだよなー。じゃあそこらへんも父ちゃんと母ちゃんたちに聞いてみようっと」

それからふたりは、どうすれば家族の協力を得られるか、夕飯の呼び声が掛かるまでの間、話し合うことにしたのだった。

＊＊＊

その日の晩ご飯は、寒い日にぴったりのお鍋だった。大根やゴボウ、里芋などの根菜もたくさん入っている。……もちろん、ニンジンも。

（う、うえ……）

　駒の前に置かれたお椀にも、さも当たり前のように、ニンジンがたっぷりと装（よそ）われてしまった。咄嗟（とっさ）に馴に助けを求めようとして、再度お椀に目を移したとき、かれは異変に気付く。

（あれ……なんだこれ、なんで？）

　山盛りのニンジンを見れば見るほど、口の中に涎（よだれ）が湧いて止まらないのだ。試しに恐る恐るその鮮やかな橙色の塊を口へ運ぶと……想像を遥かに超える味のハーモニーが魂を圧倒した。

（え⁉　嘘、なんで⁉　甘くて濃厚で、ちょっぴり苦いのも逆に美味しさを引き立ててる……なにより土の匂いが、大地との繋がりを感じさせてくれる……‼）

　駒の脳内には普段なら絶対に出てこないレベルの言葉が狂喜乱舞し、その手と口は内心の驚愕などお構いなしに、ただ本能の赴（おもむ）くままに猛烈な勢いでニンジンを平らげていく。

「おかわり‼」

「はいはい、慌てなくてもたっぷりあるから」

「ははは……スウは昔っから、本当にニンジンが大好きだよな」

　両家の家族は、それをいつもの光景とでも言いたげに苦笑するばかり。ただひとり驚いた顔をしているのは、隣に座る馴だけだった。

　食事がある程度落ち着いてきたころ、ふたりはいよいよ家族に質問を投げかけてみることにした。

「今日さ……駲と一緒にこの辺を探検してて、裏山に登ったんだけど、なんか古い神社っぽいのがあったんだよね。あれって何なの？」

「ん？　裏山の……ああ。元々はうちの本家が管理してた神社らしいな。スウのひい爺(じい)ちゃんの代くらいから、本家の坊(ぼん)が跡継ぎを嫌がって抛(ほた)ったとかで、そんなり有耶無耶(うやむや)になっちょるが」

　夕飯の席でしこたま酒を飲んで上機嫌になった駸(シン)は、息子たちの突然の問いに疑問を抱くこともなく、あっさりとそう答える。

「俺がまだ小さいときにも話を聞いたことがあったな……駸の家でも昔は色々と変な決まりを守ったりしてたんだろ？　俺の爺さんが秀方(ひでかた)を出て秋穂の家に婿(むこ)入りしたのもそのせいだって言うし」

　同じく顔を赤らめた秋穂の父、譲(ジョウ)も口を挟む。

「しきたりだっけか。双子(ふたご)は一つ所に置いてちゃいけねえ、みてえな」

「そうそう、そいが駉(ケイ)爺ちゃんと馮(ヒョウ)爺ちゃん。なんやったかな、神様のチカラが濃うなりすぎるとか……？　まあ、ただの言い伝えみたいなもんじゃろ。うちは分家やけん、大した情報も残っちょらんに」

「そ、その神様んこと、誰(だい)か詳しゅう知らんかな？　……あ、ほ、ほら、地元のこととか、調べんといけんくて」

　駲は精一杯にそれらしい理由を並べて、父の言葉を待つ。駸は少しだけ怪訝(けげん)な表情を浮かべかけたが、すぐに自ら納得して答えた。

「あー……冬休みの宿題かなんかか？　親父がしゃんとしよったら良かったけど、ここ最近はぼんやりしよる日も多うなって来たしなあ」

　しみじみと語る駸に、譲も低く唸りながら問い掛ける。

「騂(セイ)さん、元気にしてるか？　そう言やあ長いこと会ってねえもんな……うちの爺さんの葬式以来か？」

「身体はまだまだよう動くんやが、頭の方がね。まあ、近くにおるけん、様子は見ちょるよ」

（うーん……父ちゃんたちも、あんまり詳しくないみたい？　馴の爺ちゃんに聞いてみるしかないかな）

　小声で馴に呟くと、馴も小さく頷いてくれたので、騶は家族に聞こえるように言った。

「あー、じゃあおれ、おじいちゃんのところ、行きたいなー」

「そうか？　まあ、年末やしちょうど良いか。ほんなら明日みんなで行こう」

　……少々わざとらしくはなってしまったが、それ以上特に追求されることもなく、ふたりは明日、最後の頼みの綱である祖父の家に行くことになった。

＊＊＊

　その夜、みんなが寝静まったころ。

　騶はこっそりと布団から這い出ると、月明かりの差す窓辺へ近付いた。外はまだ雪がちらついていて、見るからに寒そうだが、部屋の中は暖房が効いているから、充分暖かい。

　……というより、かれの肉体は今、熱すぎるほどの熱を、その下腹部に感じていた。

　思い切って上半身のパジャマを脱げば、まだ見慣れない白い毛皮の腕やお腹が、柔らかな月光に照らされてキラキラと光る。こころなしか、虎だったころよりも筋肉がはっきり分かるような気もする。

（馬のカラダ……改めて見たら、すげーカッコいいな……）

　どきどき高鳴る胸の鼓動に合わせて、穿いている下着がどんどん窮屈になってきた。慌ててズボンとブリーフをずらすと、湯気が立つほどに熱く、巨大な、赤黒い肉の塊が、びくびくと身を震わせながらその姿を現した。

（く……臭(くさ)ぁっ、けど、……好き……）

それは、匂いすら以前のモノとは段違いで、野性的で強烈な牡(オス)の発情臭が駒の大きくなった鼻腔(びこう)を強引に掻き回す。

　風呂場で見た馴のちんぽと同じ、馬のカタチ。節くれ立った太い幹(みき)と、平たく広がる先端部。重く、大きく、丸々とした睾丸(こうがん)。それら全てが規格外のサイズと質量でかれの股間に陣取り、存在感を誇示している。

　黒く硬くなった駒の指先がその表面をなぞるだけで、かれの脳内ではびりびりした快楽が渦巻き、全てを染め上げ、何も考えられなくしてしまう。

　……そして、その怪物は、まだ成長を止めたわけではなかった。駒が熱に浮かされたように馬ちんを擦(さす)り、扱(しご)いていくごとに、その巨大なシルエットはますます膨張し、遂には顔の前にまで迫るほどになっていた。

すると当然、立ち昇る臭気もさらに濃厚になって、駒の興奮は加速度的に増していく。

（こ……ッ、これヤバっ、匂いだけでイッちゃう、かもッ……！）

　苦し紛れに舌を突き出したが、それが間違いだった。長くなった舌の先はちょうどちんぽの先端をなぞり、脳内にしょっぱく苦い大好きなちんぽの味を伝えるとともに、ねっとりとした舌に舐(ねぶ)られた肉棒は遂に我慢の臨界点を超え、びくびくと身を躍らせ、脈動を早める。

（あ、あッ、あ……〰〰〰!!）

　反射的にそれをはむっと咥(くわ)え、口の中へ迎え入れるが早いが、駒の馬ちんは精巣の奥底から白く煮え滾(たぎ)る溶岩を怒濤(どとう)の勢いで噴出し、喉の奥まで熱く粘着(ねばつ)く馬精を迸(ほとばし)らせたのだった。

（んぐっ、多すぎ、でも、美味（うま）……っ）

射精の勢いはなおも衰えず、びゅーびゅーと流れ込んで、遂には口の端や鼻の孔（あな）からさえもこぼれ出る始末。さすがの騶もげほげほと噎（む）せてしまったが、視覚も味覚も嗅覚も、すべてが白濁に塗り潰されて、かれはいま、この上なく幸せだった。

（ああ〜〜〜……馬のカラダ、サイコー……）

ぶるる、と鼻を鳴らしながら呆けていた騶は、とりあえず至る所に散った飛沫（しぶき）を舐めてキレイにしてから、布団に入り直す前に水で洗い流そうと、洗面所へ出て行くのだった。

……そして、かれは気付いていなかったが、部屋を出たあとにもぞもぞと動き出すひとつの影があった。言うまでもなくそれは、寝たふりをして全てを見聞きしていた、馴である。

（あ、危なかった……あれ以上、スウちゃんのえっちなところ見てたら、我慢しきらんかったっちゃ……）

布団のなかで馴は、鼻息を荒げながら身体を硬くするが、それ以上に硬く怒張したちんぽは、かれの意志などお構いなしに暴れ回ろうとのたうっている。……本当に、もう少しでパジャマどころか布団までべちゃべちゃのずぶ濡れにしてしまうところだっただろう。

大好きな相手が帰ってくるまでに、なんとか気持ちを鎮めて眠り直したいところだったが、目を閉じればついさっきの痴態が何度も何度もエンドレス再生されてしまい、余計に興奮するばかり。

それどころか、気を抜けば馴の脳内では馬と化した騶と自分が一心不乱にまぐわい合っている様子まで浮かんでくる始末で、もう竿の先端はぬるぬるした汁塗（まみ）れになっていた。

（これ……一回抜かんと絶対収（おさま）らんやつや……でっ、でも、どげんしよう、もうスウちゃんも帰って来ちゃう……）

馴が布団の中でただ悶々（もんもん）としているうちに、案の定部屋の戸が静かに開くと、すっきりした顔の駒が帰って来てしまった。

そのまま自分の布団に潜り込んだ駒は、すぐに穏やかな寝息を立て始めたが、馴の方は気が気ではなく、息を殺して下腹部の熱を耐え忍ぶしかなかった。

（も、もういけん……こうなったら、スウちゃんみたいに……）

馴はもぞもぞと体勢を変えると、もはや抑えきれないほど巨大化した自分の男根に向かって口を大きく開く。

——直後、決壊した白濁の洪水が馴の喉を打ち、かれは思わず小さく呻（うめ）いてしまう。精液を口に入れたのなんて、これが初めてだった。

（うえ、苦……そっか、こげえ味なんや……）

幸い、布団やパジャマをダメにする事態は避けられたが、口の中はべとつくしイガイガするし、変な味がいつまでも口の中に残って気持ち悪い。でも——

（でもいつか、スウちゃんのも……）

それ以上考えると、また興奮して寝るどころではなくなりそうだったので、馴は顔に掛かるタテガミをぎゅっと掴んで意識を散らし、なんとか眠りに就くことに成功したのだった。

……夜中にもっとえっちな夢を見てしまったせいで、結局はべたべたになってしまったが。

＊＊＊

翌日、すなわち十二月三十一日、大晦日の朝。

雪は日の出前に止んで、青空が戻って来たが、春間家の庭にはふんわりと雪が積もっていた。

朝ご飯を食べた後の騶と馴は、まだ残っている宿題のことなどお構いなしに雪原を駆けたり、雪玉を作ってぶつけあったりしていたが、家族に呼ばれて玄関に集まっていた。

「やっぱ馬のカラダ、すげーな！　おれ、元々走るのとか苦手だったのに、今ならいくらでもダッシュできちゃいそう！」

騶は小声で、それでも嬉しさを隠しきれないように馴に話しかける。

「……あ、でも、あんまり走り過ぎると、ちんぽがぶらぶらするし、パンツと擦れてでっかくなっちゃうんだよなー」

「や、やめえっ、スウちゃん！　みんなに聞かるるよ……！」

いつも通り馴が赤面してそう言ってくるのを聞きながら、騶は悪戯っぽくにししと笑う。

「そういや、馴のじいちゃん家に行くのは初めてだなー。どんなひとだったかあんまり覚えてないや」

「騂じいちゃんは、……うーん、優しいけど、その……ちょっと変わっちょるちゅうか……」

と、言い辛そうに馴が口篭もったところで、おとなたちから車に乗るよう言われ、ふたりは春間家の車に乗り込んだ。

ややもしないうちに車は同じ村の中にある、こぢんまりした家に到着する。

玄関前はちょっとした庭のようになっていたが、植物はどれもあまり手入れされておらず、枯れかけているものも、藪のようになっているものもあった。

「おーい、親父。おるかえ」
勝手知ったる様子で戸を開き、上がり込む駸に続いて、騶たちもきょろきょろと周りを見ながら奥へ進む。家の中も生活感に溢れているというか、雑多でモノが多く、ごちゃついている。
そして居間の扉を開けると、そこにぼんやりと座っていた馬の老爺が顔を上げた。
「なんね、駸。来るんじゃったらもっと早う言うて来え！　今日はみんなしち来たんか。おお、駿！　男前になったなあ」
その毛並みは艶を失い、毛質は細くなって色も薄くなってはいたが、かつては見事な漆黒の毛皮だったのだろう。
春間家の後ろから大柄な虎たちが姿を現すと、老馬の表情は更に明るくなる。
「譲も来たか！　盛しゅうしよんか？　そけぉるんは息子か、ほん大きゅうなっち……ん？　あんたがた、もう一人息子おらんかったか？」
その言葉に、騶はぞくりと背筋を震わせ、思わず父の方を見てしまったが、譲は当惑したように眉を顰めるだけだった。
「え？　いや、うちには籟だけだが……」
「あー、ども……ご無沙汰してます、騂さん」
籟が大きな身体を縮めて挨拶をすると、騂は目を細めて嬉しそうにし、あれこれと茶菓子を勧めようとしていたが、それでもどこか違和感を拭えずにいたのか、低く唸って問いを続ける。
「む……ほいじゃ、馴の隣におるんは――」
「ったく、大概にしちょけよ、親父！　騶の顔も分からんか」
駸もそれ以上は口に出さなかったが、その表情は見るからに呆れた様子で「やっぱり爺ちゃん、相当ボケてるな」とでも言いたげだった。
しかし老馬の方は、ようやく何か合点がいったように、ゆっくりと頷くだけだった。
「騶……ほうか、スウ……」

呟くその瞳に、なにかキラリと光るものが見えた気がして、騶は小声で、けれど興奮気味に囁く。
(ひょっとして爺ちゃん、おれのことに気付いたんじゃない!?)
(え、ええー……どうかなあ)

こそこそと囁(ささや)きあう仔馬たちの様子を眺めていた騂は、さっきまでのぼんやりした表情から少しだけ顔を引き締め、騣に向かって言う。
「のぉ、ちょっちあん仔らと、向こうの部屋ぢ話をしち来るが、構わんかえ」
「うん? そりゃ別に良いが……」
「悪いな」
そう言うと、騂は立ち上がって馴と騶を手招きしたので、ふたりは思わず顔を見合わせながらも、どきどきと逸(はや)る気持ちを抑えて老爺に付いていったのだった。

＊＊＊

「さて、馴と……スーシャ、じゃな」
開口一番にそう呼び掛けられ、ふたりは一瞬なんと答えて良いか分からず、絶句した。
「じいちゃん……! お、おれのこと、分かるの!?」
半ば予想していたことではあったが、それでも込み上げてきた想いに枢沙の声はわななく。
「ああ、ずっと前にも似たようなことがあったっちゃ。大方、氏神様のなさったことじゃろ? あん方はそげんことを、ようされちょった」
「そっか、じいちゃんはデカチン様のことも知ってたんだ……」
騂は遥か昔を思い出すような遠い目をしていたが、枢沙の言葉を聞いてすぐに視線をこどもたちに戻す。

「――で、デカチン……？」
「あ、いやその……なんかほら、名前長いから……よく分かんなくて、そう呼ばせてもらったんだ」
　枢沙が正直にそう言うと、じいちゃんはさも愉快そうに身をのけぞらせて笑った。
「ふはっ、ははは！　いや、言い得て妙じゃゃな。あん方の逸物はほん目立つけんのぉ。わしらも昔、散々自慢されたもんじゃが。それにしてもあげえ隠れた所の神社をよう見つけたな」
　それは叱られるというより純粋に不思議がるような響きの問いだったので、子供たちはもじもじしながらも答えようとする。
「うん……最初はね、おれが馴ん家の近所で、なんか怪しいところないかなーって探してたんだ。そしたら、裏山の鳥居を見つけてさ」
「み、見たこともないし不思議やったけん登りよったら、あの神社に迷い込んじゃって……」
「ほうかえ、神様も寂しゅうされちょったはずじゃけん、あんたらを招いたんかも知れんな」
「でも……せっかくデカ――神様が会ってくれたのに、復活のお手伝いしようとしたら、逆にパワーを全部吸っちゃったみたいで……こんなことになっちゃったんだ」
　枢沙が長く伸びた鼻面を伏せ、居心地の悪そうな、とんでもないことをしてしまったというような表情をしているのを見て、駢は安心させるような笑みを浮かべる。
「なあに、ちぃと予想外のことがあっても、あんたらが会いに来ちくりたんは嬉しかったじゃろうし、何も気に病むこたあねえ」
「うん……う、ううっ」
　異常事態の連続で張り詰めていた緊張の糸が緩んだせいか、枢沙の目には急に涙が込み上げてきて、静かに肩を震わせる。駢は何を言うでもなく、ただ優しく枢沙の背中を撫で、かれの気が済むまでしばらくそのままでいた。

やがて落ち着きを取り戻したかれは、ぶるると鼻を鳴らすと、含羞(はにか)んだような笑みを浮かべ、騂に感謝を伝える。それから、思い出したようにこう言った。
「そういや、デカチン様は、お祭りをしてほしいって言ってたんだ。でも、どうしたら良いのか分かんなくて……」
戸惑いをそのまま口にして伝えると、老馬はふむ、と腕を組みつつ、状況は分かったとばかりに頷いてみせる。
「難しゅう考えんでいい。必要なんは気の持ちよう、神に捧(ささ)げ奉(たてまつ)るちゅう真心じゃけん。昔ん祭りのこともちっとなら覚えちょるし、ふたりが手伝(てご)しちくれりゃあ、きっと神様も喜ばれるじゃろ」
それを聞いていた馴は、真剣な面持ちで鼻息を荒げた。
「ぼ、ぼく、スウちゃんと神様のためやったら、なんでもやりきるよ」
孫の熱意を静かに受け止めながら、騂は優しげに目を細めて言う。
「ああ、馴の気持ちも分かっちょる。それに、わしらも神様ん御恩に報いんとな……ちょうど明日は元日じゃ、村んしにも声を掛けち準備ができりゃあ良いが」
「うーん……み、みんなずっと忘れてた神様のお祭りのこと、そんなすぐに思い出しちくるるかな……」
「確かに、すぐさま万事解決とは行くまいが、これから長(なご)う続けていきゃあ、神様んチカラも安定するじゃろうし、やんがち戻るじゃろ」
そこまで言ったところで、年老いた馬の顔は少し悪戯(いたずら)っぽく表情を変えた。
「そいはそうと、今ん状況をどうするかじゃ。恐らく今は神力が流れを止め、淀(よど)んぢおるんじゃろう。それを整えれば、騶……いや、枢沙も元ん姿に戻せるかも知れん」

「えっ、ほんとに⁉　うぉー、よかった……！　じーちゃん、どうしたら良いか教えて‼」

　目を輝かせて食いつく枢沙の隣で、馴も驚いたように口をぽかんと開けている。

　そして騂は孫たちに向かって頷くと、いかにも重要そうなことを伝えるように声を少しだけ落とし、真剣な面持ちで言葉を続けた。

「必要なんは、巫覡(かんなぎ)のチカラを持つもん同士が神前で互いの想いと気を詳(つまび)らかに通じ合わすること。確か〝孳生(つるみ)の儀〟と言うたか……まあ、平たく言やあ、交尾じゃな」

　ぎこちない静寂(せいじゃく)を、唾(つば)を飲み込む音が破る。

「――え？」

「……こ、交尾？　って、あの、ぼくと、スウちゃん、が……？」

「そうちゃ。神様に見ちもらうかたでに、心も体も繋げて高める、大事な儀式じゃよ」

　老馬の言葉はどこまでも真剣で、ふざけたり揶揄(からか)ったりという様子は皆無だったので、余計になんと言えば良いか分からず、ふたりの男児は口を開けたまま固まってしまう。

「あん方が喜ぶこととっちゅうたら、想像できるじゃろ？　あっこん神社にゃ、儀式用の場所もあるらしゅうてな、わしん親父と叔父貴(おじき)も使っちょったごたるで」

　枢沙と馴はしばらく顔を見合わせていたが、やがて枢沙はぷっと噴き出して笑い、対する馴はいつものごとく顔を真っ赤にしてタテガミを弄りだしたのだった。

＊　＊　＊

　じいちゃんとの話を終えたふたりは、一旦は家族と一緒に家まで戻って来たが、遊んでくると言うが早いが、すぐに玄関を飛び出した。

昨日初めて通ったときは険しく感じた山道も、その先に神社があることを既に知っているためなのか、思っていたよりもすんなりと登ることができ、ほどなくかれらは寂れた境内に戻ってきた。

「えーっと……じいちゃんが言ってたの、正直あんまりよく分かってないけど、要するに馴とえっちするところをデカチン様に見てもらえば良いのかな?」

駒のストレートな物言いに、馴はいつも通り狼狽えつつも、期待と力を篭めて頷く。

「こ、これがヒミツの場所へのカギかも知れんっち言われたけど……どこで使うんやろ」

馴がそのぽっちゃりとした手で大事そうに握っているのは、騂じいちゃんから渡された一枚のお札のようなもの。……ひいじいちゃん達が遺したものらしいが、使い道も分からず、神棚にずっと置かれっぱなしだったのだという。

「まあとりあえず、デカチン様の像があるとこ行ってみよーぜ!」

枢沙は楽天的に笑いながら、馴の肩をぽんと叩き、本殿に向かって駆け出す。その白い後ろ姿を追うように、馴も慌てて足を速めるのだった。

白と黒の仔馬たちが本殿の入口をくぐると、昨日と同様の神像がそこに鎮座していた。だがその佇まいは、どこか昨日よりも古びて、崩れかかっているようにも見え、ふたりは息を呑む。

「デカチン様……大丈夫かな、おれたちの声、聞こえてるかな?」

心配そうな枢沙の声に応えるように、頭の中で微かな声が聞こえてきた。

――おお……戻って来たか、吾が愛し仔らよ。む……? その手に携えたる札は……なんと。なんと懐かしい、見違えるはずもない! 駫と馮に吾の神域を貸し与えし時のもの!

デカチン様の声はやはり元気なく掠れ気味だったが、馴が手にしていた謎のお札を見たことで、少しだけ勢いが戻る。

——そこにはまだ吾が神力が宿っておるな。馴よ、枢沙とともにそれを掲げ、念じるのだ！　汝らの巫覡たる素質と、枢沙の身に宿りし吾がチカラがあれば、此方への道も開かれよう。

「念じるっち、こ、こげ……？」

馴は恐る恐る、手に持ったお札を頭上に翳す。もう片方の手は所在なげに揺れていたが、それに気付いた枢沙がすっと手を伸ばしてきたので、馴は嬉しげにその手を握り返す。

するとーー辺りがまるで音を置き去りにしたかのように急激に静まり返り、続いて視覚も、触覚も、嗅覚も、五感のほとんどが朧気に薄れはじめた。……ただ隣にお互いがいることだけは、心のどこかで感じ続けることができた。

そして、茫洋としていた視界に再び意味ある像が浮かぶようになってくると、ふたりは今、異空間としか言いようのない場所に立っていることに気付いた。

——よくぞ参った。ここなるは吾が磐境にして寝廟、嘗ては誓の神牀と呼ばれたこともあったな。眦と凴もここへ通っては孳生の儀を吾に捧げたものよ。

空間全体に響くようなデカチン様の声を聞きながら辺りをきょろきょろと眺めていた枢沙と馴は、段々とはっきりしてきたその場の様子を見て、つい言葉を漏らす。

「……いや、これ、でっかいベッドじゃん！」

「しかも……なんか、道具みたいなんも、い、いっぱい置いちょる……」

仰々しい名前とは裏腹の光景に、ふたりの男児は呆れを通り越して笑い出してしまった。

　とはいえ、神前で儀式をやるなら、都合が良いに越したことはない。枢沙が馴の方を見て、準備は良いかと目配せをすれば、馴も決心したように何度も頷く。
(じいちゃんは、儀式の前にノ、リ、ト、？　……を唱えなきゃいけないって言ってたけど、難しくてよく分かんなかったんだよな)
　そう内心で考えていたかれは、教わったはずの内容を思い出せずに少しばかり焦っていたが、とにかく神様に気持ちが伝われば良いだろうと気持ちを切り替え、きっと前を向いて胸を張り、堂々と宣言することにした。
「じゃあ……えっと、デカチン様！　これからおれたち、交尾します!!」
　手を繋いだままの馴はほんの一瞬、ぎょっとした表情を浮かべそうになったが、かれもまた枢沙に倣って精一杯背筋を伸ばした。

　そして――ふたりは、どちらからともなく体を寄せ合うと、馬の長い口吻どうしで口付けを交わした。
　しばらくは互いに無言のまま、ぴちゃぴちゃという水音と、くぐもった呻きのような声だけが響く。
(うわ……馴の舌、めっちゃ絡み付いてくる！　こんなにぐいぐい来る馴、初めて見た、かも)
　想像していたよりも積極的な相手の攻勢に、枢沙は意表を突かれて気圧されそうになったが、負けじと馴の肩を抱き寄せる。
(馬になったスウちゃんのカラダ……やっぱり真剣逞しゅうて好きや……もっと、もっと見たい、触りたい、一緒にいたい……!!)
　ふたりの熱が互いをより近くへ引き寄せあい、さらに熱く、激しく劣情を掻き立てあう。息を弾ませたふたりは、次第にその昂りを抑えきれなくなって、互いを隔てる邪魔な布きれに手をかけ、もどかしげに剥ぎ取っていく。

服を取り払った仔馬たちの裸体は、空間全体を包む微かな光に照らされ、艶めかしく互いの瞳に映る。
外界の凍てつく寒さなど無縁とでも言うかのように、この神域のなかは気温も穏やかで心地良い。しかし、奥底から湧き上がる熱にあてられたふたりのカラダは、まだキスをしただけだというのに、既に火照って汗が滲み始めていた。

「馴の黒い毛皮って、こんなにキレイだったんだな……よく見たらちょっと青っぽいところもあるし、手触りもすごく良いよね。ずっと触ってたくなっちゃう」
吐息の合間に枢沙が呟くと、馴もふわふわした口調ながら言い返す。
「スウちゃん、馬になったら白い毛皮になるん、ぼくとペアみたいで嬉しいっちゃ……じゃけどぼくも、スウちゃんとか駿兄みたいに、カッコいいカラダになれたら良いのにな……」
自分のぽっちゃりした肉体を残念そうに見遣る馴に、枢沙は不思議そうな顔で言う。
「そーかな？　馴のカラダ、抱き心地良いからおれ、好きだよ！」
そしてもう一度相手を優しく抱きしめると、我慢しきれなくなったような声で言葉を続けるのだった。

「……なあ、馴。そろそろ、さ……ベッド行っちゃおうぜ」

おとながふたり一緒に寝ても充分余裕がある大きさのベッドは、男児たちには広すぎるくらいだったが、今のふたりはそんなことを気にする余地などないほどに、お互いのカラダに夢中だった。
「今更やけど、スウちゃん、交尾の仕方知ってるん……？」
「え!?　ま、まあ、ちょっとは？」

枢沙にとっては夏の間に仔竜たちと散々経験したことではあるが、いざ聞かれるとしどろもどろになってしまう。
しかし馴は、どこかほっとしたような顔で、笑みを浮かべるのだった。
「そっか。……良かった。実はぼくも、いろいろ試したんよ。スウちゃんと一緒に……その、気持ち良くなれたら、嬉しいな、って……」
ずっと胸の内に秘めていた想いを明かすように、馴はぽつぽつと呟きながら、体勢を変えてベッドに四つん這いになる。
「お尻の穴……触ってたら、気持ち良くなるんに気付いちゃって、それから……スウちゃんが隣にいてくれたらって、ずっと思いよった」
ふさふさの尻尾を持ち上げ、尻の穴を自分の指でぐいっと拡げて、馴の上気した言葉は続く。
「ね？　ちゃんとスウちゃん用に、キレイにして準備できちょるから……ぼくのココ、使って欲しいっちゃ」

汗にしっとりと濡れ、ひくひくと蠢く仔馬の尻穴を目の前にして、枢沙の――騶の馬ちんがめきめきと嵩を増していく。太く、熱く、節くれ立った肉の塊は、少年の思考をぐちゃぐちゃに溶かして、全てを性欲で塗り潰してしまった。
「ぶ、ぶるる、ひひんっ」
騶の口からは無意識に嘶きが漏れ、怒張した男根が収るべき場所を求めて涎を垂らす。
ベッドの脇には潤滑油や様々なグッズなども用意されていたが、そんなものなど目にも入らないほどの興奮とともに、かれは馴の腰を掴み、震える逸物の先端を目当ての入口に宛がった。

「馴ッ……！　い、挿れるよッ……!!」
「はやく、はやくっ……スウちゃん……ッ!!」

貪欲に口を拡げた馴の尻穴が、じゅぶじゅぶと巨大な肉棒を呑み込んでいく。騶も、それに合わせて必死で腰を振り始める。

「んあっ、や、やばっ……ッ！　馴の穴、すごく吸い付いてくる!!」
「ひぎぃ……で、でかすぎ……でも、まだまだイける……ッ」

　枢沙が腰を打ち付ける度、馴の雄穴はまるで意志を持つかのようにかれの馬ちんを咥え込み、果てしない快感の波でふたりの脳を揺らして、交尾の歓び以外の全てを押し流そうとする。
　せめてそれに抵抗しようと、枢沙は少し奥へ手を伸ばし、馴の股間でガチガチになっていた巨根をむんずと握る。

「あひっ、す、スウちゃん……!?」
「へ、へへへっ、せっかくだから馴の馬ちんも、いっぱい気持ち良くなって貰わなきゃ！」
　ふたりの動きは更に激しくなり、互いの欲と熱が絡み合って渾然一体となりつつあった。
　そしていつの間にか、その空間を満たすように、かれらを中心として黄金の光が溢れ始める。馬神の血を受け継ぐふたりの交わりは、世界の淀みを正し、生命を循環させる神の権能の如く、今まさに結実しようとしていた。

「も、もうダメ、出ちゃう……ッ!!」
「いいよッ、馴、おれと一緒にイこう……あっ、あぁ〜〜〜ッ、んん……ッ!!」
「スウ、ちゃんっ、〜〜〜……ッ!!!」

　ふたりの声にならない叫びは、白濁した奔流として同時に解き放たれる。……そして、大量に放出された精は、少しの間ふたりの周囲に散らばっていたが、やがて光の粒子へと分解され、空中に溶け消えてしまった。

　――おお……感じるぞ、生命の猛りを、恵みの力を！　吾が身にも沁み渡って来るぞ!!

どうやら、不思議な輝きと共に消えた精液は、直接デカチン様のエネルギーへと還元されているようだ。

薄れかかっていたその声と姿は、仔馬たちが絶頂し精を放つごとに存在感を増し、より強く、より鮮明になっていった。

「はあっ、はあっ……成功したの、かな？」

まだ繋がったままのふたりに応えるように、頭の中で神霊の声が嬉しそうに谺する。

――うむ、此度の儀、誠に見事であった！　今まで吾に捧げられた神楽のうちでも、格別であったとも！

弱り切った子供のようだった体格も、次第に筋肉が膨らみ、タテガミも豊かに伸びて、なにより股間の巨砲が、神の名に恥じぬ偉容を取り戻しつつあった。

――そうさな、当面はこれで安泰じゃが……汝らの働きにも、充分報いねばならぬからな。さあ、祝の宴を続けようぞ‼

デカチン様の言葉とともに、空間に満ちていたエネルギーの一部が枢沙と馴の身体にも流れ込み、劇的な反応を引き起こした。

「えっ……なにこれ、カラダ、がッ……‼」

「スウ、ちゃ、ぼくも……ひっ、ひひひん‼」

射精後の余韻に浸っていたふたりの馬体は、急激に高まった性欲とともに大きくゴツく膨らんでいき、筋組織が発達と肥大を繰り返して、異形とも言えるほどに巨大化していく。

「キンニク、がぁっ……止まらないぃっ‼」

「〰〰っ、あ、ああっ、ちんぽにも、来ちゃう……んんあっ、ぞおをっ‼?」

元来かなりの巨根だったふたりの馬ちんも、身体の変化と釣り合いを取るためか、それ以上にエネルギーとの親和性が高かったのか、驚異的な勢いで体積を増し、巨大化した両手でも抱えきれないほどの非現実的な代物に成り果てた。

「馴っ、馴……ッ！　ごめん、おれのちんぽ、全ッ然、止まんない〰〰ッ!!」
「あがっ、あ、あああ、〰〰……」

馴の尻穴に挿入したまま常軌を逸した巨大化を遂げたために、枢沙の男根は所狭しとその腸内を掻き回し、突き上げ、蹂躙する。それなのに馴はそれを苦しいとも思えず、むしろ全てが快楽に変換されて、その脳内は全ての意味ある言葉を失い、ただ原始的で果てのない悦びだけで埋め尽くされる。
　そしてふたりは、もう何度目かも分からないほど、射精の洪水を繰り返し引き起こした。

運動会の大玉よりも丸々と膨らんだ精嚢は、いつまでも無尽蔵に精液を作り続け、送り出し、それが煙突のように巨大なちんぽを通り抜ける間にも、すぐになみなみと次弾を満たす。
　それを支える筋肉の鎧はわずかな痛みや怠ささえも感じさせることなく、激しさを増す交尾をひたすらに気持ち良いだけのものとして続けさせてくれる。
　そして、絶えず放たれる白い濁流も、飛び散る汗やその他の体液も、デカチン様がすべてを吸い上げてくれるので、ふたりはただ自分たちの快楽だけを意識していれば良いのだった。

「出るッ、まだ出る……ッ!!　デカすぎる筋肉と馬のちんぽで交尾するの、さいこー……!!!」
「ぼ、ぼくもッ、スウちゃんと一緒に、こんなにデカくなっちゃって、気持ち良くなれて……ああッ、デカチン様、嬉しい……ッ!!」

＊＊＊

「はぁ……はぁっ……あ〜〜、すげー、気持ち良かった……」
　ようやく交尾が一段落し、ふたりが満足げに息を吐いたころ。その身体とちんぽはまだ少し変化の名残を宿していたが、次第に元の大きさに戻りつつあった。
「善き哉、善き哉！　汝らの献身、しかと受け取ったぞ。淀みに捕らわれておった吾が神力も、全て元通りじゃ！」
　嬉しそうに弾む声とともに、神霊の姿が再び実体化してふたりの目の前に現れる。しかし、その背丈は先ほど見えていた巨体よりも遥かに小さかったので、枢沙は不思議そうに首を傾げて問い掛けた。
「あれ、デカチン様、また小さくなってる？」
「うむ、如何な孳生の儀とても、吾が身を常永久に保つ程の余力はない故な。それにまあ、近頃は愛らしい姿の方がウケが良いんじゃろ？　これも一種の〝いめえじ戦略〟じゃよ！」
「は、ははは……」
　呵々大笑する神に釣られて、枢沙と馴も少し引き気味に笑う。まあ、本神が良いと言うなら、それで良いのだろう。
　すると、デカチン様はふと思い出したように枢沙に向かって言った。
「それにしても汝の身に宿りし力、何だったかと考えておったが……そうか、別津世の巨竜！　恐らくそれが吾が神力を引き寄せたのじゃろう。だがまさか、斯様なことが起ころうとは！」
「竜？　あー、アルバたちの……」
　なんだかよく分からないが、仔竜たちとの冒険は秋穂のカラダに少なからぬ影響を与えていたらしい。今後はちょっとだけ気をつけよう、とかれは思うのだった。

「情けない限りじゃが、汝の身に起きた椿事も、この地に斯くまで雪が積もるのも、吾が神徳の至らぬせいであろう。……吾は、汝らを護らねばならぬと言うに」

　そう言って項垂れる小さな姿を見た少年たちは、ぶんぶんと首を振る。

「言ったでしょ、おれたちがちゃんとデカチン様のお祭りを復活させるよ！　騂じいちゃんなら昔のことも覚えてるはずだし！」

「む、村のみんなもきっと、デカチン様のこと思い出して、一緒にお祭りができるようになるっちゃ。これからも、ずっと……！」

　ふたりが口々にそう言うのを聞いて、神霊の化身は嬉しそうに微笑む。

「ああ、実に頼もしきかな！　吾もその実現に力を注ごうぞ。では仔らよ、またな！」

　そう言い終えると、その姿は黄金の粒子と化して虚空へ溶けていき、あとにはふたりの仔馬だけが残された。

「……あれ、デカチン様は消えちゃったけど、おれのカラダ……馬のままじゃん」

　枢沙は不思議そうに首を傾げるが、それ以上考えても答えは見つかりそうになかったので、まあ良いかと頷く。

「もし、このままずっと馬のままでも……馴はおれのこと、ちゃんと覚えてくれるもんな」

「……！」

　タテガミに隠れた馴の目が、驚きに揺れる。

「なんかさ、さっきデカチン様が竜のチカラがどうとか言ってたでしょ？　おれさ、こういう気持ち良いコトも今まで全然知らなかったけど、アルバたちに教えてもらったんだよね」

　馴が何も言えずにいると、枢沙は恥ずかしそうに頬を掻きつつ、言葉を続けた。

「んで、今回は馴と久しぶりに会ったら、またこんなヤバいくらい気持ち良いコトができてさ。今度は逆にアルバたちにも教えてあげたいなって思ったんだ」

「す、スウ……ちゃん」
「えーと、つまり、友達ってさいこー！　ってことで……馴の知らないこともさ、また一緒に色々やったり、したくて……」
　思っていることをできるだけ言葉にしようと、枢沙はまだ悪戦苦闘していたが、それを聞いていた馴のなかには、何故だか分からないが一つ、不思議な直感が芽生え始めていた。
（……そっか、スウちゃんのこと引き留めて、馬のままにしてたんは……ぼく、じゃった）
　そう自覚した刹那、空間に漂っていた神力の余韻が、枢沙と馴の間に引き寄せられるかのように渦を巻き、再び集まり始める。
「！　……こ、これ――」
　驚き顔のまま金色の渦に包まれたかれの姿は、足先から徐々に変化していき――程なくして、元通りの虎の少年へと戻ったのだった。

「馴っ！　すごいよ、おれ、虎に戻った！」
「う、うん、良かったっちゃ……！」
　馴の内心に渦巻く様々な想いを知ってか知らずか、枢沙はただ無邪気に、自分の身に起きた奇跡を喜んでいる。
「これもきっと、馴がおれと一緒にいてくれたからだよ!!　これからも、どんどん良いことが起きる気がする……！」
　その眩しいばかりの笑顔を見て、馴はほんの一瞬だけ少し寂しそうな顔を見せかけ、けれどすぐにほっとした様子になって、枢沙をぎゅっと抱きしめた。
「……スウちゃんが喜んでたら、ぼくも嬉しくなるっちゃ」
　言いたいことも、言えないことも、まだまだたくさんあるけれど、馴の口から出たその言葉も、嘘偽りのない気持ちには違いなかった。

「ふぁ、……安心したら、なんだか眠くなってきちゃったな」
そう言ったそばから枢沙の瞼はとろんと重くなっていき、馴の方を向いて柔らかく微笑んだ。
「馴も、もし良かったらさ。もうちょっとここで、一緒に寝てようよ」
「う、うん……ふへへ。ありがと、スウちゃん。……おやすみ」
広いベッドの上で向き合うふたりは、身体を寄せ合い、静かに目を閉じると、やがてどちらからともなく安らかな寝息を立て始めた。

――どれくらいの時間が経ったのだろうか、馴は自然に意識を取り戻すと、まだ幾分寝ぼけたままの眼を動かす。
見飽きるほどに見慣れた通りの、自分の部屋。……もちろん、置いてある机は一つだけ。
そして隣には、大好きな虎の少年。布団の中で、抱き合ったまま寝ていたようだ。

「これで全部、元通り……かな」
未だに無防備な顔で涎を垂らしている枢沙の顔を見ながら、馴は静かに呟く。
窓の外はまだ少し雪が残っていたようだが、雲間から午後の日差しが差し込んで、柔らかく暖かな光に包まれていた。
雪解けも、そう遠くはないだろう。

エピローグ

その後は、去年までと特に変わらない、のんびりとした大晦日の時間が過ぎていった。
ふたりの家族は、枢沙が馬の姿になっていたことなど全く記憶もしておらず、当然のように譲とリカの息子で、籟の弟として認識している。
そのまま、何事もなかったかのように年越しそばを食べ、テレビで流れる歌番組を眺めて、どこかから微かに響く除夜の鐘を聞きながら、ふたりは再び布団に入る。
もちろん、目が覚めても状況は変わっていなかった。明けましておめでとうと挨拶をしあい、お雑煮とおせち料理を振る舞われる。これ以上ないくらい典型的でいつも通りの、元日の朝だ。
（まさか、だけど……今までのことが全部、ぜーんぶ夢だったなんてこと……ない、よね？）
秋穂はなんとも言えないもどかしさのようなものを感じながら、無意識にお雑煮を啜る。
……汁椀のなかには、今までのかれなら絶対に見逃さずに除けていただろうニンジンも入っていたのだが、頭の中が考え事でいっぱいで、気付かずに口へ運んで咀嚼する。
（でも、馴はおれが馬になってたときのことも覚えてたし、スマホを見たらアルバたちにメッセージを送った履歴は残ってたし……だったらやっぱり、夢じゃなかったんだよな）
黙々と考えていても、かれの頭では答えなど出てきそうにもない。それよりもお雑煮が妙に美味しくて、秋穂の思考はそちらへ引っ張られていった。
そんな風に朝の時間が過ぎて、皆が思い思いに過ごしていたとき、玄関から誰かが呼び掛ける声が聞こえてきた。

「あれ、親父!?　どげえした、急に……」
「急にもなんも、正月じゃけえお年玉をあげに来たんじゃろうが」
　玄関に出た駸(シン)がつい言葉を失ってしまうほど、現れた騂(セイ)の様子は昨日までとは大違いで、目には明らかな生気が宿り、足腰もしっかりとして、矍鑠(かくしゃく)という言葉そのもののようだった。
「いや、けど、車もねえのに」
「歩いてきたけんな」
　愕然(がくぜん)とする息子を尻目に部屋へと入ってきたかれは、その言葉通り両家の子供たちにお年玉を渡し始めたが、馴と枢沙のところへ来たときには、悪戯(いたずら)っぽく目配せをしてみせた。
「そいより、駸。お宮さんに行くんは何時じゃったかえ」
「もうすぐやけん、親父を呼びに行こう思いよったんじゃ」
　老馬の問いかけに、馴の父はまるでずっと前から決まっていたことのように答える。
　事態が飲み込めず、困惑していた馴と枢沙に、騂はこっそりと耳打ちする。
「昨夜(よんべ)、氏神様かりお告げがあってな。村んし総出でお祭りの準備ができるようにした、っち仰せられたんじゃ」
「みんなで……」「……お祭り！」
　その意味を理解したふたりは、手を取り合って密かに小躍りした。
「おー、ほいじゃ出かけるけん、準備しろ」
　そして、少し離れたところから、何も事情を知らない父たちがのんびりと声を掛けてきたのだった。

「わ、すごいっちゃ……」
　いざ裏山の、古びた鳥居があった場所へ来てみると、馴が思わずそう呟いた。
　この秀方(ひでかた)のどこにこれだけの住民がいたのかというくらい村のみんなが集まって、予想以上の賑(にぎ)わいを見せていたのだ。

昨日まで草木に埋もれかけ、誰にも見向きもされそうになかった鳥居は、塗料も新しく塗り直されて、泰然と佇んでいる。周りの道も掃き清められており、もはや見落とされることもなくなっただろう。
　神社へ続く参道にも、村民たちの行き来する姿があった。おとなも子供も、みな談笑しながら神社の修復や祭りに必要な道具を運んでいるらしい。
　そして――山上の境内は、当然ながらふたりの記憶にあった姿からは大きく様変わりして、荘厳な姿を取り戻していた。
　どうやらまだ修繕は終わっていないらしく、ところどころ古びたり壊れたりしたままの建物は見受けられたが、それでも主な社は磨き上げられて屋根も新しく葺かれ、石灯篭は立て直され、狛犬代わりの牡馬の像は、以前よりも更に立派に、誇らしげに逸物を屹立させている。
「すごいすごい！　これもデカチン様が復活したからなのかな」
　秋穂と馴ははしゃぎながら境内を眺めて回る。あちらこちらで修復や清掃の作業が進み、子供たちも何かの飾りを手伝っているようだった。
「ほら、お前らも遊んでねえで手伝しろよ」
　そして馴に言われるまま、ふたりは社殿の拭き掃除やゴミ集めなどの手伝いをすることになったのだった。
「うへ〰〰……チカラが戻ったのはおれたちのお手柄なのに、こんなこともやるなんて……」
「ま、まあ、やれることとやるっち言うたんは、ぼくたちの方じゃけん、ね？」
　秋穂はぶーぶーと文句を言ってはいたものの、手伝い自体は馴とともに、一生懸命取り組んだのであった。
　お昼ご飯がてらの休憩時には、駻じいちゃんが昔の様子を教えてくれたりもした。

「ああ、昔はな、そりゃあ賑わっちょったで。五穀豊穣、家内安全、子孫繁栄と、神様の御利益も灼かじゃったし……まあ、たまに突拍子もねえ悪戯をなさったりもしたが」
　と、騂の話はかつてデカチン様の発案のもと村内で開催されたちんぽ比べ大会の顛末にまで及び、枢沙は大いに盛り上がりながら、馴も恥ずかしげに顔を伏せつつ、耳だけはいつになくぴくぴくと動き、少しも聞き漏らすまいとする。
　おとなたちも胡乱な話を咎めるかと思いきや、そんな様子もない。よくある笑い話のように苦笑しつつ、頷いて聞き入っているだけだった。

　やがて、ある程度片付けと祭りの準備も済んだころ、おとなたちが篝火を点し、様々な供物を持って拝殿の前に集まり始めた。
　ゆらゆらと優しく漂う煙と、穏やかな晴天の下、豊穣を願う祝詞の声が響き、古い舞の歌が奏でられる。
「馴、馴！　あのお供え物見た⁉　なんか、木彫りのちんぽみたいなのあったよな‼」
「う、うん……よう見ちょるね、スウちゃん」
　そんな感じでふたりが喋っていると、境内を包み込むように黄金の光が広がるのが見えた。
「これ、デカチン様の……！」
　光の出所は、案の定本殿からだったが、その扉はしっかりと鎖されて開く様子もない。
　どうしようかとふたりが立ち尽くしていると、背後から声を掛けてくる者がいた。
「おお、仔らよ！　汝らが来るのを待っておったぞ。どうじゃ？　見違えたであろう！」
「⁉　で、デカチ――」

　驚きのあまりつい大声を漏らしそうになって、秋穂は慌てて口を押さえる。しかし、目の前にいる神霊の姿も、周りに漂う黄金の光も、他のひとたちには全く見えていないようだったので、かれはひとまず息を吐く。

「び、びっくりした……神様が、こんなところにいても良いの？」
「くははは、知らぬのか。神とは遍在するもの故な。汝の前に居ながらにして、拝殿の仔らが捧げる声も、聞こえておるとも！」
　ふふんと胸を反らす姿は、すっかりお馴染みになった子供姿のまま。どうやら当分は本当にこの路線でいくらしい。
「爾後も吾が祭りを続け、仔らのまた裔にまで弥年に伝わらば、吾も常敷く永らえるじゃろう。いずれは男茎比べを復活させるのも良いな！
……ともあれ、汝らには感謝してもし足りぬ」
　見るからに上機嫌な様子の神霊に対して、秋穂はどこか釈然としない表情だ。
「でもさ……おれが馬になったときにみんなの記憶が変わったのも、お祭りの準備がこれだけ進んだのも、デカチン様のチカラなんでしょ？　それがあれば、おれたちの手伝いなんて、必要なかったんじゃないの？」
　そう、さっきからずっと気になっていた質問をぶつけてみたが、神霊は厳かに首を振る。
「否、それは違うのだ、枢沙よ。吾が神力は、確かに仔らの意識や付随する事象のいくつかを少しばかりずらす権能を有しておる。じゃがな、仮令それで吾を崇めさせたとしても、汝ら自身の意志なくば、遠からず烏有に帰するは必定。吾はただ忘れ去られ、消えゆくのみだった」
　しんみりとそう告げる小さな神の化身に、馴は顔に掛かるタテガミを不安げに弄りながらも口を開く。
「じゃ、じゃあ……ぼくらがやっちょったことも、意味があったんかな……？」
「無論だとも！　巫覡たる汝らが捧げてくれた赤誠と、あの熱き交合!!　あれらが因果の流れを変え、忘却の淵より吾を真に復活せしめたのじゃから！」
　思った以上の熱弁に、馴は思わず一歩引いてしまったが、その顔は嬉しそうに綻んでいた。

そんなふたりの様子をみていた神霊は、わざとらしく咳払いをすると、もう一度取り澄ましたような、厳かな顔に戻って言葉を続けた。
「さて、かくも功勲しき汝らには相応の褒美を取らせねば。――枢沙よ、汝は別津世の竜らと、えねるぎぃとやらを探しておるらしいな。吾が神力がそれに類するものかは分からぬが、必要とあらば念ずるが良い。いつでも力を貸そう」
そう言うと、かれは秋穂の頭に右手を翳す。柔らかな金色の光が集まり、全身をすっぽりと覆う……が、それは次第に薄まり、秋穂の体にゆるゆると吸収されていった。
「これで良し。どうじゃ、何か感じるか？」
秋穂は自分の身体を触ってみたり、暫し目を閉じてみたりしながら、頷いて答える。
「んー……よく分かんないけど、デカチン様と繋がってる気がする……それに、このびびっと来る感じ、アルバたちの探してたエネルギーと近いかも！」
うまく言葉にはできなかったが、身体のどこか奥の方に、デカチン様のチカラが渦を巻いているような感覚がしていた。……というより、なんだか股間がむずむずする。ひょっとしたら普段のちんぽもちょっと大きくなったのかもしれない。
秋穂がそんな風に鼻の下を伸ばしている隣で、駲もまた神霊からの祝福を受けていた。
「駲よ、汝には吾が巫覡として並びなき資質があるようじゃ。……汝が胸裡に溢れる想いは、吾が心にもしかと届いておる。汝が望みは吾が望みも同じ、その成就に必要とあらば――」
言われかけた言葉に、駲は小さく、けれどもはっきりと首を横に振って応じる。
「――ううん、大丈夫っちゃ。ぼくも……自分のことは自分で、なんとかしたいに」
そう言った馬の仔の選択を、神の化身は愛おしむような表情で受け容れ、そのふくよかな身体を優しくかき抱く。

「……うむ！　善くぞ申した、馴よ。吾は汝を誇らしく思うぞ。だがせめてこれだけは、受け取るがよい」

　そして、枢沙と同じく馴にも金色の力を纏わせると、神の化身は満足げに頷き、呵々と笑いながら手を挙げる。

「ではな、仔らよ！　汝らの行く道に幸多く、弥日異に栄えあれ!!」

　ふたりが返事をする間もなく、その姿は忽然と消え、僅かに金色の名残が漂っているばかりだった。

「……行っちゃったね、デカチン様」

「う、うん。でも、ずっと見ちくりちょるって言うちょった」

「相変わらず難しい言葉ばっかで、よく分かんなかったけど……ま、無事にエネルギーっぽいのも見つかったし、バッチリおっけー！」

　今回の体験談も、アルバたちに話せばきっと喜んでくれるに違いない。相変わらず既読は付いていないが、帰るころには仔竜たちも戻って来ているだろう。それに、エノシタたちにもお土産話がたくさんある。……スマホの連絡先も復活していたし、あとは帰って会うだけだ。

「……そっか、明日はもう帰る日、か」

「うん……」

　ふたりは、言葉もなく互いを抱き合い、しばらくの間ただじっとそのままでいた。

＊＊＊

　そして、その日が来た。

　積もっていた雪が、朝日に照らされ溶け始めている。道ばたにはところどころ水溜まりもできて、キラキラと光を反射しているようだ。

朝食も済ませ、あとは荷物を車に載せて帰るだけ。おとなたちの準備が終わるのを待つ間、枢沙と馴は縁側に腰掛けて、外の景色を一緒に眺めながらぼんやりしていた。

（スウちゃんが帰ったら……次に会えるんは、また年末になってから）

馴の脳裏には、さっきからずっとそればかりが浮かんで消えそうにない。

……元々、枢沙のことが好きだった。明るく活発で、自分にはないものをたくさん持っていて、それなのに仲良くしてくれて、物陰にいてもすぐに見つけてくれるから。

その元気な声を聞く度に、馴の胸は熱く滾り、それればかりか股間も大きく膨らみ……

その気持ちに気付いたのはいつだっただろう。

そう言えば、以前枢沙がパンツを脱ぎっぱなしにして、置き忘れて帰ったことがあった。

それを最初に見つけたのが馴だった。ただの偶然、だったと思う。そのままお母さんに伝えていれば、何事もなく忘れていただろう程度の、些細な出来事。

けれどそのとき、馴は何故か、その布きれを嗅いでみたくなったのだった。ただの思い付きだったし、別になにかを期待していたわけでもない。……けれど、ほんのり残った虎の匂いは、やっぱり馬の自分とは全然違って、どこか野性的で力強い……ような気がした。

いま思えば、その頃には多分、もうとっくに枢沙のことが好きになっていたのだと思う。

そして会えない時間を重ねれば重ねるほど、かれの気持ちはより複雑で激しくなっていった。自分の「好き」がただの「好き」ではないことも、いつしか理解していた。……かれの明るい笑顔を思い浮かべつつ布団のなかで自分の肉棒を扱いた回数も、もはや数え切れなかったから。

本当に特別な意味で、「好き」だった。
だからこそ寂しかった。ずっと会えないのはイヤだった。枢沙にもそう思ってほしかった。
自分以外に大事な相手がいるなんて考えるのは、もっともっとイヤだった。

――スウちゃんの全部、ぜんぶ、自分のものになっちゃえば良いのに。

心のどこかでそう願っていたということを、馴はあのとき、確かに自覚した。
それをずっと隠しておくことも、できたかもしれない。けれど馴は、少しだけ息を整えて、心の中で決心を固め、口を開くことにした。

「……ぼくのせい、やったと思う」
「え？」
「スウちゃんが馬になったの。ぼくが、それを願ったから……だから、ぼくのせいやに」

声を振り絞るようなその告白に、秋穂は少しの間なにも答えることができず、目を丸くするばかりだったが、やがて、あっけらかんとした笑みを浮かべて言った。

「そっか、でも、楽しかったよ！　馬になって、馴とかけっこしたり、村のなか探検したり……それに、エネルギーだってばっちり見つかったわけだし！」
「スウ、ちゃん――」
「あとはやっぱ、あのでっけ〜〜〜馬ちんをごしごしするのが……あー、へへへ、とにかく！　全部、馴のおかげじゃん‼」
「――も、もうっ！」

謝るつもりが、結局いつも通りのやりとりになってしまった。多分、こういうところこそ、馴が枢沙のことを好きになった、最たる理由なのだろう。……枢沙に自覚はないようだが。

（でも、たしかにスゥちゃんの言うとおりや。ぼくの弟になってくれたし、一緒に遊べたし、ちゃんと……ぼくの想いにも、答えてくれたし……）

　あの不思議な空間で交わったときの余韻が、今でも不思議と身体の奥に残っている。枢沙の熱い体温。牡馬らしい逞しい腕で腰をがっちり押さえられ、極太の凶器で尻穴を捲り上げられ、無遠慮に押し入られるあの快感。二頭分の嘶きとともに、大量の精液を放出しあい、混じらせあって、全身がどろどろになったまま舌の奥を痺れさせる甘い疼き。

　それを思い出すだけで、まだ何度だってイけてしまいそうだ。股間も堪らず窮屈になる。

　とにかくそれで、秋穂が馴の全てに正面から向き合ってくれていると、心の底から伝わった。

　同時に、秋穂にとっての「好き」が自分一人だけのものではないとも、分かってしまった。

（だから……もう、大丈夫）

　ずっと傍には、いてくれないかも知れない。だけど、離れていてもちゃんと来てくれる。

　秋穂は、きっと馴を見つけてくれる。だから馴は、それを待つことができる。

「……うん、真剣ありがとう、スゥちゃん」

「ん？　えへへ、こっちこそ！」

　もっと、胸の奥に渦巻くあれやこれやを開けっ広げにするつもりだったが、結局は言わなかったこと、言えなかったことだらけだ。でも、それもまた、自分らしいかも知れない。

「スゥ！　父さんたち準備できたってさ」

「あー、今いく！」

　離れた場所から呼び掛けてきた兄に、元気の良い声で答えながら、枢沙は立ち上がった。

「じゃあね馴、ほんとにほんとに楽しかった！　また通話しながら対戦とかしよう！」

「う、うん……！　通話、た、楽しみっちゃ」

そう、今はお別れの時間だけど、またすぐに声を聞くこともできる。聞き苦しい自分の嗄れ声でも、聞きたいと言ってくれるなら、いくらでも喋れるだろう。

車の方へ向かう枢沙を見送る馴の心の中は、自分でも意外なほど静かに、落ち着いていた。

……はずだったのだが。

「あ！　そうだ」

そのとき枢沙が、まるで何か忘れ物をしたかのような軽い調子でもう一度馴のすぐ傍に来ると、少しだけワルい笑みを見せ、耳元で囁いた。

「また年末に遊びに来たときはさ……おれの尻も使ってよ。またいっぱい遊ぼうぜ」

それだけ言うと、秋穂は手をひらひらと振りながら、何食わぬ顔をして車に乗り込む。

馴はしばらくその言葉の意味を呑み込めずに首を傾げていたが、一拍遅れてその含意に気付き、ぼんっと顔を赤らめた。

言い返そうにも、枢沙の乗った車はエンジンを吹かして、ちょうど出発するところだった。車窓に覗くその顔は、いつも通り馴の大好きな明るい笑顔だったので、馴はそれ以上の抵抗を諦め、ただ苦笑する。

（……まあ、スウちゃんがそげえ言うなら……今度は、ちんぽも特訓しちょこうかな）

走り去っていく秋穂家の車にいつまでも手を振りながら、馴は内心でそんな決心を固めたのだった。

＊＊＊

　時はまた少し流れ、秋穂が自宅に帰ってきてから数日後のこと。ぼんやりと眺めていたスマホの画面に、通知のアイコンが灯る。
「お。――アルバたちだ！」
　メッセージの送り主を確認するや、寝転んでいたベッドからがばりと起き上がると、かれは急いで身支度を整えた。
　かれが馬になったときから何度か送っていたメッセージに、ようやく返信があったのだ。すぐに反応できなかったことを詫びる一文のあとには、こんな言葉が続いていた――
「スーシャの話も聞きたいし、うち来るか？」
と。
　家族への説明もそこそこに、上着を羽織って外へ飛び出したまでは良かったのだが、そこで秋穂は思わぬ障害にぶつかってしまう。

「あれ……ここ、どこだ……？」
　後先も考えずにあまり来たことのない場所を突っ走ってきたせいで、見事に迷ってしまったのだ。
　行く道も帰る道も分からなくなってしまい、途方に暮れていたかれは、ちょうどそこにいた見知らぬ相手に声を掛けてみることにした。
「あ、あの……すみません」
「おや、こんにちは。如何なさいましたか？」
　そのひとは、見上げるほどに背が高くて、暗い色のフード付きのコートを着ていた。そしてフードの中から覗く顔も、真っ黒な鳥のもの。
……きっとカラスだろう、と枢沙は思う。
「おれ、迷っちゃって、道を教えて欲しい……です。えっと、カラスのおじ……じゃなくて、お兄さん？」

しどろもどろに問い掛ける秋穂に対し、その人物はフードに覆われた顔を柔和に微笑ませ、低く深い声音で応える。

「ふふっ、どちらでも構いませんよ。私もそれなりの歳月を過ごしておりますからね……さて、どちらへの案内をご所望でしょうか？　不肖のこの身に能う限り、何処なりともお連れいたしましょう」

「え、あー……」

なんだか怪しいひとに声を掛けちゃったな、という後悔がちらりと秋穂の胸中を過ったが、ここで回れ右しても道に迷った現状は変わらないし、他に頼れそうな相手もいないので、かれは半ばやけくそになりながら言葉を続ける。

「この辺で、緋米田ってお家を探してるんです。おれの友達んちなんだけど……」

「……おや、それでしたらまさしく――」

と、フードのカラスが言いかけたところで、背後から秋穂を呼ぶ声が聞こえてきた。

「悪りィ悪りィ、ここいらは初めてだったよな。迷ってんじゃねェかと……お？　なんだ、いつの間にドーマと知り合ったんだ？」

「あ、アルバ！　良かった〜〜!!」

よく見知った紅い仔竜の姿を目にして、秋穂はほっと安堵の息を漏らす。その様子を静かに眺めていたカラスは、いかにも得心がいったとばかりに深く頷いてみせる。

「なるほど、アルバ様のご友人……ということは、以前お話を伺った、スーシャ様でしたか」

それは特段の気取りもない自然な言い方ではあったが、あまりにも馴染みのないその響きに、秋穂は目を瞬かせる。

「さっ……様!?　いやー、そんな……」

「あー、こいつの喋りは気にすンな。なんでもかんでもクソ丁寧にしか言えねェ性分なんだ」

　どこか諦念のようなものが漂う仔竜の言葉を聞きながら、件の人物はフードの下で黄金の瞳を細め、洗練された所作で一礼する。
「申し遅れました。私のことは、どうぞドーマとお呼びください。貴方様のお話は、アルバ様やムルト様からも予て伺っておりましたので、お目通りが叶いまして大慶至極に存じます」
「こ、こちらこそ、よろしく……？」
　秋穂も難しい言葉が分からないなりにお辞儀をしつつ、助け船を求めるようにアルバの方を見ると、仔竜はやれやれと肩を竦めて苦笑した。

「なんつーか、まア、こっちの世界での保護者代わりみてエなモンだな。面倒臭ェ手続きやら何やら、ガキんちょにゃできねエことをやってくれてるのさ。で、例のエネルギーを探せっていうミッションの依頼人もこいつってワケ」
　アルバの言葉に、ドーマと名乗ったカラスは真剣そのものの表情で頷く。
「スーシャ様には、殊に類まれなる素質がおありと承っております。当地におけるエネルギー探索の成果は、まさしくそのご助力あってこそのものだ、と――」
「そーそー、スーシャの才能はそんじょそこらの男児とは違うんだよなア。こちとら大助かりなんだぜ、いや、マジでさ」
「わ、わあ……えーっと、とにかく、アルバのおうちに行こうよ!!」
　耳慣れない讃辞をこれでもかと浴びせられ、背中がこそばゆくなってきた秋穂は、にやにや笑いを浮かべるアルバをせっついて、かれらの住処まで連れて行ってもらったのだった。

＊＊＊

「てなわけで……よオこそ、仔竜のねぐらへ」
　紅い仔竜は芝居がかった口調でそう言うが、それは拍子抜けするほど普通の住宅だった。

周りもなんてことはない住宅街だし、秋穂の家と大きさも構造もそう違いはない。

ただ、近付こうとしたときに、ほんの僅かな違和感が首筋の毛をちりちりとさせた気がした。――それはなんとなく、デカチン様の神社で感じたものと似ているようにも思える。

「ドーマが色々細工はしてくれてるはずだぜ。詳しいことは知らねエけど、認識阻害だとか、人払いだとか、それらしい処置を一通りな」

アルバはそんな風に説明をしてくれたけれど、もちろん秋穂にはちんぷんかんぷんだった。

そして件のドーマというカラスは、まだやるべき用事が残っているからと言って、ふたりに会釈をするとそのままどこかへ消えてしまった。

「わーいアキホくん、久しぶり！　……あれ？　なんかちょっと疲れてる？　ひょっとしてまたアルバに悪戯された？」

「また、ってなンだよ。人聞きの悪りイ」

「あー……ううん、大丈夫。それよりムルトも久しぶり！　向こうの世界はどうだった？」

玄関をくぐると、待ち構えていたかのように黄色の筋肉ボディが飛び出してきたので、秋穂は嬉しそうに抱き付きながらそう訊く。

それに答えるムルトも、いかにも話したくてうずうずしていたと言わんばかりに顔を綻ばせ、身振り手振りも交えて思い出を語り出す。

「うん、すっごく楽しかったよ！　アニキとも、たーっぷりヤりまくれたし……えへへっ」

「溜まってた分、思いっきり発散してたもんな。おかげであっちも大分潤ったと思うぜエ？」

彼らの元いた場所だという、秋穂の知らない世界の話は、今までも少しずつ教えてもらっていたが、今回は更に詳しく聞けそうだったので、かれの好奇心は弾みに弾んで止まらない。

「えー、いいなー!!　それってさ、えっちするのが世界のためになるってこと？」
「そうだよ、それがオイラたち『巨竜』の仕事なんだ！　オイラとアニキがずっぽりヤるだけでも、大地に緑が芽吹いたりしてね……」

ムルトが語る世界の仕組みや、想像を絶する風景の数々、いろんな場所のいろんな食べ物。時折アルバが茶々を入れたり、ムルトが説明に窮（きゅう）した部分の助け船を出したりもしていたので、あまり頭の良くない秋穂でさえ、まるで実際に行ったかのような追体験をすることができた。

「ッと、こっちばっか喋っててもつまらねエな。スーシャも結構大変だったんだろ？」
「オイラも聞きたい！　こっちへ戻って来た途端、メッセージがすごいことになってたからね。あっそうだ、なんかおやつでも食べる？　せっかくうちに来てもらったんだしね！」

ムルトの申し出に秋穂は少し考えていたが、そのときふと頭を過（よぎ）った言葉が、ついそのまま口から漏れてしまった。

「ニンジン……」
「え？」
「あ、いや、なんかさ。無性にニンジンが食べたくて」
「なんだア、それも例の、馬になったたっつー話の後遺症かなんかか？　……野菜庫に余ってンのがあったっけか」
「オイラ、見てくるよ。ついでにちゃちゃっと食べれそうなものも作ってくるね！」

そう言って一旦その場を離れたムルトは、ややもしないうちに数種の皿を持って戻って来た。シンプルな炒め物やスパイスの香るマリネ、それにスティック状に切っただけのものも含め、どれもニンジン尽くしの軽食だ。

「すっげー、ムルトって料理もできるんだ！　こういうのって、アルバの方が得意なのかなって思ってたけど」
「ところがどっこい、こちとらキッチンにゃア出入り禁止なんだよなア」
「……なぜかは全く分かんないんだけど、アルバが料理に関わると、決まって大惨事になるんだよね」
　ムルトの表情が、普段は滅多に見ないような物凄く引き攣った顔になっていたので、秋穂は内心でびくびくと震えながら、ありがたくかれの手料理をいただきつつ、話をすることにした。
「――ほオ、神様ときたか……そりゃアまた、いかにも厄いねエ」
　秋穂の語る田舎での冒険を一通り聞き終えたアルバは、いつもの悪そうな笑みを更に深めると、肩を竦めてそう嘯いた。ムルトも、驚きに目を丸くし、口をあんぐりと開けている。
「今のアキホくんはもうすっかり虎に戻ってるみたいだけど、確かにオイラたちが探してるのと似たエネルギーの気配を感じるね」
　秋穂の腕や背中をぺたぺたと触りながら、黄色い仔竜は感嘆交じりにそう呟く。当の秋穂は供されたニンジン料理をぽりぽりと頬張りながら、自分の身に起きた変化を改めて思い返す。
「うん、その神様――デカチン様のチカラをね、ちょっとだけ使わせてもらえるようになったっぽい。見ててね……」
　そう言うが早いが、かれは穿いていたズボンを下着ごとずらし、ふたりの目の前に皮被りの逸物を曝け出す。
「わぁっ！　なんかまた大きくなってない？」
「ううん、まだまだ！」
　にやっと笑いつつ、秋穂はちんぽを揺らし、一気に勃たせていく。みるみるサイズを増していくそのカタチは、太く節くれ立った幹と平らに広がる先端の、馬ちんそのものだった。

「ほら、スゴいでしょ‼　アルバに教えてもらった変身のコツを思い出したら、できるようになったんだ！」
　得意げに鼻息を荒げる秋穂に、アルバもその紅い手をぱちぱちと叩いて喝采する。
「いやア、良いねエ！　スーシャのそういうチャレンジ精神、大好きだぜ」
「へー、馬ってこんな感じなんだ！　オイラたちのとも形が違って、すごく面白いね……！　それに、えへへ、この匂いを嗅いでると、涎が出ちゃう」
　目にハートを浮かべて舌なめずりをしだしたムルトを横目に、アルバは少しだけ真剣そうな顔を浮かべる。
「にしても……現実改変までやらかすとなると、いよいよドーマが喜びそうな魔法の話になってくるな。記憶だけじゃなく、それに纏わるモノも、スマホの電子データにまで及ぶ能力、かア。……それも本調子じゃない状態で、だろ？」
　ぶつぶつと呟く様子を心配そうに見ていたふたりの視線に気付いたのか、紅い仔竜はすぐにいつも通りの軽薄な笑いを浮かべ直すと、秋穂の肩をばしばしと叩いた。
「まアいい。デカい収穫には間違いないしな。もし良かったらそのデカチン様のこと、それから馴ってヤツのことも、教えてくれよ」
「もちろん！　まだまだいっぱいお喋りしたいからね。ふたりのいた世界の話も、もっと聞きたいな！」
　秋穂がうずうずした様子でそう言うと、ムルトは照れ臭そうに頭を掻きつつ口を開く。
「オイラたちの故郷も、ちょっと前までは色々大変だったんだけどね。アニキたちのおかげで最近ようやく落ち着いてきたから、こんな風に余所へ旅するのも、ドーマみたいなお客さんを迎えるのも、できるようになったんだ」
「とか言ってるコイツも、向こうじゃそれこそ神様扱いなんだぜ？」

「そーなの⁉　すげ〰〰……っ‼」
純度百パーセントのキラキラした視線をぶつけられて、ムルトは含羞（はにか）みながら手を振る。
「さすがに言い過ぎだよ。オイラなんて、まだまださ」
そう謙遜（けんそん）しつつ、黄色い仔竜はその筋肉質な手をぐっと握ると、言葉にやる気を漲（みなぎ）らせた。
「……でも、みんなの期待に応えられるくらい立派な巨竜になりたいから、これからも精一杯がんばるよ！」
張り切るムルトに比べて、アルバはいかにも億劫（おっくう）そうな態度でふんぞり返っていたが、その決意表明を迂遠（うえん）に肯定するように嘯（うそぶ）く。
「ま、そのためにも、もうちょいここで調査を続けねエとな。それも済んだら……そうだな、スーシャも一緒に、向こうの海でも行こうぜ」
その提案に、秋穂は両手をがばっと挙げて嬉しげに声を弾ませた。
「海！　サイコーじゃん‼　――約束ね！」
「うん、もちろん！　アキホくんのこと、アニキたちにも紹介できる日が待ち遠しいよ」
「……一応言っとくが、色々搾（しぼ）り取られねエようにだけ、気イ付けるんだぜ？」
そんな風にして、虎の男児と仔竜たちの会話はいつ果てるともなく続くのだった。
後のことは――また別の、ものがたりだ。

（了）

寄稿作品
GUEST WORKS

あじゃねぎし

167

むじな

168

クロマ

169

あじゃ
ねぎし

31
THE HORSE FACE

付録

APPENDIX

デザイン・イラスト：てんぷら

アキホ　スーシヤ
秋穂　枢沙

10月13日生まれの天秤座。小学四年生。基本的に脳天気で活発、好奇心旺盛で、とりあえずなんでもやってみるタイプ。甘い物とムキムキのお兄さんが好き。勉強は全般的に苦手だが、特に算数に弱い。足は遅く、スタミナもあまりない。

好きなものは待ちきれずに先に食べてしまう。でも割と好物が多いので幸せ。

ハルマ　ジユン
春間　馴

4月20日生まれの牡牛座。小学五年生。純朴で引っ込み思案な性格。おどおどした喋り方のうえに、方言が混じりがち。基本的には真面目で常識的だが、意外と頑固な面もあり、好きな相手に対する執着心は強め。むっつりスケベでもある。

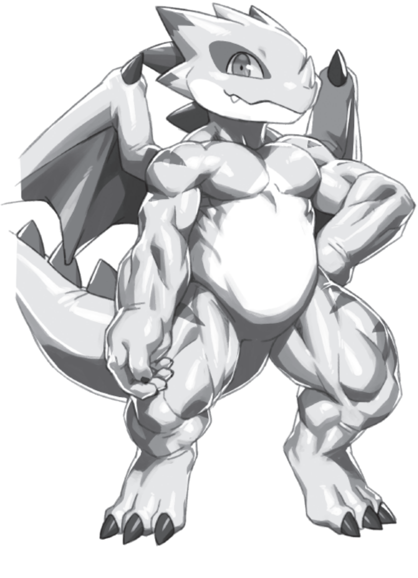
好きなものは最後まで取っておいて、食後も余韻を楽しみたい。だいぶ偏食気味。

緋米田（ヒメダ） 或葉（アルバ）

　本当の名前はアルバ・ピメンタ。軽薄、冷笑的を絵に描いたような言動で、自他共に認めるトラブルメーカーだが、真面目な素が出がち。一人称を使いたがらず、ヘラヘラした喋り口で、皮肉や露悪っぽい語彙を多用する。手先が器用で大抵のことはそつなくこなすが、料理だけは不得手。

　好きなものはさっさと食べる派。大勢で食べるのもいいが、一人でゆっくり食べるほうが性に合う。

久留熊（クルクマ） 群斗（ムルト）



　本当の名前はムルト・クルクマ。明るく、いつもにこやかで人懐こく、初対面のヒトとも早めに打ち解けて可愛がられやすいタイプ。一人称は「オイラ」で砕けた物言いが多いが、改まった場では敬語も使える。料理をしたり細々した世話をしたりするのも得意。

　好きなものは家族や友達とシェアしたがる。みんなと食べられるならなんでも好き。

デザイン・イラスト：クロマ

あとがき
COMMENTS

皆様こんにちは、栗山陸と申します。
この度は本書をお手に取りいただき、
誠にありがとうございました。

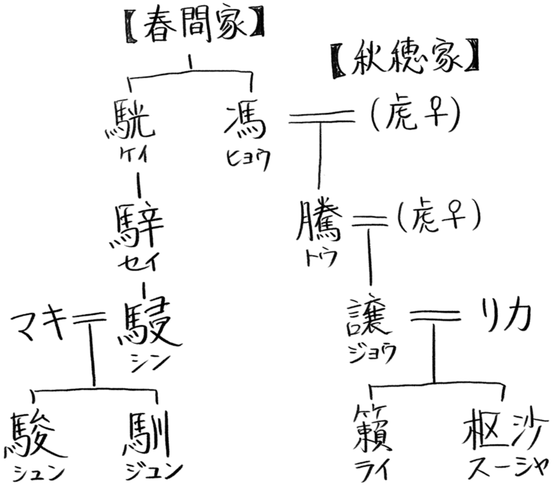
本書の内容は、2021年9月にサークル「うさぎとくま」様
にて発行された"スリット初体験合同誌"へ寄稿した
短編に加筆・修正を加えたものと、その続編として
新たに執筆したものとなっております。
折角の午年でもあり、(馬ちんが大好きなのもあって、)
今回は新たに馬の仔をデザインしていただきました。
魅力を感じられるようなキャラになっていれば幸いです。

それでは、またどこかでお会いしましょう!

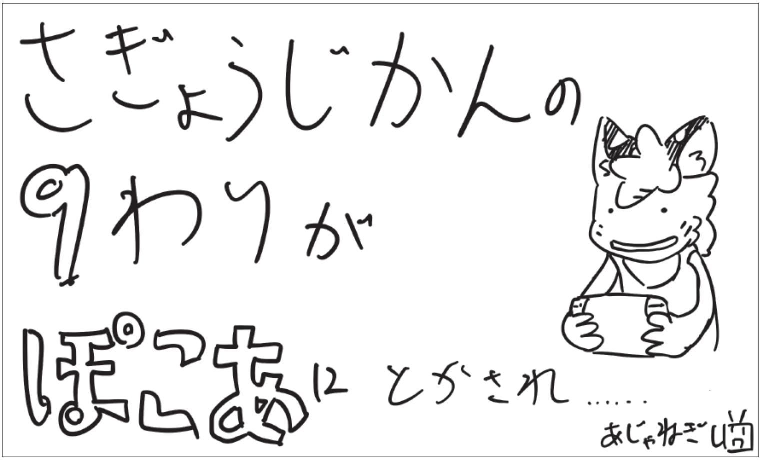
令和8年 丙午 大阪にて

栗山陸

春間家・秋徳家　家系図



寄稿者コメント
GUEST COMMENTS



今回もお招きいただきまして
ありがとうございます～！
色々遅刻してしまいスミマセン

今回はアルバくんを
好きに描かせていただきました～
本来マスコット体形らしいですが
ムキムキに魔改造しがち

なんとなくでかいのばかり描いてる
印象を持たれがちですけど
筋ショタっぽいのも同じぐらい好きなんです

2026年 3月 クロマ

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは、いっさい関係ありません。

本書は性的な内容を含みます。
18歳未満の閲覧はお控えください。

本書の一部または全部を無断で転載、転売、
インターネット上へアップロードすることを禁止いたします。

タイガー・タイガー・ロンピング・ハイ
Tiger, Tiger, Romping High

2026（令和8）年　4月 23日　PDF版 発行

作者・発行人　栗山 陸　©Riku Kuriyama 2026

カバーイラスト　てんぷら

ゲスト（五十音順）　あじゃねぎし　クロマ　むじな

発行サークル　ワリュウドウ

連絡先
@tigrr_
@tigrr.bsky.social
http://wa-ryu.net
mail@wa-ryu.net

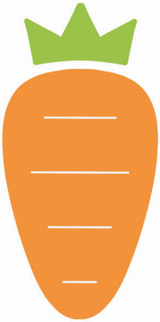
ISDN278-4-872230-02-1 C0093

2784872230021

2920093010008

ISDN278-4-872230-02-1

C0093 ¥1000E



ワリュウドウ